

関山

かんざん

第23号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア

「道心 菩提之翼」 貫首 山田 俊和 書 9

「平泉世界遺産の日」シンポジウム

〔基調講演〕 鈴木 文彦 10

「文学の効能」

〔パネルディスカッション〕

「心に残る日々」～東北の山河～

パネリスト 鈴木 文彦・遠藤 公男

田中さか江・泉 伸弘

コーディネーター 佐々木邦世 26

中尊寺 十年の展望

～落慶供養九百年を目指して～ 菅原 光聰 43

第五十六回 平泉芭蕉祭全国俳句大会

特別講演

「芭蕉 晩年の十年」 石 寒太 50

風信／語録

「翁」を語る 佐々木邦世 68

まわり道 岩渕真理子 70

黎明 小野寺律子 72

震災から今日まで 山田 清隆 74

平泉らしさを求めた二年間 藤澤 義人 82

訪日外国人観光客誘客について 破石 晋照 89

八月十四日のこと 北嶺 澄照 93

東日本大震災七回忌法要を厳修 千葉 亮賢 96

叡山講福聚教会

「東日本大震災物故者七回忌慰霊法要」と

「平成二十九年東日本奉詠舞大会」 菅原 光中 98

東日本奉詠舞大会で感激

石徹白虚空蔵菩薩と伊勢神宮参拝の旅 鈴木のり子 100

《報告》中尊寺光勝院建設事業

中尊寺寺子屋と「紅葉銀河」 菅野 澄円 102

《転載》「声明の夕べ」―岩手日報の記事より― 清水 秀法 105

寒行について 横田 恵子 106

関山植物誌〈8〉 佐々木宥司 108

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕 破石 晋照 109

東日本奉詠舞大会とこの一年 三浦みゆき 111

新刊紹介

関山句囊・歌籠

御神事能番組

陸奥教区宗務所報

執務日誌抄

御奉納者御芳名

浄財御奉納者御芳名

赤堂稻荷鳥居建立寄進御芳名

不動尊篤信御奉納者御芳名

〈表紙〉 古楽面「翁」 中尊寺所蔵 114



天台座主猊下御親修 東日本大震災七回忌並びに復興祈願法要
(平成29年3月6日)

第40回中尊寺新能（8月14日）



『翁』『天の拍子』を踏む 喜多流能楽師 佐々木多門師（撮影：石田 裕）



三番叟は破石晋照（山内金剛院副住職）が舞台を勤めた。「烏飛び」の場面。



東日本大震災慰霊供養之塔 開眼法要
（平成29年3月6日）



「経蔵法楽～声明の夕べ」

10月28日、11月4・11日の3日間行われた。経蔵へと向かう出仕僧。

中尊寺一山子弟得度式



得度式は仏門に入り僧侶になるための儀式。一山積善院の祐輔さん(写真上)が9月30日に、薬樹王院の航成さん(同下)が11月4日に得度、天台宗の新発意に。



東日本奉詠舞大会 (11月16日)
中尊寺支部が舞踊の部で最優秀賞を受賞した。



「越中おわら」奉演 (3月4日)
東日本大震災で亡くなった人々の鎮魂を祈り演舞を奉納した。



紅葉銀河 10月28日から11月12日まで参道の紅葉が照らし出された。

三陸郷土芸能奉演（9月23・24日）



城山虎舞（大槌町）



入谷打囃子（南三陸町）



南川目さんさ踊り（宮古市）



地元園児による「謡」（11月3日）
平泉二葉きらり園の園児35名、元気よく。



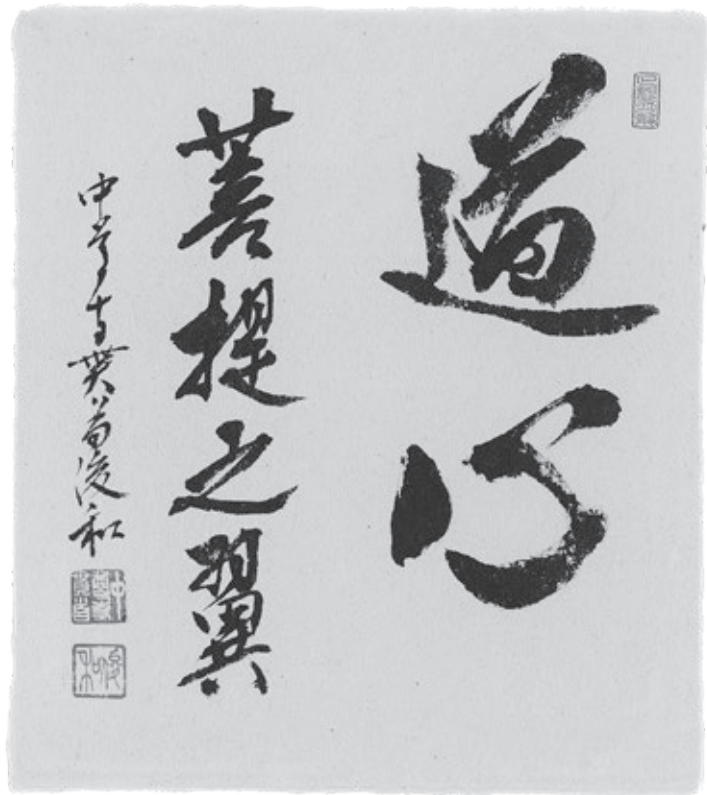
「金色の風」奉納式（11月2日）
昨秋デビューした県産最高級ブランド米「金色の風」。栽培地となった平泉、一関、奥州、金ヶ崎各市町、県、各JAの関係者が参列した。



「平泉世界遺産の日」平和祈願法要（6月17日）



栃木県壬生寺の円仁太鼓奉納（8月19日）



貫首 揮毫

「道心、菩提之翼」(如意輪講式「第七門より」)



写經奉納式 (11月10日)

本堂での法要後、手に供養法具を持ち金色堂へ向かう参加者。



女声合唱団しらたま奉演 (10月13日)

「文学の効能」

講師 鈴木文彦先生

司会 本日の講師、鈴木文彦様をご紹介します。鈴木様は元文藝春秋常務取締役を務めていらっしゃいました。簡単にプロフィールを紹介させていただきます。鈴木様は盛岡市の出身で、早稲田大学法学部を卒業後、一九六九年に文藝春秋に入社し、「スポーツ・グラフィックナンバー」、「オール读物」の編集長、文芸編集局長を歴任されました。二〇〇一年退社後は北の文学の編集委員や紫波町の野村胡堂・あらえびす記念館の運営委員も務められていらっしゃいます。また日本ペンクラブの監事や岩手県人連合会会長も務められていらっしゃいます。それでは鈴木様、本日は「文学の効能」と題しまして、ご講演をよ

ろしくお願いいたします。

鈴木 ご紹介いただきました鈴木です。

私は一介の元編集者であります。しかも文芸という一分野の雑誌の編集をしてまいりました。物を創る、創造する作家、表現者でもなく、学問としての文学の研究者でもありません。

ですので、これまでのこの会で登壇された先生方のように有意義な、為になる話にはならないことを、まずはご了承ください。

では、出版社の編集者とは何者かということ、を少し具体的に申しますと、作家すなわち「書き手」と、「読み手」――一般読者の間に居て、掛け橋のような存在といえますか。読者の代表といえますか。要するに読む側で、ひらすら読んで、良い書き手を探し、良い作品を書いてもらうのを業としています。

その中でも雑誌編集者は、最前線にいて作家から原稿を取らなければなりませんので、作家との接触が一番多いといえます。岩手の作家の



基調講演（中尊寺本堂）

方々でも、三好京三さんをはじめ、中津文彦さん、小野寺公二さん、高橋克彦さん、内海隆一郎さんの担当で、原稿をいただきました。阿佐田哲也さんの色川武大さんには仕事を越えて私淑し、一関移住のきっかけに関係しました。残念ながら、あつという間にお亡くなりになったのはご承知のとおりです。

前おきが長くなりましたが、今日は、職業柄携わることができた作家とのエピソードをご紹介します。進めていきたいと思えます。

演題に「小説の効能」ではなく「文学の効能」としましたのは、小説に限らずに随筆など文学全般の意味と、「効用」と「効能」では「ききめ」という意味では同義でも、「効用」には「役に立つこと」と広辞苑にあったので、それじゃないな、役に立つなんておこがましいな、という一点で「効能」にした次第です。

なぜこんな拘り（こわ）を持ってタイトルにしたかというところから始めます。

『井上ひさしから、娘へ 57通の往復書簡』（文

藝春秋）が今年四月に刊行されました。七年前に亡くなった井上ひさしさんが、次女の井上綾さんと五年にわたって毎月掲載し合った手紙形式のもので。千葉・市川の小さなタウン誌「月刊いちかわ」に発表されていたということもあり、私も本になって初めて知りました。

驚いたのは、ひさしさんが肺癌を宣告され治療に入る直前まで、亡くなる半年ほど前まで書きつづけていたことです。

三姉妹の中で一番の本読みでありながら、「一番のはぐれ者」を自称し、社会の不適合者、摂食障害で体が思うように動けなくなり、死を考えていた時期もあったという娘の綾さんに、父ひさしさんは書簡という形式の書く作業を薦めました。一回目に、

「手紙の形をとりながら、わたしの小さかったころのことをできるだけ正確に書くことにしよう」と、そう思い立って、これがその第一便です。」と始まります。これに対して、生まれて初めて筆を執った綾さんは、

「うんと落ち込んで暗くなった5月の初め、受話器越しに父が私にこう言ってくれた。いつもは『綾くん、大丈夫？』とか、『頑張りすぎては駄目だよ』と言っていたのに、5月3日深夜は『頑張れ！』『自分一人生かしておくのに何を怖がる必要があるんだ？ ガンバレ』と。／＼これが私には効いたのです。そうだ。何を怖がる必要がある。目の前が開けたようだった。さて、これが第一便の私の返事になっているでしょうか。」

と返しています。

ひさしさんのさすがなところは、相手への問いかけです。自分の小さかったころの話をすることで、綾さんの子供のころの目線と一緒になっている。そして、そこにはひさしさんのお母さんの井上マスさんが登場します。マスさんはみなさんもご承知と思いますが、岩手県と大いに関係があります。山形の川西町から子供三人を抱えて飛び出し、一関でヨイトマケをした

り、釜石で屋台を引いたりした遅いモーレッツ

お母さんです。『人生は、ガタゴト列車に乗って』の著書でもお馴染みです。綾さんはそのお祖母さんっ子でもあり、一緒に生活した懐かしい話が弾んでいきます。

こうして最初は柔らかい言葉を投げ、受けることから始まるわけです。そして言葉という極上のボールを投げ合う二人のキャッチボールがつづいていきますが、中ほどの23通目では、

「文章の下手なこの私、どれだけ素直に、飾らないで、自分の思いを伝えられるか、思いと文の間が、できるだけ近くなるように、できれば間に何も無いように、書いてみました。」

と応えるまでになっている。これまでひたすら書物の海に漂っていた経験が、どんな花開いていくのが分かります。

井上ひさしさんは、小説家であり、劇作家であると同時に、日本文学の偉大な教育者という面もあります。

『私家版日本語文法』や『自家製文章読本』などたくさん日本語研究の著書を残したばかり

でなく、書斎から外に出て、一関・文学の蔵や仙台・文の會、鎌倉の文章教室などの市民作文講座を実践した人でもあります。

マンツーマンの父娘のプライベートレッスンには、書くという作業がもたらす効果、効能があり、綾さんへの再生の処方箋として有効だと思われたのでしょうか。

ここで話は少々横道に逸れます。

先日新聞に載っていた批評家の若松英輔氏の「思索への確実な道」という随想を紹介しましょう。

「本を多く読むのと深く読むのとは、まったく異質な経験である。その違いは『読む』を『食べる』と置き換えればすぐに分かる」

として、哲学者ショーペンハウアーが、近代人が陥りがちな多読をいさめている、とあります。

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復

的にたどるにすぎない。習字の練習をする生徒が、先生の鉛筆書きの線をペンでたどるようなものである。」

というショーペンハウアーの言葉を引用し、「この哲学者が私たちを誘おうとしているのは読書という習慣ではなく、思索の営みだ。」

と記しています。そしてその思索の道として上げるのは、「書く」こと。「読む」と「書く」を繰り返すことで認識が生まれ、自分が何を考えているかを知るのだ、と。

井上ひさしさんが行なった往復書簡は、まさにこの指導だったと言えます。

この本が世に出るまで七年かかりましたが、おかげで今年、思わぬ贈り物が届けられたような、そんな至福を味わっています。

井上ひさしさんの話をもう少しつづけます。私は、入社五年目の昭和四十八年に週刊文春のグラビアの仕事で、初めてお会いしました。当時「終末から」という雑誌に「吉里吉里人」を

執筆していたときで、「あの吉里吉里語の方言もルビなしで全部音読できます」などと岩手生まれを売り込んだ記憶があります。その後も何度かお会いできる機会があったのですが、担当編集者としてお近づきになったのは、昭和五十七、八年からです。

今回の「効能」というテーマで思い出したことに、直木賞の選考会のことがあります。年二回、私たち日本文学振興会が選んだ候補作を井上さんたちに選考してもらいます。そのときに、井上さんの特権で一作一作の講評を実に細かく丁寧に教えてもらう機会に恵まれました。それが選考会での発言になり、選評という形でオール讀物に掲載されていくわけですが、一つのテクストを通して読み方の個人レッスンを受けていたと言えます。

当然小説の読み方は人それぞれで、池波（正太郎）さんはこう読むだろうな、とか、五木（寛之）さん、渡辺（淳一）さんは……、と選考会での議論の中で教えられることは多々ありまし

た。

「作家は読む人間と書く人間の二人を同居させている」といいますが、井上ひさしさんとはとりわけ「読む人間」の名人でした。山形・川西の遅筆堂文庫に収めた二十三万冊もすごいですが、多読だけでなく精読の証明の一つが『井上ひさし全選評』（白水社）です。これは、先ほど申し上げた直木賞を含むあらゆる文学賞、コンテストでの選評を集めた本です。

ここには、候補作の分析、候補者に対しての励まし、注文が実に丁寧に記されています。

芥川賞、直木賞のいいところは、それぞれ十名ぐらいの第一線の現役作家が互いの文学観を出し合う場だということです。評論家はいません。作家同士が真剣勝負で臨みます。勢い読み込みが鋭く深くならざるを得ません。

ここに文学志向の方がいらしたら、是非参考に読まれることをお勧めします。

五木寛之さんにも『僕が出会った作家と作品』（東京書籍）という選評の本があります。お二

人はかなり重なつた文学賞で選考をしていますので、読み比べてみるのもよいでしょう。

私も、二年ほど前から「北の文学」という岩手日報社主催の同人雑誌のコンテストで、選考を経験しております。

ただ読んで評価するばかりでなく、選評を書き、発表する作業もあります。メモぐらいいは、長年記してきましたが、文章にしてまとめ、応募者に読後評を提示するのは初めてでした。

「読む」ことから「書く」ことの一端に触れた思いがして、いい経験になりました。

*

作家が語る「文学の効能」についてお話ししたいと思います。

その作家は藤沢周平さんです。

藤沢さんは昭和二年の暮れに山形は庄内地方鶴岡の近郊の農家に生まれました。物を書くのは母系の血であろうとエッセイにあります。

それと二人のお姉さんが読んでいた雑誌や面白い娯楽小説に親しんだことと、鶴岡にいまも伝わる論語の素読などの庄内の教学の環境もあって本に親しんでいきます。そして山形師範に行き、昭和二十四年に郷里の湯田川中学の教師になります。

ここでの二年間は、まさに水を得た魚のごとく素晴らしい教育をされたのですが、肺結核を病んでしまいます。この病気がなければ教育者として尊敬された一生を過ごし、詩人にはなつたかと思いますが、小説家藤沢周平の誕生にはたぶん至らなかつたでしょう。

昭和二十六年に発病し、二十八年に上京して手術を受け、五年間の闘病生活を送ります。その間に俳句を学んだり、詩や戯曲を書いたり、囲碁やギターを覚えたりして、後に「療養所は『人生の学校』だった。大学に行ったようなものだ」と述懐しています。

ただし、完治し、本人は再び教壇に戻るつもりが、肺結核の教師の道はとぎやられてしまう。

再就職先をやつと探した先が、東京での業界紙の仕事でした。

二、三転職して「日本食品経済社」に就職したのは昭和三十五年。退院して三年目でした。前年に悦子夫人と結婚しています。

このハムソーセージの業界紙の仕事が、物を書く鍛錬になり、習慣になったと言っています。が、このころから生活も安定して小説の執筆もはじまります。

悦子夫人は、藤沢さんが小説を書くことを喜び、応援します。作家になって欲しいと強く望んでいたと言われています。

記録に残っている最初は、昭和三十六年五月二十八日夕刊に「読売短編小説賞」の応募の発表が掲載され、その中に予選通過作として本名の小菅留治「高価なお菓子」があります。題名で分かるように現代小説ですが、内容の確認はとれていません。

こうしてこの「読売短編小説賞」に二十枚(四百字)以内の現代小説の投稿をしていき、二年

半ほどつづきます。

翌年の三十七年には大衆倶楽部雑誌「読切劇場」『忍者小説集』などに、はじめて藤沢周平のペンネームを使って時代小説を書きます。こちらは、応募ではなく注文されての依頼原稿です。

いま分かっている作品はだいたい四十枚から五十枚の十五篇の短編で、『無用の隠密 未刊行初期短篇』に収められています。この作品群は藤沢さんの没後に明らかにになりました。

昭和三十九年八月号の「無用の隠密」を最後にこの高橋書店刊行の雑誌発表は止めてしまいます。そして間をおかずにオール讀物新人賞への応募に切り替えます。すぐに「北斎戯画」で昭和四十年六月号発表の第二十六回新人賞の最終候補になります。

ここまでで、無名時代の藤沢周平の足跡をいったん止めます。というのは一見、サラリーマン生活をしつつ執筆活動をつづける、よくあ

る小説家志望と読めるからです。ところが実情は違います。

昭和三十七年夏に「暗闘風の陣」を「読切劇場」に発表したのを皮切りに「如月伊十郎」^{きげいじ}「木地師宗吉」を書き、読売短編小説賞に「赤い夕日」が選外佳作となり、選者の吉田健一氏から「今回の応募作品にはいいものが多かった」、五編中どれが受賞してもおかしくはないと評されて、大いに自信を得た時期のころです。

結婚四年目の昭和三十八年二月に待望の長女^{のぶこ}展子さんを出産して間もなく、悦子夫人は体調を崩して入院します。そして進行性の癌を宣告され、藤沢さんは乳のみ子を抱えながら治療薬を探し、必死になって病院を探すのです。

そして悦子夫人の闘病中の三十八年に、実に九本の短篇を発表していることに驚かされます。どうやって書いていたのか。なぜ書けたのか。最近分かったことですが、乳のみ子の展子さんは郷里に預かってもらい、孤独と闘い、ときには夫人のベッドの脇で小説を書いて会社の

往復をしていたといいます。

しかし、ついに十月に帰らぬ人になってしまいます。わが子誕生の幸せから、八ヶ月後のことでした。まさに天国から地獄への変転でした。「半生の記」のエッセイから引用します。

「そのとき私は自分の人生も一緒に終ったように感じた。死に至る一部始終を見とどける間には、人には語れないようなこともあった。(中略)しかし私はまた、死者がいくらあわれでも、そういううしろ向きの虚無感に歯止めもなく身をゆだねるのは好きでなかった。私には子供がいて、感傷にひたっている余裕はなかった。」

そして、母上に上京してもらい、会社の人々の助けもあってどうにか社会生活を送ることができた。「半生の記」にあります。引用をつづけます。

「しかし胸の内にある人の世の不公平に対する憤怒、妻の命を救えなかった無念の気持は、どこかに吐き出さねばならないものだった。」と。また別のエッセイ「転機の作物」では、

「(初期の作品について) 私は、ある、ひとに輕輕しく言うべきものでないために、心の中の鬱屈は、いつになっても解けることがなく、(中略)物語という革ぶくろの中に、私は鬱屈した気分をせつせと流しこんだ。そうすることで少しずつ救済されて行った。」とあります。

そして昭和四十四年に和子夫人と再婚し、オール讀物新人賞に挑戦して七年目の四十六年に「涙い海」で受賞にたどりつきます。ただ「涙い海」も、直木賞四度目で受賞した「暗殺の年輪」もハッピーエンドの物語ではなかった。だが徐々に「鬱屈がまったく解消されたわけではないにしろ、書くことによってある程度は癒され、解放され」ていく。この辺りまでを「負のロマン」の作品と定義されていますが、昭和五十一年になり、「用心棒日月抄」では、ユーモアの要素が入ってきて、いわゆる「転機の作物」と呼ばれる変化が見られるようになります。

藤沢周平さんほど、小説を書くという行為を

生きていくための救済だったと率直に言い、それに真正面に向かいあって吐露した作家はいないのではないかと、思います。

しかも追い求めた小説が深刻ぶった純文学ではなく、面白さを求めた直木賞系の時代小説だったことが稀有な点といえます。

評論家・向井敏氏が指摘しているように、長・短篇あわせて二百四十三篇ある中で、『蟬しぐれ』『風の果て』『用心棒日月抄』『橋ものがたり』『三屋清左衛門残日録』『白き瓶』『一茶』『隠し剣』シリーズなど傑作は数多いけれど、駄作は一本もないということ。これは、小説を書くことが自らが生きる救済を意味していたことに基いているからではないでしょうか。命がけという言葉は藤沢さんに似合わない気がしますが、文学に向かう覚悟が特別のように思います。

付け加えますと、この精神にプラス何度も書き直す作業をくり返しつつ書いていたということです。地道な、相撲でいえば四股を踏む基本の稽古を若い頃からつづけ、直木賞受賞作の「暗

殺の年輪」までも冒頭から五枚目くらいまで、十回ほど書き直した草稿があります。

その二年前の「涙い海」の受賞について書いたエッセイ「私の修業時代」に、「ある年に書いた小説は、いつもと違っていた。それまで書けなかったような文章が書けただけでなく、書いている物語の世界が手に取るように見えた。その小説開眼のようなものは突然にやって来たけれども、ずっと書きつづけていかなかったら訪れなかったものだろう。」

とあるにもかかわらず、です。この稽古の実践があつて、幅広く自在に書ける文体を獲得していったにちがいません。

*

文学を読むことで受ける感動やら衝撃は、それぞれの方が少なからず経験あるでしょう。

先日新聞で目に留まった記事がありました。「この一冊に出会えたから」というテーマのア

ンケートに読者が応えたものでしたが、その中で俄然異彩を放っていたのは四十歳代の女性の回答です。連城三紀彦著「私の叔父さん」という短篇をあげ、そのコメントに「恋愛に目覚めた」とありました。どう目覚めたのか、そのひとはどんな女性なのか、と妄想はふくらみましました。

なぜ私が強く反応したかと言うと、この作品が収録されている『恋文』という短篇集は直木賞受賞作ですが、恋愛小説の傑作で、人に薦めて思いを共有したいと思っていた作品だったからです。

もう一作、友情の証あかしに、そつと教えたいと思っていた作品が、ロバート・キャパの『ちよっとピンぼけ』でした。有名なカメラマンの第二次世界大戦回想録ですが、ロマンに溢れて「ピンキイ」という女性とのラブストーリーも素敵です。秘かにそう思っていたところ、向井敏氏の文章に出会いました。

ダヴィッド社という写真集を主に出している

小さな出版社の本で、目立たずにいた貴重な本だったのに、文庫文庫に入ってしまったって折角の楽しみを奪われてしまったと嘆いていたのでした。自分とまったく同じ反応に嬉しくなって、以来向井ファンになりました。

本を介して同好の士を見つけるのは、大きな喜びです。

効能パワというより力に圧倒されたという点では、照井翠さんの句集『龍宮』との出会いがあります。

照井さんが、三・一一を釜石で体験して詠んだ震災俳句です。この句集は絵本を被災地に提供する活動をされていた末盛千枝子さんに教えてもらったのですが、本が売切れですぐには読めませんでした。そのうち作家の池澤夏樹さんが週刊文春の読書コラムで大きく取り上げて紹介してくれました。

釜石高校の国語教師だった照井さんの、これまでの俳句のイメージを一新するような力強い

言葉の力に心が揺さぶられ、版元の角川書店社長角川歴彦氏に重版を頼んで、やっと手に入れることができました。ご存じの方が多いいでしょうが、いくつか挙げてみます。

三・一一神はみないかとても小さい

なぜ生きるこれだけ神に叱られて

双子なら同じ死顔桃の花

しら梅の泥を被りて咲きにけり

卒業す泉下せんかにはいと返事して

泥の底繭のごとくに嬰と母

また俳句といえば小林一茶に一時ハマりました。きっかけは田辺聖子さんの『ひねくれ一茶』です。ご存じ文化文政時代の、長野柏原から江戸に出て晩年に再び戻る俳諧師を描いている評伝小説です。

この江戸文化の爛熟期の世相を背景に、〈名月や江戸の奴らが何知って〉のひねくれ句から、〈猫の子のちよいと押へる木の葉かな〉の童心

あふれる句まで、二万を超える句を詠んだ一生を、俳句を巧妙につかかって新しい散文世界を作り出しました。父の死後十二年間、義弟と遺産相続争いをし、ついに半分むしり取った男、五十一で初めて嫁をもらい子作りに励み、三人目でやっと望みが叶うという人間味溢れる一茶像を活写しています。

この作品で吉川英治文学賞を受賞しています。選評の中で水上勉氏が、「お前、何をしているか、と頭をどやされる思いの叱咤鞭撻をうけた。すぐれた作品だ」と述べ、五木寛之氏は文庫の解説で、

「『兜を脱ぐ』という言いかたがあるが、いまどきの若い人たちには通じるかどうか。こいつはとてもかなわない、と、白旗をかかげて降参することである。田辺聖子さんの『ひねくれ一茶』を読み終えたときの私の心境が、まさにそれだった。」

と絶賛しています。ライバルの同業者をこうまで誉める例はあまり見たことがありません。

小林一茶は藤沢周平さんも『一茶』を、井上ひさしさんも『小林一茶』を戯曲として書いていますが、ひさしさんはほかに石川啄木も宮沢賢治も戯曲にしています。

吉村昭さんの『海も暮れきる』も傑作です。尾崎放哉という大正時代の自由律の句で知られる漂泊の俳人を描いた評伝で、小豆島での最期の八ヶ月に凝縮してすさまじい生き方を描いています。「咳をしてもひとり」「いれものがない両手でうける」。

藤沢周平さんの歌人・長塚節を書いた評伝『白き瓶』は、私が担当で原稿をいただきました。石川啄木に興味をお持ちだったので、お願いに行ったところ、その前に長塚節を書かせて欲しいと熱望された作品です。農家という共通項があり、戦前から『長塚節 生活と作品』という本を座右の書として何度も読んでいたとのこと。骨の折れる傑作といわれる力作が生まれたわけです。

同じように渡辺淳一さんにも『君も雛罌粟

思いあたりました。もちろん、小説家をモデルにした評伝も数多くありますけれども。

渡辺淳一さんで思い出したことがあります。渡辺さんには日本初めての女医荻野吟子を書いた『花埋み』、歌人・中城ふみ子を書いた『冬の火花』、野口英世の『遠き落日』、乃木大将の『静寂の声』など伝記小説群があり、『君も雛罌粟——』のときに、素晴らしいですねえ、と誉めたところ不満顔で、評判が良いのはそちらの方で、自分の本領で書きたいのは男女小説なんだよ、と言っていました。

自分にしか書けないもの、資料などに頼らないもの、無から有を生み出す小説を書きたいのだ——と。

この無から有を生み出す名人、と藤沢周平さんが言っているのは、池波正太郎さんです。

娯楽小説、人情小説で出発しながら、次第に歴史小説、史伝といったものに転じるというパターンは、ごく自然な成行きで、大佛次郎、吉

れも雛罌粟』という与謝野鉄幹と晶子夫婦を描いた評伝があります。渡辺さん自身、俳句・短歌に造詣が深かったので、啄木を描いてもらおうと持ちかけて、盛岡、渋民、函館、小樽、釧路と取材をご一緒しました。

ところが、いざ執筆開始の直前になって、「どうしても書けないことがわかった。あまりに若すぎた生涯なので啄木に添えない」と中止になったのですが、それから二ヶ月後ぐらいに『君も雛罌粟——』が始まるのです。その切り替えの早さに驚きましたが、啄木を調べていたときに並行して同時代の与謝野鉄幹、晶子も読み込んでいたのでしょう。

最近では正岡子規を描いた『ノボさん』を伊集院静さんが書いています。夏目漱石との交友をまじえた力作でした。

こうして思い出すままに、俳人、歌人をテーマにした評伝小説の傑作を挙げましたが、作家が物語にリアリティを求めようとした場合に、引用に効果がある短詩形が適っているのではと

川英治、長谷川伸などが歩んだ道だが、池波さんは、書き盛りから晩年にかけて、どっしりと虚構の、ひと口に言えば人情ものの創作世界に腰を据えた、と言い、「池波さんは虚構、すなわち想像力こそ作家の生命とと思っていたのではなからうか。そしてその想像力の駆使に、自信があったのではなからうか。」と書いています。

池波正太郎さんには鬼平犯科帳の第七十九話の「高杉道場・三羽鳥」から担当編集者で計七年間出入りして、東京下町の人情やルールを教えてもらいました。『青春忘れもの』や『食卓の情景』などのエッセイのファンだったので、少々は知ってはいましたが、編集者の特権で直かに教育されました。ご近所の迷惑を考えると、他人の時間を無駄にさせちゃいけない、段取りは職人の命などなど、地方育ちののんびり屋の私には新鮮なことばかりでした。

鬼平犯科帳にも語録があります。

「悪を知らぬものが悪を取りしまれるものか」「女という生きものは、過去を忘れきって、現

在に生きるのが天性だという」

ほかに、「急ぎばたらき」「畜生ばたらき」などの造語も、「盗まれて難儀するところからは盗まない、殺さない、女を犯さない」という三条の掟を守る盗賊の美学も、池波さんの粋が小説に投影されているといえます。

本所の鋏、相模の彦十、大滝の五郎蔵のネーミングも、盗賊の名前も野槌の弥平、血頭の丹兵衛、蓑火の喜之助など、リズムがあつてスマートな感じがします。

池波さんが長谷川平蔵の存在を知り、火付盗賊改方の小説を書きたいと思いつてから実際に鬼平犯科帳にたどりつくまで六、七年かかっているそうです。なぜかというところ、江戸の世話を書く文章のリズムがつかめなかったと言っています。

この文章のリズム、文体というものが作者の生命線という考えがあります。作家は自身の個性の發揮のためにも懸命に探し、磨く。

池波さんの鬼平誕生の話のように、文体と物

語られる素材、言い換えれば発想される世界が相互に関連しているといえるでしょう。

五味康祐さんの柳生武芸帳に代表される剣豪小説は、戦後すぐの無情な世相を反映するかのように、命と命が斬り結ぶ緊迫の場面に独特の律動を与える文体で書かれています。

「ゆっくり、兵庫介は歩き出した。」「ヒラリと跳躍して武蔵は芒の叢がりを背に、つと停つた。」さきに動きが、音があり、あとから主語の文体で、読み慣れない人から見ればある種の悪文です。ですが、リズムに乗れば躍動感がたまらなくなるのです。

ほかに、このような文体の効果の例は、枚挙にいとまがないでしょう。

ということは、文学の世界では、芸術全般もそうでしょうが、何でもありの自由で、マニュアルのような常套こそが軽蔑され、無価値とされます。

書き手も、受け手も、規範のない自由さを第一の効能とと思っている文学の世界は居心地がよ

く、大らかなものでした。

文学を含めての文化とは、生きていく上でなきやなくてもいいもの、すぐに役立つものではないもの、経済優先の最近の風潮から見れば、後まわしにされがちなものです。

いわば“無用の用”なのです。

しかし、それゆえに大事に守り、継承に務めていかなければならないでしょう。

慣れない話をとりとめもなく話してきまして、へたなまとめをして終わりにしようと、焦るものです。

そろそろ、そんな危険な時間になつてきました。開き直れば、そもそも茫洋とした文学の世界に結論めいたものは似合わないようです。

正しいとか正義とかも、似合わない世界です。「ただし、いいことを信条にしたらあかん。どうせ、でけん、そんな高尚なこと。たのしいことをしたらよろし。ただし、と、たのしい、一字ちがいで、えらいちがいで」

という田辺聖子さんの言葉に、惚れています。書くこともたのしい、読むこともたのしい——、「文学の効能」のオチはこの辺で。

プロフィール

すずき ふみひこ

一九四六年盛岡市生。早稲田大学法学部卒。

一九六九年文藝春秋入社。「Sports Graphic Number」「オール讀物」編集長、文藝編集局長などを歴任。元文藝春秋常務取締役。「北の文学」(岩手日報主催)編集委員。鶴岡市立藤沢周平記念館、紫波町立野村胡堂あらえびす記念館運営委員。日本ペンクラブ監事。岩手県人連合会会長、盛岡ふるさと会会長。

パネルディスカッション

主催

岩手県

世界遺産連携推進実行委員会

会場

中尊寺本堂

「心に残る日々」〜東北の山河〜

司会 ただいまから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。パネリストの皆様をご紹介申し上げます。先ほど基調講演をいただきました鈴木文彦様、よろしくお願いたします。

お隣は、作家で動物研究家の遠藤公男様です。遠藤様は宮古市にお住まいですが、一関市のご出身で、昭和五十一年に『帰らぬオオワシ』で第九回日本児童文学協会新人賞を。昭和五十九年には『ツグミたちの荒野』で第八回日本児童文芸家協会賞を受賞されています。また、日本鳥類保護連盟の総裁賞を受けられるなど、日本野鳥の会の名誉会員としてもご活躍でいらつしやいます。

そのお隣、株式会社ザ・サードアイ・コーポレーション代表取締役田中さか江様です。田中様は、お姉さまが小説

『由熙』で第一〇〇回芥川賞を受賞された李良枝様（故人）で、そのお姉さんと共に、四カ国語情報誌『we're』を編集・出版をされており、二〇〇六年に株式会社ザ・サードアイ・コーポレーションを設立されました。外務省などの官公庁や数多くの有名企業の多言語の翻訳、通訳、そしてウェブサイトの制作などをされています。よろしくお願いたします。

そして、英字誌編集、ニュース翻訳者の泉伸弘様です。泉様は平泉町の出身でいらつしやいます。十五年ほどアメリカのニューヨークにお住まいになっていらつしやいます。一九九八（平成十）年にはコロンビア大学院ジャーナリズムスクールで修士号を取得していらつしやいます。現在は英字誌の編集や、ニュースの翻訳に携わっておられ、著書として『マンハッタンからイエロー・キャブが消えた日』を出版されています。

本日のパネルディスカッションのコーディネーターを、中尊寺仏教文化研究所長の佐々木邦世氏にお願いしております。佐々木さんは中尊寺円乗院のご住職で、『平泉中尊寺・毛越寺の全容』『平泉中尊寺―金色堂と経の世界』



『平泉の文化遺産を語る―わが心の人々』などの著書出版されています。また、地元紙・岩手日報に連載「よみがえる信の風光 平泉『如意輪講式』を語る」を執筆されました。

それでは、よろしく進行をお願いいたします。

佐々木 昨日、夕方六時ごろから、東稲山のほうをご覧になりましたでしょうか。大きな虹が出ましてね、東稲山と観音山の間から虹が出て、ずっと南のほうまでですね。驚きまして、車を停めてもらってしばらく見て、明日、今日のことですね。来られる人が人だから、こんな虹が前の晩から出るんだな、と思いました。それはもしかしたら遠藤先生に掛かったのかもしれない。今日いらしている方の半分以上は、遠藤先生が見えるから、というので来られた方もいるんじゃないかなと思います。

シンポジウムというのは、事前に内容の打合わせをしちゃだめなんで、どうぞ自由に、それぞれの立場から、その年齢から、言いたいくらい言っていたら、それに対してまた別な角度からいろんな話をしていたら、そういう

物の見方が違うんだ、ということをごきんに聞いていただく。そして必ず、聞いて下さっている皆さんの中から質問をいただいで、お話す。これがシンポジウムでございます。

まず遠藤先生からお願ひします。どうぞ。

遠藤 私は六十五年前に十九歳で平泉の小学校に代用教員で赴任して来たんです。そのとき、校庭の南端で雲雀がさえずっていました。受け持ちは五年生、五十四名でした。一人で五十四名ですからね。三クラスあったのですが…。

そのとき私は、一関から…（一関は岩手県の県南では一番開けたところだったんです）一関から来たときに、ああ、在郷（ざいご）だな、と思ったんですね。（笑い）五十四名の子供らがね、服装から髪型から、全体の雰囲気^{雰囲気}が在郷でした。

その当時は宿直勤務もあつて、学校の周りには、宮澤賢治の『よだかの星』のヨタカがキョキョキョキョキョ、キョキョキョキョ、キョキョキョキョキョと一晩中うるさく鳴いていました。それで、校庭の端っこに二羽、三羽といて、赤

い目玉を光らせてヨダカが…。いやあ、たまげたもんだな、と思ったんですね。やかましくて寝られないんです。それぐらいいたんですね。

そして、その在郷の子供らが、本当にすばらしい子供らだったですね。本当に純真でね、そして素直でね、代用教員の私を本当に信頼して、その結果、私は相当鍛えられたんですね、子供らから。

教室の授業は、五十四名もいるとやる気のないものもある。飽きてくると、黒板を持って、毛越寺の大泉ヶ池へね。あそこは柵も何もなくて無料だったんですから。それで、池の周りに黒板を立てて…。いやあ、何をやったかわからないんです。本当に今考えれば恥ずかしい限りですが、そこで皆で腰を下ろして、勉強の真似をしたんです。そして、大泉ヶ池の…、芭蕉の最高傑作ですね、「夏草や兵どもが夢の跡」という、あの句碑があるところに水を落とす板があつて、その板のところにエビがいっぱい。小さいエビと、それからメダカと、そして池の上をギンヤンマが何匹も飛んでいたんですよ。そして山からは鶯が。ウグイスが鳴くと、ホトトギスも鳴くんですよ。いやあ、すばらしかった

ねえ。

境内の端に引揚者のアパートなんかもあつてね。当時、昭和二十七年ですからね、引き揚げて来た軍人の土蔵破りがあつたり、強盗があつたりしてね、世相は全く混沌たる状態だったんですね。そして、教員のなり手がなかつたんです。それで、中尊寺の和尚さんとか、その奥さんとか、そういう人たちが先生をやつていて、若い私が非常にモチたんですね。（笑い）今考えると。

それで、夏休みに、二つ年上の、やつぱり代用教員の人と二人で、この中尊に遊びに来たんですね。お昼に、食べる物がないから、まず、そう麺を茹でて、ざるに載せて、四合ビンにタレも持って、そして月見坂を上がつて来たんですね。自転車の後ろに付けて。杉の木の株のところ景色が良いところに腰を下ろして、二人で食べた。それでもお客さんは一人も通らなかつた。（笑い）三十分ぐらい、実に気分よくて、いやあ、忘れられないねえ。

その当時、ここに池がこうあつて、カエルが卵を産んでいるわけ。それがモリアオガエルというカエルです。今は、もうここでは非常に有名になつているんですね。ココココ

コ、コココココココつて、夜なんかとても良い声ですよ。木の枝の葉っぱのところメスが上がつていって、そこにオスが四、五匹かたまつて、そして泡の巣をつくるんです。今もあります。その薬師堂の池にね。それがもう一カ所。いやあ…、こんなに観光客が押し寄せるようになって、カエルはまだ、ちゃんといるんですよ。

私はこの案内人をしてる関宮治良君に、毎年「モリアオガエルはどうなつた？」と心配して電話を入れると、「今年も卵を二つ産みました」とか、「そつちのほうにも産みました」とか、本当に喜んで教えてくれるんですね。それで安心しているんです。

でも、ギンヤンマはもう、ほとんどいません。それからエビも、メダカも、もうだめです。「いやあ、全然いなくなりやした」と。葉を掛けるからねえ。あそこの松の木。山の景色良くしようとして笹を全部刈つたんですね。そうしたら、ウグイスがいなくなつた。ウグイスがいなければホトトギスも来ないんですよ。そうしたら、松の木がほとんど枯れたような状態になつた。害虫にやられちゃつたわけですね。それはマツカレハというもので、松喰い虫じゃ

なかつたわけ。マツカレハでは木は枯れないんですよ。それで、私がニュースを見て駆けつけて来たときには、もう農薬を掛けたためにトンボだの、ハチだの、アリなんかもたくさん死んでいたんです。ここは観光地だから、松の木が枯れたら大変だから、年に二回葉を掛ける、ついでいうんだね。それでエビとかメダカが全滅したんです。

でも、観自在王院の池には葉掛けないんで、エビもメダカもまだいる。エビは、この辺一帯では、県南の花泉なんかでもエビ餅なんかやるように、エビはたくさんこの田んぼにもいたんですよ。それで、エビを獲った人は、天秤にザルを載せて「エビいがすか、エビいがすか」って売りに来たわけ。この奥の胆沢とか、衣川の方とか、あつちの方では、エビは当時はたくさんいたんです。そして、そつちのほうに行つてみると、ジブジブジブジブジム カカカカカカという凄^{まじ}い音をたてて鳴く鳥がいるんですよ。「何だべっあれ」つてね。あれは、カミナリシギとあるので、何だか騒いでいる。カミナリシギつて、正確にはオオジシギとつてオーストラリアから渡つて来るんですよ。それがたくさんいたんですよ。ずーつと盛岡に至る

が、この辺の田んぼの稲の間に巢を掛けて、卵を産んでいるんですよ。そんなにいたんですよ。

だからね、夢のような豊かな自然の中に中尊寺の文化、平泉の文化というのは栄えてきたんですよ。

私達が日常、耳にした、六十五年ほど前の平泉です。

佐々木 さて、今度は田中さか江さんのお話です。先ほどご紹介がありましたように、英語だけじゃなくて、国際的ないろんなものに携わつていらつしやるのですが、大事なことをさつき言い忘れました。

金色堂に現在セットされている外国語の説明はここに居らつしやる田中さか江さんをお願いしてきたんです。韓国語も中国語も、もちろん英語も、普通の一般の人がわかるようにお願いします。と。専門家だけわかるようにではなくて、正しく、そして平易な表現でお願いします。そういうご縁でお世話になってきた方です。

田中 皆さん、初めまして。こんにちは。そして、世界遺産「平泉」おめでとうございます。

田んぼのところに。そのオオジシギが今はほとんど全滅です。

ヨダカも全滅に近いですね。あんなにも、校庭にもいて、周りの田んぼの畔^{はた}から「先生、こんなのが二つあります」つて、ヨダカの卵を生徒が持つて来るんです。「ああ、ヨダカの卵だ。取つて来るな！」つて。田んぼのちよつと幅の広い畔のところに草が生えていけば、そこに産むんですね。だから、田んぼ一面にヨダカがいたんですよ。そういうような非常に優れた自然。

そして、ぜひ言つておかなくてはならないのは、この山の陰。後ろから回つて行くと田んぼがあつて（裏谷^{うらや}起）、その田んぼで、夕方、カ…、カ…、カ、カ、カ、カカカカカとだんだん速くなる声。聞いたことありますか？

それがこの辺の田んぼ一面、どこでもいたんだよ。一関から私は自転車を通つていたんで、夕方自転車を漕いで行くと、田んぼの両側から、あちこちでカ…、カ…、カ、カ、カカカカつて。これはクイナが戸をたたく、というのね。「万葉集」にも詠まれていた。正しくはヒクイナといいます。これもやつぱり東南アジアから渡つて来るんですよ。それ

私も今、特にマイノリティ（少数民族）の立場で言わせていただきます。

私は日本で生まれました。父は、韓国の済州島という小さな島から日本に自分の父親を探しに単身で来ました。戦時中ということもあり、日本に来てすごく苦勞をしました。一生懸命に働いて事業をしようとしたときに、やはり日本国籍がないと銀行の融資も受けられない。織物問屋をやつていましたけれども、そのときも、朝鮮人には売つてやらないとか、すごい差別があつたそうです。私は小さくて全然覚えていないのですけれども、そのときに日本に国籍を…：たくさんの書類を書いて、ようやく父は日本に帰化したと言つていました。

ところが、私の姉がすごく反発をしまして、「なぜお父さんは日本に帰化したんだ。堂々と朝鮮籍でいればいいじゃないか」と。

戦争が終わつて、朝鮮戦争、そしてアメリカとロシアの戦いの中で、悲しきかな…。まだ世界中で38度線分断されているのは朝鮮半島だけです。その分断された中で、うちの親戚の中にも朝鮮籍のパスポートを持つている人がいま

す。日本のも持っているし、韓国もある。同じ家族の中でそういう現象が起こっているわけです。済州島出身というのは南ですから韓国なんですけれども、韓国を選ばなかったために、韓国籍も持っていないという、とても複雑なことが起こっています。皆さんはきつと、そんなことは聞いたことがない、と言われる方も多いかと思えます。実は私もそれを姉から聞いて勉強しました。学校の教育ではこういうことを教えてはくれません。

それで、姉は父に反発をし、韓国のソウル大学に勉強をしに行くんですね。日本と韓国の狭間で、いつもいつも悩んでいました。いつも悲しんでいました。

その姿を見ていて、これはだめだ、と私は思いました。日本と韓国の問題は、日本と韓国だけで解決できないな、と思ったので、アメリカだったり…。私はアメリカ人の人と結婚しました。そのときに違う視点が…。「これはこういうふうなものなんじゃないの？」とか…。うちの妹は中国人と結婚しました。なんかオールマイティなクラブみたいになってしまったんですけど、その中でいろんなディスプレイが生まれて、こんな本を読んでみよう、とか、

シヨンにしても、皆さんはどういうふう思うだろうか、と考えながら皆さんは話したりしていると思うんですけど、そういうところをポリシー（方針）として進めていこうと思っています。

そして、ただ今、遠藤先生の、本当に目に浮かぶ自然の美しさのお話を聞いたところで、やはり私は新宿とか、都会のご真ん中にいて、そういうえば、いつも車のクラクションやピーポーピーポーという救急車や、そういう音しか聞いていないな、と思って、絶対に月一はここに来ようと思っ

ています。（笑い）よろしくお願いします。

佐々木 ありがとうございます。

さて、そこで次は平泉の泉さんですね。泉伸弘さん。この方のお父さんは平泉観光協会会長の泉信平さんです。実は、何年前かに、伸弘さんが平泉に二、三日帰って来てまして、あるところで一緒に飲んだときに、いろんな話を聞いたんです。で、「あなたにはいつか頼むことがあるよ」と言ったのを覚えていてくれています、何年か経って先日、「パネラーを頼みたいんだけど」と頼んで、それで本日

今度はこの国に行ってみよう、とか。

そんな中で生まれたのが、この四カ国語の雑誌の『were』というものでした。その出版を行っているのは新宿区の百人町というところで、大久保駅にあります。今一番エスニックタウン（民族集団）とでも言いましょうか、いろんな国の方がいっぱい住んでいます。二十四年くらい前に、佐々木邦世さんにお声を掛けていただいて、「中尊寺も多言語のパンフレットをつくりたいんだ」という話で、「わかりました。やらせてください」と言っただけです。

それで、そのときにサードアイ・コーポレーションという会社を、出版するためにつくったんですね。そのとき、姉も小説家ですし、どういう会社にしようかな、と思って、そして一番のホームページのテーマとして挙げていたのが、『伝えなければ伝わらない。伝わる言葉で表現する』これしかないな、と思っっています。多言語をやる場合も、さつき佐々木さんが言ってくれたように、どんな人が読むかわかりません。どんな人に伝えたいか、もわからない。そういうときに、専門家だけがわかるような言葉で書いてもしようがないですし、例えばこういうディスプレイ

ここにきてくれました。どうぞお願いします。

泉 いつも両親がお世話になっております。お袋が今日、「いったい邦世さんは何を聞きたいのかしら？」と。親父は、息子が何を話し出すかわからんで今日は行かない、と。（笑い）

実は、昨日、ちよつとおもしろいことがありました。中尊寺通りを散歩していたら、後ろから来た車の中の人がずつと僕のことを中から見ていまして。道でも聞かれるのかなと思っただけ。車の中からその人が降りて来て、「すみません。いよいよ明日だよな？」と言うわけです。（笑い）「えつ、なぜご存知なんですか？」と聞いたたら、「ポスターを見たので。丸信（電器店）の弟です」という。そこでその弟の郁男さんからちよつと話が出たのですけれども、なぜ、平泉の人たちが、今から二十年くらい前に町民号で鎌倉に行ったのか。その話をちよつと今日は聞きたい、というのでした。あのときはもう、邦世さんの発案ですね。私がちよつと鎌倉で新聞記者をしていたということもありまして。で、平泉が「鎌倉」に、あまりいつまでもわだか

まりを持っていてはいけない、ということ、平泉から鎌倉に使節団が行く、ということでした。親父も邦世さんも、町内の知っている人大勢来られまして、たしか鎌倉八幡宮の境内にシズザクラを記念植樹しましたね。

その夜は楽しく、私の行きつけのスナックに皆さんをご案内して、後にも先にも親父とカラオケをしたのは…、ただ一度きりです。すごく好い思い出になっています。

まあ、今日は邦世さんのご質問に委ねるということで…。

佐々木 今、話に出た鎌倉の当時の竹内市長さんは、あの方は元は朝日新聞の方ですね。それで、平泉がそのように出てきた以上は、鎌倉でも対応をちゃんとしなければ、ということ、あの後、平泉に来られまして、中尊寺の資料館（現在のかんざん亭）で「鎌倉彫と秀衡塗展」のテーマカットをしていただきました。そして、鎌倉からこちらにも（楸邨句碑の所に）記念植樹をしていただきました。

それではまた、鈴木文彦先生、御講演のあと、今度は短

遠藤 私は民俗学の柳田国男の『遠野物語』なんかを惹かれて、往古の岩手県というのはどういう風だったんだろう、という強い思いを持っていましたよ。それで、オオカミとかワシとか、そういうものはいったいどこに行ったのか、と。どんな運命を辿ったのか、と。それを知りたくても教えてくれる人も本もなかったんですね。それで、そのころ「日本のチベット」と言われるようなところで、学校の先生はだれも行きたくない。デパートとか病院とか映画館がないところでは勤務したくない、と。泉南の先生たちは、北に赴任したら早く帰ってきたくてしかたがない、と。とてもひどい生活をしている、ということだったのですが、私は、ヒマラヤの奥みたいな岩手県北の学校へぜひ行って見たい、と思っておりました。そう話しますと、親切にこの何人もの女の先生が、私を引き留めたんですよ。（笑い）「ここにいた方がいいんだから」と。

確かに、今はこの平泉は世界遺産だと言っているけれども、ここの人たちの心情というのは実にすばらしいんですね。私は六十五年前をずっと振り返ってみてね。当時の教え子が、未だにこのような老いぼれを、非常に評価してく

くお話願います。（笑い）

鈴木 私は書く方とか、読む方は慣れているのですが、話す方はどうも、あまり慣れていないものですから恐縮しております。

でも、何か話し足りないところがなくはないのですが、（笑い）それは止めまして、以前、作家・内海隆一郎氏の平泉文化会議所情報誌『東方に在り』第三号に文学者が語る東北文化論『東北に文化宅急便を！』という記事を拝見しました。何か内海さんが言わんとしている、あの優しい（人々シリーズ）をお書きになった内海さんがですね、「文化的に未成熟な日本そして東北」への視点、こういう思いでいらつしやっただなあ、と。僕も現役は過ぎましたが、でも何か紹介者の役割はしていきたいと思っているし、現に今やっているんですが、「文化宅急便」ということで、何かお役に立てれば、と思っております。

佐々木 遠藤先生のお話、次の展開は、先生がここ平泉から北に向かって行かれたんですね。その辺からどうぞ。

れて、私が住んでいる宮古まで、少々おぼあさんになった教え子たちが（笑い）、私を訪ねてきたんですね。生きているうちに会いたい、と。あの先生はどうなっているか、と。いやあ、本当に胸を打たれました。

そのほかに、私が東京で講演するつて言ったらね、その人たちの中の四人が「私たちも聞きに行く」と来てくれたりね。それから、家で採れた野菜やお米なんかを毎年送ってくれる人がいるんですよ。涙がこぼれるね、本当に。

私は振り返ってみて、平泉の八〇〇年も続いた文化遺産、平和を愛して、ここに浄土をつくろうとした人々の思想がずっと流れていると思うんです。この人々の中にね。それが子供たちの上に出てきて、私のような教員を鍛えてくれたんだと、本当に感謝しています。ただの文化遺産というだけじゃない。心温かい豊かな人たちがいる、ということとは間違いない。私はそう思うんですね。

こんなことがありました。私がつまらないことで一人の男の子を怒ったんですね。その男の子は泣いたんですよ。泣いたので、私は怒るのを止めて、それで、ひよつと見たら、側で女の子が三、四人涙を流しているんです。女の子

を怒ったんじゃないんです。一人の男の子を怒ったんです。「おめだち、どうしたんだ？」と言ったら、もらい泣きだ、と言っんです。(笑い) 私はこのときに、この町の子供たちは違うなあ、本当に温かい気持ちを持っているんだなあ、と。大きくなつてからも、同級生たちとても仲が良いんですよね。よその土地とは違う心情を持っているんですね。そういうことをまず…。

佐々木 それだけ良い人間関係、心情を実感しながら、人でなくて、コウモリだのトラとかばっかり追いかけていたのはどういうことでしょうか？(笑い)

遠藤 この平泉から転勤して、最も岩手県の山間の僻地に行きたい、と言ったら、紹介されたのが奥羽山系の八幡平の秘境の村ですね。今、そこは廃村になってしまっただんですが、戸数が八戸で、学校がなくて、昭和二十九年に初めて学校ができるまで、十四人の子供が学校に入らないでいたわけ。それで、昭和二十九年に分校ができたんですが、初代の四十代の先生が越冬できなくて、逃亡したんですよ。

探したんですが、デマでした。(笑い) 騙されて行つたわけです。動物公園か何かのをぼやつと映して、「トラが出た」と脅した人がいたんです。韓国ではそれを真に受けたんです。その中に、北朝鮮から亡命してきた学者で、私より四歳ほど年上の人と、親交を結んで兄弟のようになってきて、その人のおかげで、韓国の虎はなぜ滅びてしまったのか追跡したわけです。ソウル大学に遺っていた日本の文献、統計資料を見たら、日本の統治時代に、たぐさんの虎とか狼とか豹とかを駆除した、という統計が出てきたんです。ソウル大学のシンポジウムに招かれて、「日本が、こういうふうにして虎を滅ぼした」と発表しました。そういうことで、韓国に関係した本を三冊、私の本が韓国語で出版されました。

幅を広げて、アジアの野生動物を紹介したい、と。それがほとんどできるか、というのと、それは非常な苦勞で、中国へは五回行って、ようやく小さい作品が一冊できたわけで、大変でしたけれど、ノンフィクションで描きました。この平泉奥州藤原三代のころに狼なんかはどうだったのか。実は、明治八年に岩手県では狼を、賞金を付けて駆

(笑い) その後に私が赴任したわけです。私は、そのとき二十二歳になっていました。ここに二年九ヶ月いました。よるこんで行つたんですよ。十二キロの雪道を、残雪を踏んで、五時間。それで、私を迎えに来た村の人たちは、全員毛皮を着ていたんです。そこで劇的な生活をしましたね。(笑い) そこでももうオオカミもワシもいなかったんですけどね、変なコウモリがいて、新種のコウモリを見つけたんですね。エンドウコウモリって、学名に「エンドウ」が入っています。「Pipistrellus endoi」というんですね。岩手県内から三種類ですね。そのほかに、北上高地の高いところで、イヌワシが繁殖しているのを見つけたんですね。そんなことをして、動物文学のほうにのめり込んでいったわけです。

佐々木 そして、韓国のお話、行きましょう。

遠藤 その頃、「韓国で虎が出た」というテレビニュースがあつたんですよ。びっくりしたね。韓国にはまだ虎がいるのか？怪しいなあ、と。それで、苦勞して韓国に行つて、除しているんですよ。それで、明治十一年から十二年にかけて、隣接する胆沢郡で、六匹のオオカミを獲つて県庁に届けてご褒美をもらったという記録が出てきたんですよ。明治の始め、ですよ、いたんですよ。

もう一つは、胆沢の奥にシシアワセ公園という公園があるんですよ。行つてみたら、崖の急斜面。そこに柵を回して、鹿が来たやつをこつちからダーツと追つて、崖を落として獲つた、というようなことを研究して推察しました。今はそこは、村の人たちに聞いても誰もなぜ「シシアワセ」というかわからない。「ここで鹿を獲つたんじゃないか？」と聞いても、「いや、全然聞いたことがない」ということで、伝承は消えるんですよ。だから、私がここで見たことを、ちゃんと残しておく必要がある、と。

佐々木 えー、虎・狼の話から人間界に戻りまして、それでは田中さか江さんに、第三の目というところからお話いただきましょう。実は、奈良の東大寺法華堂の不空羂索観音像(国宝)は大きな目を三つ持っていますね。興福寺の羂索観音も鳥取県三仏寺の蔵王権現もそうです。皆、第三

の目を。これは大事な目。あつちかこつちか、じゃなくてその両方を合わせる、という…。よくその第三の目（サードアイ）というところを取り入れられたなあ、と。

どうぞ、お話をください。

田中 そうですねえ、サードアイ・コーポレーションという名前は、姉の李良枝と決めました。最初、サードアイって何だろう、と思いました。さつきも話させていたように、日本と韓国とか、アメリカとロシアとか、そういう二国間とか、あるいは文化の違いだけを、いつも一方通行で話しても仕様がないなあ、というのが一つありました。特に言語の壁というのはすごく大きいじゃないですか。自分はAと言ったつもりが、相手はAと受け止めてくれないうことがありません。そういうことを何度も経験しましたし、きつと夫婦間でもそうだと思います。男性と女性もそうでしょうし、そうだったことで、常に自分が第三者にもなれる、というところで、サードアイ・コーポレーションという名前をつけて、常にお客様からお仕事をいただいたときも、私達にはスタッフがたくさんいるのですけれども、

今の東北をどのように思っていますか。

泉 大体私は四、五年に一遍しか日本には帰って来なかつたんですけれど、ニューヨークには東京の人もたくさんいますけれども、東北の人は本当に少ないですが、岩手県人会はあります。その岩手県人会ですけれども、一度呼ばれて行ったときに、当時は前の増田知事が奥さんと一緒にニューヨークの岩手県人会に来られて、初めてそこでお会いしました。その後、本を出版したときに知事に贈ったところが、感想のお手紙をいただきました。あの時、すごく心が安らいだ、そういう思い出があります。

ニューヨークでテロが二〇〇一年九月十一日にありました。その時、私はマンハッタンのずっと北の方に住んでいたんですけれども、朝、会社に行く地下鉄に乗ろうとしたら、もう電車が止まっています、ワールドトレードセンターに飛行機が突っ込んだ後で、私がそれに気付くのがずいぶん遅れたんですけれど、日本ではちょうど夜のニュースの時間帯で、むしろ日本の人がびつくりして、普段は連絡を取っていないような人から電話やらメールやらをも

いろんな言語が必要ですので。でも、自分たちの目でしか見られないじゃないですか。お客さんの立場になって考えしてみると、こうやって提案してあげたら、お客さんはもつと喜ぶよね、と。そうしたらまたリピートでお仕事が入ってくるでしょうし、とにかくいつも一歩先を考えよう、というふうに…。

でも、たくさん失敗してきました。佐々木邦世さんと会って二十何年間の間、私は本当に旅行にも行けないくらい日々忙しくて、兄弟三人も亡くしてしまいました。先程の法要を聞きながら、本当に涙が止まらなくなりました。人を供養するということが、天国に行ってしまった兄、姉たちもどういうふうに思っているのかなあ、と。死というのは避けられないことですが、でも、こういつたときに抛り所となるこういう仏教文化というものがあることは非常に大事なんだな、と私はすごく感じました。サードアイという気持ちもそこにつながっているのかな、と思っています。

佐々木 泉さん、ニューヨークに何年もいらして、東京へ帰って来てどうでしたか。そして、東京から、今の平泉を、

らつたのを覚えています。

そして今度は東日本大震災で、この時も私は、親不孝ながらニューヨークにおりまして、普段はお袋とか電話をしても話さないんですけれども、その時は親父の携帯に、大丈夫ですか？とメールを送ったところ、うちは大丈夫だが、ガソリンスタンドをやっているの、ガソリンが入ってこなくなつた、というやり取りをしたのを覚えています。

日本にたまに帰って来たとき、あるいは東京から平泉をどう見るか、というのは、ちよつと答えは難しいんですけども、平泉というのは、中尊寺の皆さんのおかげも大きいと思うんですけれども、子供のころから平和に対する意識というのが、知らず知らずのうちに、強いという、そういう印象があります。例えば、私の五歳上の兄は、中学校のとき、よく弁論大会に出たんですけれども、題名が「真の世界平和を目指して」とか、そんな大層なテーマで弁論していました。それと、私は中学校二年か三年のとき、一度だけクラスで小説を書かされたんですね。そして、私はたしか『平和村』という題名で小説を書きました。都会の喧騒に嫌気がさした若者が山里に紛れ込んで、そして山里

です。つと暮らしているおじいさんがいて、平和な村をつくらうと思つてそこに長年住んでいるんですが、若者も皆、人がいなくなつて、おじいさん一人だけという村に都会から逃げ込んだ若者が出会つた、という、ただそれだけの話です。ただ、私が休憩時間に廊下を歩いていたら、担任の岩淵実先生が国語の先生でしたので、私と目が合ひまして、「伸弘、惜しかったな」と言つて他のクラスに入つて行つた。まあそれだけですけれども、自分が書いた小説のことを言つてくれたんだな、ということ、未だによく覚えています。

今も邦世さんの『中尊寺 千二百年の真実』という本を拝読しましたが、清衡が浄土を、平等・平和な平泉をつくらうと、その願いを込めた鐘の話にすごく感動しました。

佐々木 ご承知の方もいらつしやるでしょうが、ニューヨークの同時多発のあつた翌年、元日のNHKの『ゆく年くる年』に、どうしても中尊寺の古い方の梵鐘を撞いてほしいと、NHKから頼まれて、後から割り込ませましたですね、あれは。放送時間は短かつたんですけども、正

しい争い、正しい戦争はないんだ、という、ユネスコと同じ発想ですね。その鐘をニューヨークにも聞かせたいから、ということ、NHKさんが、いつもは撞かないあの鐘を、と切望されて古鐘を撞いてニューヨークにも届くように流してもらつたことがございました。

質問者 えーと、年取つた教え子なんです、遠藤先生の隣のクラスでしたが、遠藤先生のクラスは、いつも毛越寺に行つて、勉強しているんだか、遊んでいるんだかわからないけれども、羨ましいなあ、と思つておりました。そして、遠藤先生が、何かわからないけれども、すごい山奥に行つたというので、私達は三人だかで、遠藤先生に会いに行きたいというので、何か古本を送つたような記憶はあるんですけども、遠藤先生にはすごくいろいろと思ひ出があるんです。

それで、山奥に行つて、それこそ何人かの子供たちと、勉強とかはやつぱり毛越寺で遊びながら勉強したようにやつたんですかねえ？

遠藤 えー、まあ、ご想像に任せます。(笑い) ありがとうございます。うございました。

私は、世界的には『成長の限界』というローマクラブが発表した、地球環境が非常に悪化しているという論文を読んで衝撃を受けたんです。それまではまだまだ大丈夫なんだろうと思つていたのに、もうこれ以上の成長は止めたほうがいい、と。

そこで、先ほどまで県知事さんがおられたので、県知事がいるところで言いたかつたんですけども、この眼下に、北上川沿いに、ILCの巨大開発を行うというのを県も市も推進しているんですね。それで、これは私はもう止めたほうがいいと思うのね。福島で、原発は大丈夫、何の心配もない、といったところが、あんな事件を起こしているのです。しかもILCは径十一メートルもの大きな坑道掘つて、地下の水脈がどうなるか見当もつかないのに、とにかく徒に開発して、大丈夫、大丈夫という方向で進める恐れがありますからね。東北に住む人々、山河、もつと慎重に思慮し、話しあつて欲しいものです。

佐々木 ありがとうございます。ILCを推進している方もいらつしやるようございますが、あの穴の大きさを誰も知らないんですね。いろいろな考え方があって、うけれども、宇宙科学の謎を解くだけではないことをはつきり言わない。三十年後、その巨大な空洞をどうするのか？これはやつぱり一旦、立止まつてゆつくり考えるべきだと思います。単に賛成とか反対ではなく、ゆつくり、全部情報を得て判断していただきたいな、と付け加えさせていただきます。以上でございます。

質問者 (神奈川県鈴木郁男氏) 実は明日、東京でふるさと平泉会がありまして、町長さん、議長さんいらつしやいますけれども、今日のシンポジウム、パネルディスカッションの報告をしておきます。遠藤先生もまだご健在だと。(笑い) その報告は確と皆さん方にお伝えします。

遠藤 ありがとうございます。六十五年前にいたモリアオガエルがまだいるんですからね。これはおそらく八〇〇年も前からここで生き続けて来たんですね。だから、こうい

うものを何としても大事にしながら、巨大開発に警戒しつつ、この平泉の人たちの心情を大事にしていつてほしいというのが、私の最後の願いであります。ありがとうございます。

佐々木 おそらく明日、東京の平泉会で、鈴木郁男君はこう言うでしょう。「遠藤先生、まだ生きてるよ」って。(笑い) それでは手を挙げてください。

及川司さん。文化遺産センターの所長さんですね。文化的な面から何か一言、どうぞ。

及川(平泉文化遺産センター所長) 先ほどの遠藤先生のお話で、浄土の心が、今も平泉の人たちに継承されているというお話がありまして、大変感銘を受けました。

その浄土の心ということで、少し紹介させていただきます。

実は、中尊寺本堂の南側に大池跡がございまして、今から十五年ほど前に、発掘調査をしたら、秀衡の時代のハスの実が発見されました。それが三年後に長島時子先生

中尊寺 十年の展望

〜落慶供養九百年を目指して〜

菅 原 光 聴

平成二十八年(二〇一六)は、「平泉」が世界文化遺産に登録されて五周年にあたり、中尊寺では秘佛「一字金輪佛頂尊」御開帳、また、八百年の時を超えて復元された「如意輪講式」法要の厳修など、奥州藤原氏が築きあげた仏教文化を鑽仰する取り組みが数多く行われました。

清水前内局によるその様な取り組みを承け、昨年四月より五十歳以下の新内局によって寺務を運営して行くこととなりました。

中尊寺では、八年後(二〇二六)に藤原清衡公による大伽藍一区の落慶供養が行われて九百年の節目の年を迎えます。また、そこに至る間にも様々な節目の年が目白押しです。現内局の前途には、来たるべき節目の年々に向けた準備が至上命題として待ち構えており、尻込みしてばかりもいられません。

によって、ハスの花が咲いた。おそらく当時の秀衡公や藤原公、あるいは源義経も必ずや見たに違いないハスが甦って生きている、地面の下に、今もたくさんハスの実が埋まっているという、そういう浄土の心が遺跡にも継承されて残っているのだ、ということをご紹介させていただきたいと思います。(拍手)ありがとうございます。



中尊寺大池ハス

今後の中尊寺の十年間を俯瞰してまず考えたのが、一つ一つの行事や取り組みを別個のものとして捉えるのではなく、一連の期間として進めていこうということでした。

折しも天台宗では平成二十四年(二〇一二)四月より十年間を、諸祖師の御遠忌を軸とした「祖師先徳鑽仰大法会」期間と定め、宗門挙げて様々な鑽仰行事を厳修しております。それに倣うならば、中尊寺を皮切りに平泉の文化遺産を創建した奥州藤原氏と、その礎となった仏教思想を鑽仰する平泉版の鑽仰大法会ともいえるでしょう。

そして、「鑽仰」の合言葉として位置づけたのが、奥州藤原氏初代清衡公による「中尊寺建立供養願文」に述べる「諸佛摩頂の場」という言葉です。誰もが諸々の仏様に迎え入れられながら頭を撫でて頂き、恐れや苦しみを抜き去って安楽を与えて頂ける場所をつくりたい、という願いがこめられたこの言葉は、清衡公の前半生に深く立脚したものであったと思われまます。

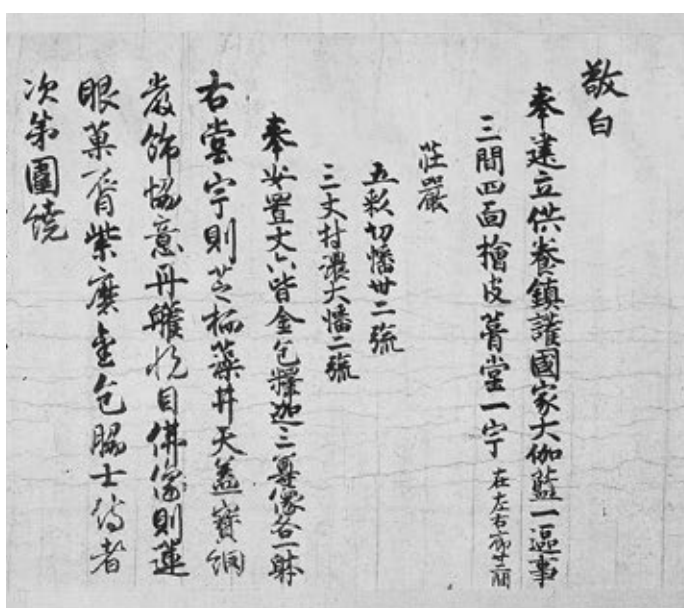
清衡公の母は、蝦夷の俘囚長・安倍頼時の娘で、父は中央の藤原氏一族に連なる陸奥国の在庁官人の藤原経清です。みちのくをめぐる朝廷と蝦夷の緊張状態のつづく天喜

四年（一〇五六）に生を受けた清衡公は、前九年の戦いで幼くも七歳にして安倍方に走った父の斬首と安倍氏の敗北、敵方であった出羽の豪族清原氏のもとに母と共に預けられるという憂き目に遭われたわけです。そして青年期には、身を寄せた清原氏の内紛と陸奥守源義家の介入による後三年の戦いが勃発し、異父弟によって妻子を殺められ、自身もその弟を攻め滅ぼしております。中央と地方、大和と蝦夷、相容れない血・イデオロギーが、豊かなみちのくの大地をめぐる争いを続けた。中央貴族と蝦夷という体内を流れる二つの血が離反して最愛の者を奪い、自らも他を殺めてしまう苦しみが想われます。

後三年の戦いは朝廷より清原氏の私戦とみなされ、源義家をはじめ勝者への論功行賞はなく、安倍・清原の系譜を継ぐ清衡公が陸奥国の奥六郡を伝領することとなりました。時に寛治元年（一〇八七）、清衡公三十二歳。その後藤原摂関家への貢馬等によって中央との安定的関係を築きながら、平泉に居を移した清衡公はみちのくの平和と安定のためにその後半生を捧げられました。長治二年（一一〇五）より中尊寺の堂塔造立に着手し、天治元年（一一二四）

戦乱で故なくして命を落とした「官軍・夷虜」、「毛・羽・鱗・介」（水陸に棲む動物たち）にいたる冤霊を浄土に導きたいと願って建立されたのが中尊寺であります。七宝荘厳と表現された金色堂の内陣は、みちのくの漆や金と共に、沖縄や東南アジアなど南洋産の夜光貝を用いた螺鈿細工や紫檀材の化粧板、象牙、瑠璃石（ガラス玉）など様々な産地、様々な輝きの素材で荘厳されております。異なつた素材が固有の光を発して照らし合い、調和することこそが清衡公の願われた浄土だったのではないのでしょうか。大伽藍落慶に際して経蔵に奉納された、およそ五千三百巻に及ぶ金銀字交書一切経についても、「金銀和光して弟子の中誠を照らす」と願文に述べられています。二つの異なつた光の融和こそ、二つの血を身に宿す清衡公の切実な願いであり、憎しみに偏つた心ではなく、仏弟子としての菩提心こそが清衡公の誠の心であり、その心を照らすための作善が金銀の写経業だったといえるでしょう。「官軍・夷虜」、朝廷とみちのくという異質なものがその光のままに和してゆく。「蛮夷」とさげすまれてきた者たちであっても本来の善なる存在に帰して「界内の仏土」（迷いの世界の中にあ

には金色堂を建立、二年後の天治三年（大治元・一一二六）三月二十四日には前述のとおり「鎮護国家大伽藍一区」の落慶供養が行われたのです。



中尊寺建立供養願文（冒頭部分）

る浄土）に行きつき、諸仏に摩頂していただける場、それが中尊寺であります。二者択一ではない、多元的・共生的なものの方見方は、現代社会に対しても大きな示唆を含んでいるでしょう。中尊寺にとつて百年に一度の大きな節目を迎えるに当たり、記念となる諸行事や様々な取り組みを貫く眼目として、「諸仏摩頂の場」の精神を掲げ、未来を照らす礎にしたいと考えております。さて、今後の約十年を見渡してみると、次のような記念の年が続いております。

平成三十年（二〇一八）

国宝金色堂大修理五十年

金色堂は昭和三十七年（一九六二）十月より、藤島亥治郎博士を委員長とする保存修理委員会のもと七年間に及ぶ国庫補助修理が行われました。建物全体を解体し、内陣部材を東京国立文化財研究所（当時）に移送しての大規模な修理事業の末、修復落慶の開眼法要が厳修されたのは、昭和四十三年（一九六八）五月二日でした。この修理によつ

て、漆工・金工・建築その他に及ぶ技術の保存・研究、そして次代への継承がなされ、金色堂は創建当初の輝きを取りもどしました。またその際に木造の覆堂は解体移築され、保存に万全を期してコンクリート造の新覆堂を建設、覆堂内部はガラススクリーンによって保護されました。

その後、保存施設・設備に多少の改良がなされながら、今般五十年が経過しようとしております。国内の国宝建造物の修理の中ではその後の保存状況に関して評価が高いといわれる金色堂ですが、やはり温湿度、地震等の影響による金箔や漆の剥落、当初材と新補材の収縮率の違いによる歪みなど五十年の歳月による傷みは目に見えて明らかとなつてきており、次世代に継承してゆくため、新たな保存修理も含めた取り組みが必要となつてきております。

また、この節目となる年を一つの機会として昭和の大修理の関係資料を整理し、あらためて金色堂の文化財としての価値と、その深淵にある清衡公の精神について顕彰していきたいものです。中尊寺では、暫定的ではありますが、来年度いくつかの記念行事を計画中であり、ここに概略をご紹介させていただきます。

を準備しており、詳細が決まり次第、中尊寺ホームページ等でお知らせします。

明後年（二〇二〇）

光勝院（修養道場）落成

中尊寺では従来、本堂において修学旅行や一般の方々の坐禅、写経、先祖供養を承ってきました。しかし年間五十座を超える一山法要や、檀信徒の年回忌法要等も多くが本堂を会場として行われており、ご参拝の方々の要望に十分に応えられているとはいいたくありません。また、平成二十五年（二〇一三）に本堂の新本尊として丈六の釈迦如来が造顕されたことよつて、より多くの方々が本堂に上がつて参拝されるようになってきており、坐禅、写経や年回忌法要によつて本堂が頻繁に閉扉されることが課題となつておりました。また、この年は東京オリンピック開催年でもあり、近年は海外の方々の間でも坐禅などの修行体験への関心が高まりつつあります。

ご参拝の皆さまに、今まで以上に仏教を深く体験していただくと共に、檀信徒の皆さまの先祖供養や文化行事の充

平成三十年（二〇一八）

四月三十日（月） 十四時

国宝金色堂大修理五十年記念講演会

五月一日（火） 十時

国宝金色堂大修理五十年記念藤原四代公報恩法要

九月十五日（土）～十一月十八日（日）

国宝金色堂大修理の記録展

この他、全文の復元成つた「如意輪講式」法要の厳修、金色堂大修理の記録「よみがえる金色堂」の上映と法話、例年開催している夏休みの寺子屋で子供向けに金色堂の修理やその価値についてわかりやすく学ぶ等の行事



覆堂が外された金色堂（修理前）

実、さらには本堂内をご参拝いただく機会をさらに充実させるためにも光勝院の落成が俟たれるところです。

三年後（二〇二二）

「平泉」世界文化遺産登録十周年

宗祖伝教大師一千二百年大遠忌

（東日本大震災から十年）

平成二十三年（二〇一一）六月二十九日に中尊寺を含む「平泉」の文化遺産が世界遺産に登録されました。この年は同年三月十一日に東日本大震災が発生した年として深く記憶に刻まれる年でもあります。東北のみならず日本全体が自然災害に対する畏怖の中で暗中模索を続けていた最中の世界遺産登録の報に、寺の使命について一筋の光明を与えられたと感じたものでした。

その後、二十八年には世界遺産登録五周年記念事業が、岩手県や地元市町をはじめとする関係機関一体となつて行われました。その際の事業の基調となつたのは「平泉」の浄土思想は震災の慰霊・復興と共にあるということであり、中尊寺で厳修された秘佛「一字金輪佛頂尊」御開帳をはじめ

めとする諸行事も東日本大震災や熊本地震の甚大な被害に
対して思いを致し、それが清衡公をはじめとする藤原氏の
願われた浄土に通じるのだ、という理念で貫かれました。
来たるべき十周年においても、同じ理念のもとに様々な
取り組みを計画してまいります。

また天台宗としても宗祖伝教大師（最澄）の一千二百年
大遠忌という重要な年にあたります。藤原氏の願われた仏
教理念も、大師の法華一乘思想^註が基底となつているこ
とはいうまでもありません。宗徒として初心に立ち返る意
味においても鑽仰の誠を尽くさなければと思います。

六年後（二〇二四）

金色堂建立九百年

金色堂は天治元年八月二十日に上棟されました。その棟
木に残された墨書銘によると、「大檀 散位藤原清衡」と
記され、「女檀」として「安部氏・清原氏・平氏」という
三人の女性が名を連ねています。安部氏とは清衡公の母（安
倍頼時の娘）、清原氏とは後三年の戦いで子と共に命を失つ
た先妻、平氏とは金色堂建立当時の正室を指すと思われま

照らし合つて諸仏摩頂の恩恵に浴した感慨一入の時だつた
でしょう。

大伽藍の建つ関山の山上は、まさに仏土みちのくの基地
であるということを確認新たに、落慶から九百年の時
に向かつて進んで行くことが中尊寺の使命と考えておりま
す。

そして九年後（二〇二七）

藤原清衡公九百年御遠忌

『吾妻鏡』によると、清衡公の後半生は深く仏教に帰依
し、最期は、自らの往生を念じて百日の逆善の修行に入り、
結願の日もまた仏号を唱え、合掌しながら一病もなく静か
に閉眼された、と述べられております。大治三年（一一二
八）七月、七十三歳、中尊寺大伽藍落慶の二年後のこと
でした。

昭和二十五年（一九五〇）に行われた藤原四代公の御遺
体学術調査の報告は、多くのことを我々に語り、考えさせ
てくれます。

す。自らと共に前九年・後三年の戦いに翻弄された母と先
妻を金色堂建立における檀主（施主）として功德を分けて
いるところに、清衡公が晩年までみちのくに起きた不幸な
戦乱に思いを寄せていたのだと偲べれます。



金色堂棟木
墨書銘（部分）

先述した金色堂大修理竣工五十年から金色堂の継承に向
けた取り組みと共に、学術研究・保存と公開の技術・宗教
空間としてのあり方などの再検証を積み重ね、金色堂建立
九百年をその集大成の年として位置づけたいと思います。
また同時に金色堂を中心とした奥州藤原文化を顕彰する諸
行事も準備してまいります。

八年後（二〇二六）

中尊寺落慶九百年

「平泉」世界文化遺産登録十五周年

清衡公にとつて中尊寺大伽藍の落慶はみちのくが中央と

以上、藤原清衡公の業績に寄せて、今後およそ十年の中
尊寺の節目となる事項について述べさせていただきます。
関係の皆さまのご指導とご協力をお願い申し上げます。中
尊寺事務局として鋭意取り組んでまいります。

（註）人に応じて別々に説かれた釈迦の教説は、最終的には一
つの教えに行きつき、一切の衆生（生命）が等しく一仏
乘（悟りへ向かう大きな乗り物）に入ることができると
説く『法華経』の教え。

（執事長）

「芭蕉 晩年の十年」

講師 石 寒 太 先生

皆さん、こんにちは。石 寒太と申します。

今日は、この伝統ある第五十六回平泉芭蕉祭全国俳句大会にお招きいただき、光栄に思っております。

梅雨晴れ間で、好天に恵まれて、皆さん全国から多勢さんお集まりいただきまして、私も大変嬉しく思います。

「いし かんた」、実はこれは俳号でしてね、本当は「石」の下に「倉」がありまして、本名は「石倉」って言うんです。

俳句を始めた当初、まだ二十代でしたけれども、本名の石倉で俳句を、加藤楸 邨先生のところへ、ずっと出しておりましたら：五年ぐらい、もつと

経ちましたかね、その頃に楸邨先生から突然朝、お電話がありました。

で、「君は明日から【石 寒太】だ」って言うんですね（一同笑）。

電話ですから、あんまりすぐに、応答も出来ませんで「はい、わかりました」ってお受けしたんですけれども。

後程、先生にちよつとお会いした時にですね、「どうして【石 寒太】なんですか？」って訊きましたら「んー、君は倉が建ちそうもないから、倉を取っておいだ」（一同笑）。

そうして「倉」を取られまして、今「石」だけ残って、で「寒太」という俳号になりました。

「寒太」という由来は、これも先生にお訊きたかったんですけれども、そのうち先生も歳をとられて、詳しく聞くことが出来ずに過ぎてしまいました。勝手に自分で解釈して、加藤楸邨先生が主宰されておりますのが『寒雷』でしたから、『寒雷』の太郎になれということで「寒太」という風につけていただいた、と思っております。



講演の様子

二十代に楸邨先生に弟子入りいたしました。僕は、当時、俳句はそんなに好きじゃなかったんですけれども、この先生が居られる間、やってみようかなという風に決意しまして、俳句の道に入りました。先生の後姿を見ていて、この人についていけば間違いないな、ということ、その後がむしろ良いという感じでしたよ。とにかく普段は非常に優しい先生で、父みたいな、そんな存在でしたよ。

亡くなられるまでに、二回ほど大きく叱られたことがあります。一回は楸邨先生の『寒雷』という俳誌を手伝ったので、先生のお宅には何回もおじゃましたんです。机を前にして、原稿を挟んで二人で編集の、やり取りをしていました。原稿が間にあるので先生の顔は見えないんですけども、持っている原稿用紙が先生の手で震えだしてですね、それで明らかに怒ってられるな、というのがわかるんです。そのうちにワナワナと震

えた原稿の手が、突然天井に向かって放たれました。

今は原稿用紙の束なんてホチキスで止めてますけど、当時は「紙縫」^{こまゆり} っっていって、紙をこう、縫って、原稿用紙の端を閉じてありました。その原稿用紙が天井から、ばらばらになってこう、ひらひら舞って落ちてくんですね。そういう様な形で叱られたこともありました。

どうして叱られたか、よくわからなかったんですけども「君は僕と付き合ってた何年になる？」って言ったんで、十年過ぎてましたので「十年は経つと思います」と言ったら「君はまだ、こんなこともわかってないのか」という、かなり厳しいお怒りでした。

それで何カ月か経った後に、主宰誌の「寒雷」を開きましたら

雪起ししんの怒りは一度かぎり

という、先生の句が出てました。あ、これだなと

わかったんですけども。

「雪起し」というのは、ちょうど雪が降り出しそうな時に、来る雷ですよ。それがドドドッと鳴ったわけです。

それで本当の、真の怒りは一度限りという、そういう先生の厳しい句が載りました。普段はやさしく仏さまのような大人なんですけども、肝心な時は怒かった。そんなことがありまして、今思い出しています。

先ほどご紹介していただいたように、私、昨日、隠岐の島から帰ってきたばかりです。隠岐の島というのは皆さん、鳥取県だという人もいるし、鳥根県だという人もいる。岡山県だろうという人もいまして分かりにくいけども、隠岐の島というのは鳥根県ですよ。

私が訪ねましたのは、もう今年で二十五回目なんです。

辺鄙な、というか遠い秘島なんですけども、そういう島に二十五年も、一年も休まずに通つてい

るんです。なぜ行くか。というところの島は、楸邨先生が初めて句碑を建てられた島なんです。島の高台に隠岐神社と祭神がありまして、その神社の境内の隅の方に句碑が建っているんです。

隠岐やいま木の芽をかこむ怒涛かな

楸邨先生の晩年の、非常に勢いのある筆勢の強い句碑です。それが建っているんです。先生は八十八歳で亡くなられましたけれども、もう晩年の、八十歳を過ぎてから建ったんです。

皆さんの中にご存じの方がいられるかどうか、楸邨先生は句碑を建てるのが大嫌い。それから句集の序文を書くのが嫌い。自分が出版したいろんな本はたくさん出されてますけども、出版の記念会をやるのも嫌い。この三つが嫌いで通しました。ずつとそれを貫いてこられました。

だからそれまでは句碑って、ひとつもなかったんです。それを金子兜太さんが楸邨先生のとこ

ろに訪ねまして、隠岐の島というのは楸邨先生の俳句の転機になった島なのに、そこに句碑がないのはおかしい、と言われましてね。隠岐神社の宮司さんに頼まれて、建ててほしいということをお願いされました。でも案の定、楸邨先生は「句碑は嫌いだ、建てないで欲しい」ということで断られた。

何回かこう、やり取りがありました、十回位通つたらしいですね。ようやく、まあ、しぶしぶだと思っんですけども、そこまでののであれば仕方がない、ということになって、はじめて建てられたのがちょうど二十五年前だったんですね。句碑が建つた時は先生はもう車椅子生活でしたので、句碑の除幕式があったんですが、当然出席出来ません。そこで、金子兜太さんと僕と除幕式に行きました。平成四年だったと思います。

当日ですね、今は境港という所から高速船で二時間ちょっと、それで行くんですけれども、もうすぐ船が出るといふ寸前になったら金子兜太さん

が、自分の脇にあった鞆をこそごそぎぐつているんです。どうしたんですか？ つて訊いたら、確かこのあたりに船の切符が入っているはずなんだけど、つてまだ探しているんですよ。僕が駄目ですよ、もう船がですよ、つて言ってもまだゴソゴソ探してる。そのうちに汽笛が鳴って、船が出ちゃった。

島へ行く船は、一日にそんなに何便もないんですよ、だいたい午前中に一便くらい。それが出てしまいました。

その日は句碑の除幕式ですから、島の名士が除幕のテープカットをしようということで集つていた。でも結局、乗り遅れてしまったんですね。次の便だと夜になっちゃうんですね。

で、僕がブツブツ言つてたら金子さんは、まあ行っちゃったものはしょうがないべや、とか言つてですね、こう待合室の壁のところを見ていました。そしたら駅の待合室に「関の五本松」というポスターがあるんですよ。

関の五本松一本切りや、あとはなんとかくとい

うこの土地の民謡がありまして、その歌になつている名所があるんです。金子さんはちょうど良かった、ここで次の便まで三時間つぶそうや、というところで、それで車で関の五本松へ行きまして、次の便に乗つてようやく島へ着いた。でも、乗り遅れて着いたことによつて、その日はもう真つ暗で、句碑の除幕式なんか出来ない。結局皆集まつたんですけれど、その日は解散して一日伸ばして、次の朝はやくやることになつたんです。その様なことがありました。

その除幕式が終わつた後に、再び島の名士たちが集まつた。この島は後鳥羽上皇が島流しになつた流人の島ということで、あんまり観光客がない。でも何か、島興しになることをやりたいということ、金子さんに「島うた大賞（隠岐全国俳句・短歌大賞）」をやりたいて島人が提案したところ、金子さんも無責任に良いじゃないかそれは、お、やろうやろうと言うことになつてしまった。島の人、これが確定したら来てくれますか？ そう頼んだら金子さんは、おお、来る来るとか引

き受けてしまつて、とうとう始まつたんです。

最初の二回位は金子さんも行つてくれたんですけど、後は「俺はちよつと歳取つてしんどいからお前やれ」とか言つて、全部任せられてしまつたんですね。そこで、ずつと今日に至つています。

楸郵先生の句碑があるということで、その句碑が、その後どういふ風になつていかなんという、まあ墓守つていふのがありますけどね、句碑を見守るといふか、そんなつもりで、毎年、隠岐の島へ通つていふわけです。

遠い所なんです。飛行機は島後という所までは、一日一便出ているんですけども、楸郵先生の句碑があるのは島前とうぜんといつて、隠岐神社のある島は船便だけしかない、別の島なんです。

島後は大きい島で、闘牛とか色々やつていふ土地です。ですから結構観光的なんですけど、島前の方はちよつとそこからさらに離れているので、名物もなく大変な地なんです。

一口に隠岐の島とよばれています。百六十いく

つかの小さな島が点在して、ほとんど無人島なんです。それで有人、人が住んでいる島は四つしかない。そういう島です。

昨日帰りました。僕ももう七十過ぎたんですよ。それで島の人に、そろそろ隠岐の島通いもこの辺で終わりにしたいと思ひます、つて言つたら、ちよつと待つてくたさい、あと三年ほど何とかありませんか？ つて言うんです。

なんで三年ですか？ 聞いたたら、三年経つとオリンピックがあるでしょ？ で、オリンピックは関係ないんですけども、その次の年に後鳥羽院が島に流されて八百年、その八百年祭をやるから、それまでは何とか続けてくれ、つて言うんです。ちよつと考えさせてくたさいつてさういふつて、いま帰つてきたところなんです。

まあ、あと三年は何とか行こうかな、と思つておりますけども、毎年、短歌の大会が一回と俳句の大会が一回行われているんです。

加藤楸邨先生が三十四歳の時、島に突然渡ったんです。後鳥羽院が島に流されたのは四十二歳の時ですね。後鳥羽院は皆さんご存知だと思いますけれど、当時の京都の歌壇では本当に超一流で、在原業平か後鳥羽院かって言われていたような、歌の名手ですよ。とっても華麗で艶やかな歌をずっと作っておられたんです。

和歌の世界では業平か後鳥羽院かと言われるような存在だったんですけども、その後鳥羽院が承久の乱を企てて、この政治的な画策の失敗で隠岐の島に流されたわけです。

流人の島といいますが、遠近いろいろありまして、京都にいちばん近い所は近流こんるという、近くに流される。その中間が中流ちゅうる、でいちばん遠い島に流される、それが遠流おんるの島ですね。隠岐の島とか佐渡島とか、そういう遠い所に流されるのは、国家の安泰を覆すような政治犯、などにかかわる人物が流されたんです。

天皇が日本を統治する政治と、それから武家、当時は武士が統治する時代が交互にありました。

それが交代して当時は、武家が日本を取り仕切っていたわけです。それを転覆させて、天皇の政治に、もう一度戻そうという計画を企つたのが後鳥羽院だということで、その罪で隠岐に流されたわけです。

後鳥羽院は華やかで煌びやかな歌を作っていたのに、淋しい隠岐の島へ流されて、環境が百八一度一変する。人里のない島の、そういう孤独な歌にここで変革するんですよ、歌が転換するわけです。

われこそは新島守よ沖の海の荒き波風
心して吹け

という歌が第一首目で、百首の遠流の歌、島流しにされた淋しい歌を作られた。それが、「遠島百首」です。その歌が、いまも遺っているわけです。その中には有名な百人一首に選ばれている歌も二首ありますし、その他にも多くの歌があるんですけど、とにかくガラッと歌風が変わったわけ

です。

同じように隠岐に流された後醍醐天皇の場合、後醍醐天皇の方は、非常に理知に長けていて、悪く言えば要領がいいというか。それで、後醍醐天皇も流されたんですけども、色々画策して、三年ですぐ脱出して帰ってしまつたわけです。

でも、後鳥羽院は、隠岐の島にある金光寺という島の小高い山頂、そこへ毎朝登っては、京都の方を見ながら、明日は帰りたい、明後日は帰りたいとずっと毎日毎日祈りながら、でもとうとう十九年間も帰れずに、島で亡くなつてしまつたんです。

後鳥羽院にとっては凄いな華やかな、華麗な歌だったのが、一気に隠岐に行つて孤独な、淋しい歌に変わったわけです。そういう転換期になつた島です。

では、楸邨はなぜそこへび行かねばならないという気になつたのでしょうか？ というところです。楸邨先生のお父さんという人は鉄道員、駅長

でして、楸邨自身も各地を転々となりました。

駅長とですね、警察官とかそういう人は、長いこと同じ地に勤めていると、土地と癒着して色んな良くないことが起こりやすい。だからそういう風にならないために何年かすると、すぐ転勤させられる。楸邨先生も父親に付いて日本各地を転々としていますね。

生まれは山梨の甲府といわれてますけど、すぐ同時にお父さんが東京に転勤して、山梨県の大月市から東京、東京から小田原、それから一関、各地へと全国を転々としているわけです。

二十歳の時に金沢へ移つて、そこでお父さんが亡くなつてしまつた。それで一家の生活が楸邨の肩にかかつてきましたね。妻子をかかえて、金沢から東京に出て来るわけです。

東京に出て来ても、非常に生活は苦しかった。でも当時は代用教員という制度があつて、その後の粕壁高校、当時は粕壁中学っていったんですが、粕壁（埼玉県春日部市）に赴任するんです。

お父さんが短歌が好きで、齋藤茂吉とか石川啄木、伊藤左千夫などのアララギ系の歌人の本がいっぱい書齋にあったので、それを引き出しては自分でも見よう見まねで歌を作っていた。なれるなら歌人になりたい、とまで思ってた短歌を作っていたんですね。

それが粕壁中学に赴任したら、菊地烏江うらぎとかいんな俳人がいて、その教員仲間によく俳句を作るんですね。教員室の柱の所に投句箱がいくつか設置してあって、月曜日から金曜日までは、出来た人が俳句を入れて、土曜日にそれを開いて皆で批評しあったり、いわゆる句会ですよね、そういう句会をやっていたみたいです。

楸邨はあまり俳句が好きじゃなかったんだけど、先生仲間から「俳句をやらないと仲間にしてやらないぞ」と言われ、それでいやいや俳句を作るようになった。

それで楸邨が最初に作った句は、「一杯の柚子湯を飲んでしまひけり」という句です。そうしたら皆が、楸邨の胃袋は凄いぞ、風呂桶一杯の湯

を飲み干したらしいぞ、とか言ってた大笑いされたそうです。

何故かというところ、葛湯くわとうとかレモン水というのは小さな（コップ）に入れて飲むでしょ。それと同じで冬至の柚子風呂ゆず風呂というのを、冬至に飲む飲みものと思っただけで、「飲んでしまひけり」と詠んだわけですから、大笑いされるのも、当然なんです。大体、俳句を始めると自分には合わないと思われて、その辺ですぐに、辞めるんですよ。自分は俳句が合わないな、と思ってる。辞めるのが普通ですけど、楸邨はそこがちょっと違っていたんですね。

それなら自分はこれから俳句をやってみようじゃないか、ということ、俳句を始めて二回目の句会の時は、もうトップになって、ほめられた。それから俳句の方に一気にのめり込んでいったんです。

楸邨は、皆さん、若い頃は短歌に興味があったんだけど、俳句に転向して、死ぬまで俳句を作っ

たという風に、そう思われている方が多いんですけども、実はそうではなくて、楸邨は八十八歳で亡くなるまでずっと短歌も並行して作っているんです、俳句といっしょにね。

私は、「俳句界」にいま、「牡丹と怒涛」という「加藤楸邨伝」という評伝を連載しています。今度出た今月号が、ちょうど五十五回。三年目で楸邨の短歌のところまで来て、楸邨が作った短歌を俳句と比べて批評して書いています。楸邨は亡くなるまで短歌を作り続けて、一冊の歌集になるほどの歌もあるんですね。

いろんな歌人や、詩人が、楸邨は俳人として知られているけれど、もし歌人になっていたら歌の方でも一流の名を成した大歌人になっているだろう、という風に書いてます。

この間亡くなった詩人で文化勲章の大岡信さん、「折々のうた」というのを書いていました。朝日新聞に連載した大岡さんもそう言っていますし、歌人の塚本邦雄は俳句も短歌もやるんですけど、非常に楸邨の短歌を高く評価している。あと、

「形成」を主宰していた歌人の木俣修きまたさんも褒めています。いろんな人々が楸邨の歌を褒めています。

俳句は五・七・五で、短歌は五・七・五・七・七、この七・七が、たった十四文字ほど長い。でも十四文字ですけど、これが在るか無いかによつて全然違いますよね。俳句の場合、楸邨はものの言えない文学だということ、沈黙の文学」とよく書いています。短歌の、七・七が尾ひれでね、ここで抒情を述べられるわけです。情をね、悲しいとか嬉しいとか楽しいとか、そういう感情をここで述べられるわけですね。楸邨の歌をつぶさに鑑賞すると、俳句で言えなかった、この未練を七・七で述べている、そこが非常に面白い詩型です。ぜひ皆さん、いま連載中のぼくの楸邨伝を読んで下さい。

さて、話が少しそれてしまいましたが、楸邨が隠岐に渡ったのには二つ理由があつて、一つは金沢から東京に出てきて、水原秋桜子しみづあきこの「馬酔木あしび」に入りました。松山から出てきた石田波郷はなみと一緒

に楸邨は馬酔木発行所に勤める。ちょうど秋桜子が「ホトトギス」という（高浜）きよし虚子（主宰）の：当時、大体八十パーセント以上、ホトトギス所属の俳人が多かった。「ホトトギス」大団ですね。そこで虚子がとなえたのは「客観写生」ってことですね。ものを見たら、それを写すということですね。秋桜子は、それが単なる写生じゃなく「主観写生」を入れるべきだということで、その辺で意見が違って「ホトトギス」を分かれて「馬酔木」を作る、そんなころだったんです。



その直後、秋桜子と楸邨の出会いがあった。楸邨の転居した近くの安孫子医院という病院―秋桜子は産婦人科の医院長でしたけれど―その小さい安孫子医院に、出張医療とあって秋桜子が何曜日かに出張して来ていました。

あそこに来ていた水原豊というのは、今をときめく秋桜子らしいぞ、ひとつ皆で行ってみようということ、玄関の門の所で粕壁中学の教員仲間たちが待っていましたら、案の定うわさの秋桜子が来た。そんなことから、秋桜子の門下になって「馬酔木」に入るわけです。そういう時代だったんですね。

秋桜子も熱っぽく俳句の新しさを楸邨に語り、楸邨も俳句を始めたばかりで、それを素直に受けて「馬酔木」で俳句を、やってみようか、ということになる。楸邨はお父さんを亡くしたばかりで、非常に生活が苦しかった。それを秋桜子が長男の春郎はるおさんの家庭教師を依頼し、生活費を与えてくれた。昼間は「馬酔木」や高校に勤める。いわゆるそんな生活を庇護してくれたわけです。そのこ

ろ秋桜子は「自然の真と文芸上の真」を書いて、虚子とたもとを分った。

楸邨ははりきって、二回目の馬酔木賞を受賞したんです。第一回目が石橋辰之助のちすけで人で、二回目には楸邨。そして、「馬酔木」だけでなく、俳壇でもあつという間に注目されて、スターダムにのし上がっていくんですね。

ですが、楸邨自身はこのころ非常に悩んでいます。秋桜子が求めていたのは、「馬酔木調」という、万葉調の俳句、いわゆる抒情的な俳句ですよ。

一方自分の作る境涯的な生活苦。俳句との間に乖離かいりがあつて、これを解消しない限り自分の俳句は変わらない、そういうことで悩んでいたわけです。それともう一つは、楸邨は芭蕉の研究家でもありましたから、これでいよいよ本題の芭蕉に入りましたね（一同笑）。

芭蕉は、皆さんご存知のとおり、若い頃は伊賀（兵庫県）の上野に生まれました。赤坂という所

が芭蕉の生家と言われています。そこに生まれて、若い頃にお父さんを亡くしてですね、藤堂家という武士へお城勤めに入るわけです。そのままいけば武士になって出世の道を一直線につつまるとこれで行こうと芭蕉は決意していた。

十六歳の時一緒に学んでいた二歳違いの若殿様で俳号を蟬吟せみぎん、本名は良忠よしただというんですけど、北村季吟という古典学者で俳人であり歌人でもある、この人に学びながら、非常に熱心に俳諧に打込んでやっていた、その人に付いたんですね。

芭蕉はそこに勤めていて、その若殿様と二歳しか違いませんから色んな料理も一緒に食べたり、俳句もやったり、友達みたいなもんですよ。その若殿様が突然死んじゃうんです。芭蕉は非常にがっかりもし、ショックも受けました。

昔は殉死というのがありましてね、芭蕉も一時は殉死を考えていたようですが、それは諦めて結局、生まれた伊賀の上野を捨てて、江戸に来るわけです。それで、日本橋で俳諧を勉強した。

そこまでの過程は貞門ていもん俳諧とあって、松永貞徳ていとく

という人がやっていた、当時流行していたことは遊びの俳壇に入つて、芭蕉は一心に勉強していたわけです。

京都から江戸に出てきてからは、俳壇の風潮が変わつて、談林調俳諧つていう、これは西山宗因という人が中心になってやつたんですけど、その俳諧が変わつて来たわけですね。いずれも言葉を非常に巧みに使つて作る俳諧ですけども、そういうのを、芭蕉も若い時代勉強して来たわけですよ。

芭蕉もいきなり蕉風の俳諧を作れたわけではない。当時流行していた俳句を学びながら、次第に蕉風（自分流）に移つたわけですよ。

江戸に来て、芭蕉は地方の知り合いが誰もいなくて苦労したんです。けれども、そのうちに芭蕉を支持する弟子が出てきて、例えば服部嵐雪とか、榎本（宝井）其角、それから杉山杉風とかね。こういう人たちが芭蕉を支えて、江戸の芭蕉の仲間がふえて、やがて蕉風を築いたわけですよ。

特に、杉風という人は生簀に魚を飼つてましてね。大きい池に鯉などを飼つてました。だから鯉

を料理屋とか武家とか大きい屋敷に卸して、多角的に経営してましたので、鯉を売買していた商人ということ、通称「鯉屋さん」です。要するにお金がありましたから、芭蕉のスポンサー的な役割も果たしていたんですね。そこで鯉屋杉風とも呼ばれていました。

そういう様々な人たちが現れて支持して、芭蕉は日本橋で立机する、俳諧の宗匠になる、わけですね。芭蕉はそのままいけば、江戸の日本橋で俳諧宗匠として裕福に、不安なくやつていったんです。けれども、突然、三十代の終わりになつて、そこを引き払つて深川（現在の江東区）に移り住むわけです。

なぜ、芭蕉が中心の日本橋、お江戸の中心を引き払つて、当時としては辺鄙、今は東京ですから賑やかですけども、深川の方に引っ越したかということですよ。ここが問題なんです。

芭蕉の当時は、人生五十年と大体言われていました。ですから、五十年生きられれば本望と言われていた時代です。だから芭蕉四十一歳の時に、

自分の残りの人生はあと十年だ、と自分の人生を括つたわけですね。で、四十一歳で一大決心して旅に出たわけですよ。

ここからが本題です。「芭蕉晩年の十年」というのは、芭蕉は自分で予測した通り、五十一歳で亡くなっています。四十一歳で旅に出て、五十一歳で亡くなっている。ちょうどまさに晩年の十年間ですよ。これからの自分の俳諧人生は、旅と自分の俳諧を一つにしよう、一枚にしよう、そこで自分の人生を終わろう、そういうことを決意したわけですよ。

そして、最初に旅に出たのは『野ざらし紀行』という旅で、その紀行文を書きました。

野ざらしを心に風のしむ身哉

という句を、巻頭において旅に出るんですけど「野ざらし」というのは、野に捨てられた髑髏ですね。旅に出て途中の野に、風雨にわが屍をさらすこ

とになるかもしれない、そういう悲愴をも覚悟して、これから旅に出よう、とこれが俳人芭蕉の最初の旅で、『野ざらし紀行』なんです。

その次が『鹿島詣』。鹿島紀行ともいわれますが、茨城県の鹿島根本寺中堂へ月見を兼ねて旅した、短い旅です。そこに芭蕉の禅の師匠、仏頂という和尚が参禅していました。そこに行くために芭蕉は旅したのです。

仏頂という和尚は笑つた事がない。だから「仏頂面」なんです（笑）。で、その禅の先生の鹿島へ行つた。この人はやがて『おくのほそ道』でも、雲巖寺という寺に行きますけど、奥の窟に仏頂の住んでいたところがあります。芭蕉が『おくのほそ道』で尋ねた時は、もう居ませんでしたけども、その仏頂和尚を訪ねています。

そして三番目の旅が『笈の小文』。

芭蕉が伊賀を捨ててもう十年も経つたころ、自分を産んでくれた母が郷里で亡くなった（天和三年）。そして、皆が建ててくれた芭蕉庵が、前年、焼失してしまつた。

それから当時は江戸では、すごい飢饉があったんです。食べ物食べられなくて、作物が取れなくて。自分の見ている前でバタバタと人が死んでゆく、そういう姿を芭蕉は目の当たりにし、自分は生きのびても、どうせ人間の命というのは永く生きようと思っても、どんなにお金があっても、永遠に生きられる訳ではない。命は永遠ではない、そう悟った。

それからまた、形あるものは必ず壊れるというか、喪失する。芭蕉庵という立派な庵を建ててもらったわけですよ。でも、火事で隅田川を渡って燃え移ってきた火にあおられて、芭蕉庵もひとたまりもなく全焼してしまふ。形あるものは必ず無くなる、そういう悟りです。

お金を持つてお墓に入ることも出来ない、そういう芭蕉は、人生はすべて無常だ、ということを覚悟したわけですね。だから自分の最後の十年は旅に出て、旅と自分の俳諧を一つにしよう、そう心に決めたわけです。中国の老荘思想です。

最後、『笈の小文』で故郷へ帰るわけですけど、

もう母は亡くなっている。箆筒に母が仕舞って取っておいてくれてあった、自分が生まれた時の臍の緒を手にして、しみじみと彼は泣くわけですよ。

古里や臍のをに泣としのくれ

故郷に帰って、母の追善供養をすると同時に、故郷のむかしの仲間と会うわけです。

その帰りには、まっすぐは帰らずに、信州の木曾を廻ってきます。姥捨山に寄って帰ってくる。それは『更科紀行』になっております。一種独特な書きぶり、これはこれで面白い文体の紀行になっっている。それが四番目の旅です。

そして最後の旅が、『おくのほそ道』ですね。皆さん誰でも知ってる『おくのほそ道』。二千四百キロ旅程、二百四十日にも及ぶ長旅です。深川の芭蕉庵から出発して、日光から松島、そこをずっと北上して歩いて、平泉から横に、最後に日本海

の方に移って南下し、岐阜の大垣で終わっています。本当に長い長い旅です。結びの地は岐阜県大垣で、紀行は終わっていますけども、旅そのものはつづいて、芭蕉は舟に乗って、伊勢の方にまで行って神宮詣をしています。

結局、人生の最期をどういう風に締めくくるか、それを、芭蕉はしっかりと自分で計算して生きた、芭蕉はそういう人なんですね。

さて、時間がなくなりました。今日、お話しする講演の依頼を、去年の早い時期から（俳句大会の）係りの人から受けてまして、どういう題で講演していただけますか？ という事で、とにかく次の予告を出すために、題だけを早く決めてください。いつて、せかされて内容考えないで決めたいんです。だからとつさに「芭蕉晩年の十年」という題にしておいて下さい！ といったんですけども、どうしてその時こういう題が自分の口をついて出たのかといいますと、ちょうど五、六年前に僕は幻冬舎という出版社から頼まれて、『芭蕉の晩年力』

という本を書いて出したんです。最期に力を振り絞った、芭蕉の十年のことを書いてます。

どういうことを書いたかというのと、「団塊の世代」って時代があったでしょ。団塊の世代というのは、子供の数が多かった。生めよふやせよの時代の事です。堺屋太一という人が名づけたらしいのですけれど、そういう団塊の世代というのはね、生まれてからずっと競争、競争で過ごしたんですよ。僕もそうですが、七人兄弟です。子供の数も多いし、競争競争をつづけて、中学、大学も競い合って来た。社会に入っても、エコノミックアニマルではないけど、もう働け働けで馬車馬のように働かされて来た。気づいたら、いつの間にか定年になっっていた、そういう人たちの時代なんですよ。

それで何をしようかといっても、とにかく働くことしか考えなかつた人生だったから、もう解き放たれた馬車馬みたいにやることも浮かんで来ない。そういう時代の人々に僕は、そういう人たちは今まで一生懸命働きたんだから、もう少し

このあたりでリセットして、自分の人生を見つめなおして、そして自分のやりたいようなことをしつかり見つけてやれば、もうそれで良い。

写真が好きな人は写真をやれば良いし、絵が好きな人は絵を描けば良いし、音楽が好きな人は音を楽しんで聴いたら良い、自由に過ごせばいい。ゆとりを持つての、スローライフ。人生を自分流に歩む、ということなんです。スローライフにチェンジして、自分を、今を楽しもう、そうして最期で締めくくる。そういうことを考えたら良いんじゃないかな、と。

例えば、芭蕉の晩年もそう。最期の十年を、自分の俳諧と旅をひとつにする。そうすること、それを目指して自分で決めて生きてきた。そんなふうに、自分のしたいことを見つけてやってくたさいと、そう書いたのが、その本なんです。

人間生まれてきたら、凄くお金持ちの家でお金が有り余るほどあるし、家も立派だし、そういう人だっているけれど、でももう、お墓の中までお

金を持つていくことは出来ない。だったら、それよりも、生きていくうちを楽しもう。何か自分が命尽きて最後に目をつむる時に、自分の辿ってきた人生はどうだったかな？と振り返った時に、ああ、自分の一生はいい人生だった。そんなふうにいろんな自分の心が納得できる人生。豊かな人たちと巡り合えて、一生を終えて本当に良かったな、そんなふうに思うそんな生き方をしてください、ということなんです。みなさんはいかがでしょうか。

逆のいい方をすると、生まれた時は貧しくとも、何か色々人生が波乱万丈だったけども、亡くなる時は、ああいい人生だったと、そういう心の豊かさを持って、亡くなってもらえるのが一番いい終わり方かなと、そんなふうにつくづく思いますよ。生まれた時に凄く裕福でも、最期はね、惨めでね、いつ、どうして亡くなったか分からないそんな淋しい、孤独死のような人もいるわけです。そういう風じゃなくて、心の豊かさを求めて、皆さん生きて行っていたらただければ本当に嬉しいのに

・会場 毛越寺本堂

・プロフィール

いし かんた

昭和45年 「寒雷」に入会、加藤楸邨に師事。

昭和49年 「寒雷」編集、同人。

平成元年 俳誌「炎環」を創刊、主宰。

句集 『あるき神』『炎環』『翔』『生還す』

『以後』『風韻』

評論・随筆

『愛句遠景』

『おくのほそ道』

『加藤楸邨一〇〇句鑑賞』

『山頭火』

『わがこころの加藤楸邨』

な、そういうことを思っているわけです。最期の十年というのは、人生にとつてとても大事な時なんでしょう。どうぞ、芭蕉の晩年にみなさんよく学んで下さい。きょうは、芭蕉を学んで自分の生き方を決めた、私の俳句の師・加藤楸邨からはじまつて、その楸邨の転機と芭蕉の転機とを重ね合せて、皆さんにお話いたしました。

会場をこうやって見渡して見ると、皆さん、いいお顔をしていますね（笑）。きつと、皆さん心豊かな最期を送られることだろうと、そう思いながら、この話を締めくくらせていただきます。

（一同拍手）

「翁」を語る

風信 / 語録

中尊寺新能（8月14日）
第40回記念

慶祝 白山神社能舞台屋根葺
替え・耐震工事竣工

面箱を捧げ持った千歳の役を先頭に、翁を勤める大夫、三番叟、囃子方、後見、地謡の順に列になって、橋掛りから舞台に出ます。この長い列、「翁渡シ」と言います。

シテが舞台正面先に座して恭しく深く礼をして始まりました。

いや、翁や千歳、三番叟など立方は、数日前から別火といって家族とは別に調理、食事をして非日常に気持ちを向けてきました。幕口の鏡ノ間に翁飾りといわれる略式の祭壇をしつらえ、全員が塩と御神酒をいただいて、身心を清

めてから舞台に出てきたのです。幕から出る前からすでに始まっていたわけです。

して どうどうたらりたら

りら たらりあがり
ららりどう

同音 ちりやたらりら

たらりあがりららり
どう

千歳 鳴るは瀧の水 日は

照るとも
同音 絶えずどうたり
ありうどう

颯爽とした「千歳ノ舞」のあと、シテは舞台で「翁ノ面」を着け天地人を祈祷する「翁ノ舞」で、

舞台は厳粛にして和楽（やわらぎ）の気に満ちてきます。

して 千年の鶴は萬歳樂と謡うたり……

今日（アノ）の御祈禱なり
天下泰平 国土安穩

舞い了って、シテは面をはずし幕に入ります。「翁歸り」です。

今度は、大鼓の打ち込みに合わせて三番叟が、大地を踏み固める「揉ノ段」で、舞台の雰囲気が一変しました。

先ず、千歳が荒地を拓き、翁がこれを鎮め祝い、三番叟が踏み固めて耕作することを象るともいわれてきたことが解ります。

そう、黒い翁に変身して舞う「鈴ノ段」は、その鈴を振る所作が種

まぎとも、稲穂を振っているようにもみえてきました。

まさに、「能にして能にあらず」、神の詞と舞が見せる祭式といえる律動感に満ちた暗の舞台でした。

中尊寺に所縁の佐々木多門師の披キ（大事な曲の初演）であり、一山の僧で狂言師でもある破石晋照氏の三番叟、熱演でした。

□ 新能奉行

千葉 利博様

(J R 盛岡駅長)

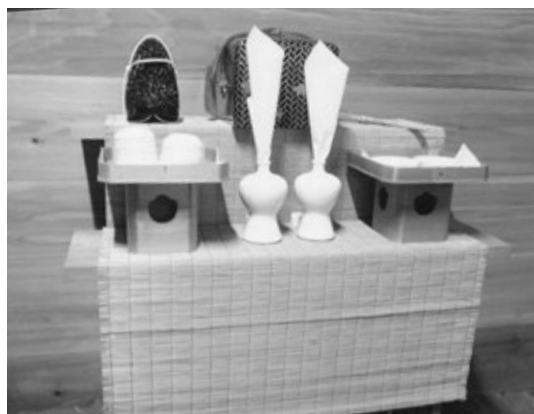
郷家 晃様

(松井建設東北支店)

菊地 慶矩様

(川嶋印刷社長)

□ 中尊寺新能実行委員会
会長 岩淵勝次郎



鏡ノ間の翁飾り

最初は一人旅の観光客だと思っ
た。

「おはようございます」

心なしか恥ずかしそうに、それ
でもきちんと立ち止まり、私の方
を向いて挨拶してくれた。少年か
ら青年へ変わったばかり、という
年頃の男の子である。

お堂を開け、次にあわただしく
札所を開けようとしている時だっ
た。反射的に「おはようございま
す」と返したのだったが、今どき
珍しい礼儀正しきだ、と感心した。

札所勤めは日々、一期一会であ
る。観光のお客さまはそれぞれで、
向こうから挨拶をしてくださる方
もあれば、こちらから「おはよう
ございます」と言っても黙って通
り過ぎる人もいる。そつとしてお

いて欲しいのだな、と思うことに
している。掃き掃除をしていると、

「ご苦労様です」と声をかけてく
ださる方もいる。朝は一日の始ま
り。観光で訪れる方たちにも気持
ちよく、いい時間を過ごしていた
だきたいと、挨拶を心がけている。

その夕方、観光客だと思ったあ
の若者に、今度は「お疲れさまで
した」と声をかけられた。繁忙
期のアルバイトさんだったのか、
と合点が行った。それからしばらく
の間、朝夕、彼と挨拶を交わす
ことになった。

ある日のこと、私がお堂を閉め
ようと堂内に入っていたとき、ト
ントんと階段が上がってくる足音
が聞こえた。あの若者だった。

「普段ゆつくりお堂を見ることが

できないので、見せてください」
とのこと。「この落書き、何ですか。

ひどいっすね」とびっくりしてい
た。千社札の話などしながら、一
通り見て、ありがとうございまし
た、と丁寧にお辞儀をして去って
いった。

秋も終わりに近づいた頃「もう
すぐアルバイトも終わりなん
です」と、彼が札所に寄ってくれた。
「あら、そうなの。終わったらどう
するの?」と何げなく聞いてし
まった。

「高校を中退しちゃって、それか
ら自分で勉強していて、大検を受
けたいと思っているんです。受かっ
たら次はセンター試験です」

思いがけず重い答えが返ってき
て、聞いた私のほうが戸惑ってし

まった。

私も若い頃、なかなか就職でき
ず、悩んだ時期があった。自分の
居場所を見つけられなかったの
だ。そして我が子にも厳しい試練
のときがあった。親としては見守
ることしかできない。それも辛い
日々だった。その若者のご両親も
さぞ心を痛めていたに違いない。

この若者の前向きな姿に、私は
ささやかな感動を覚えた。やけっ
ぱちになってもおかしくないの
に、目標を見失わず、どこまでも
まっすぐに進んで行こうとしてい
る。

それに引き換え、私ときたら近
頃身体にガタもきているし、気力
も萎えて、ついつい年齢のせいに
し、何かと後ろ向きになってしま

いがちだった。こんなことじゃい
けないな、と、この若者に活を入
れてもらった気がした。

「じゃあ身体に気をつけて、風邪
なんか引かないで頑張つてね。合
格したら遊びにいらっしやい」

「はい、頑張ります。ありがとう
ございます」と爽やかな笑顔だっ
た。

生きていれば誰にでも低迷する
時期がある。それをどう乗越え
るかで、その後の人生が変わって
くる。

今はまだそうは思えないかもし
れないが、まわり道も時にはいい
ものだ。私ぐらいの年になってみ
れば、どれが本道で、どれがまわ
り道なのかわからなくなってい
まっている。

だが、そこで得られる経験やい
ろいろな人との出会いは、かけが
えのないものである。いつかそう
思える日がきつと来る。

あの若者が吉報を携えてやって
くることを信じて、春が来るのを
楽しみに待つことにしよう。

(平泉町)

黎明

小野寺 律子

中尊寺月見坂の登り口、旧国道をはさんだほば向いでお世話になった飲食店「四季の花」は、去る十一月、十二年の歳月を経て閉店いたしました。この間の様々な思い出の中でも、特に店内に展示させて頂いたパッチワークキルト作品「黎明」と切り離すことはできません。

製作者脇澤さんとの出会いをこの機会にお話しさせていただきます。

夫が経営する水沢の飲食店で働く私に異変が起きたのは営業十周年を迎える頃でした。人と話せない、食事がとれない、夜眠れない、うつ病と診断されました。夫や友人のアドバイス、同じような症状をお持ちのお客様との出会い、治療の効果もあってか、何とか十周年まで維持できました。その十周年のイベントの折、ご来店三度目になる

お客様のご縁で、キルト作品「黎明」を店内に展示させて頂くことになりました。

製作者の脇澤さんは、六十歳のとき、富士登山に挑戦し、高山病で登頂を断念しようとしたが、同行の仲間の言葉に奮起し、闇の中を這うようにして山頂にたどり着いたのです。

その時に仰いだご来迎の感動をキルト作品に表現した脇澤さんは、六十七歳の時、一年がかりで「黎明」(二五×二二センチメートル)を完成させ、宮古市のキルト展で審査員特別賞を受賞しました。

この作品を前にした時、私自身、闇の中のずっと先に、小さな明りを見つけ始めていた時で、真正銘の特効薬に出会ったような思いでした。

ところが、受賞の喜びも束の間、脇澤さんは末期の乳ガンの宣告を受けます。

「作品を誰かに見て頂くことで一日でも意欲を持って生きて欲しい」ご家族の願いの込められた「黎明」を私どもの店に託して下さいました。

しかし脇澤さんは、病気に負けませんでした。ガンが骨にまで転移し寝たきりになっても、「ま

だ手だけは動くからね！」とキルト製作を続け、

「黎明」完成後わずか三年のうちに、三枚の大作を完成させ、全て店内に展示させて頂きました。

そんな脇澤さんと過ごすうち、ふと私の中の変化に気がきました。一日一日、自分を維持するだけで精一杯だったのに、脇澤さんと過ごす時間が愛おしいと思えるようになってきていたのです。

平成十七年五月、遂にお別れの時が来ました。「最後まで悔いなく生きたから、笑って送ってね！」と言わんばかりの素敵なお顔でした。

その年の十一月、店を水沢から平泉に移転することになりました。脇澤さんの作品も一緒です。

お客様から問い合わせをいただくたび、私は「黎明」との出会いや経過を話しました。

「宝物ですね」「このお店に入って、旅の大切な思い出が出来ました」「勇気をいただきました。生きることを諦めません」と涙をこぼす人等々、本当に沢山のお客様に勇気と感動を与え続けました。

私も、すっかり元気になりました。

平成二十九年十一月、「四季の花」店を仕舞うことになり、「お店がつづく限り飾ってね！」と遺言してくださった「黎明」は展示の時を終え、ご家族の許にお返しさせて頂きました。

嬉しい時も、苦しい時も、夫と私、そして沢山のお客様を見守ってくださいました。

・作品「黎明」裏表紙掲載

(奥州市)

「四季の花」では、地産品を店内で展示販売したり、新日本フィルのメンバーによる演奏会を開くなど、地元との交流を図っていました。店頭で、いつも鉢やプランターの花の手入れをされ、道路の方まで掃除をしている姿も。今は、寂しくなりました。

(編集子)

震災から今日まで

山田 清隆

私は、大正大学卒業後、東雲寺に戻り、平成四年五月から副住職として檀務に勤しんでまいりました。平成十五年度から天台陸奥教区仏教青年会副会長、その後会長を務めさせていただき、その間、天台宗仏教青年連盟代議員として出向。平成十九年度より天台仏教青年連盟役員を二期にわたり務めさせていただきました。

連盟役員の任期満了が近づくと、平成二十三年三月十一日 未曾有の東日本大震災が発生しました。私は前日より連盟の常任委員会出席のため埼玉の大宮に向向いており、その帰途で三陸自動車道を走行中に地震に遭遇し、道路が寸断する直前に何とか寺に戻ってきたのです。

その時は、すでに停電で信号は点いていない状態で、町中が地震によりパニック状態に陥ってい



震災直後の石巻市内



二階建ての鐘楼堂は屋根が崩れた

ました。地震発生から四、五十分後には寺に着いたのですが、隣にある蛇田小学校の校庭には親御さんの迎えを待つ大勢の児童がいたように記憶しています。

寺に着くなり、被害のすさまじさを目のあたりにし、動揺を隠せませんでした。山門は基礎から外れかけ瓦が今にも落ちそうで、戸が外れた状態。山門を入つてすぐの二階建ての鐘楼堂は、柱が折れ屋根が崩れていました。その時点で家の中の状況を想像し、身の毛がよだつ思いでした。

実際、自宅に足を踏み入れたところ、物が倒れたり落ちたり散乱していましたが、家族に怪我は無く幸いでした。本堂に向かう会館の一階は大きな被害は無く少々安心しましたが、本堂に入ると壁は落ち、仏具は散乱し、足の踏み場がない状態。何より驚いたのが施錠していた二重サッシが全開になっていたことです。当日は三月だというのに夕刻からは雪となり、本当に身にしみる寒さ。五時頃には日が暮れてしまい、家族が集まる場所を、と片づけを急がねばなりませんでした。私は地域

の民生委員としての活動を優先し、一人暮らしのご家庭を訪問し安否確認をすることと地域の方々の状況を確認することに走り回り、片づけは母と妻に任せました。

独り暮らしの方は不在が多く、親類の家や避難所へ避難していました。その頃付近には車の往来が少なかったのですが、夕方になるにつれて、避難所に指定されていた隣の蛇田小学校に多くの方が身を寄せ、校庭は車



震災直後の本堂の状況



でいっぱいとなりました。後日、お聞きしたところによると小学校には五百人を超える方々が避難したとのことでした。

その日から第一家と総勢九人でリビングでの避難生活が始まったのです。当時住職であった父は天台宗参務に就任しており、滋賀県大津市の天台宗務庁近くに単身で暮らしていました。

当日は、すぐにライフラインが寸断してしまい、情報はラジオから得ていました。ラジオの音が伝わる津波の情報は衝撃的で信じる事ができませんでした。今後の生活や将来に関して皆が不安を覚え、声を詰まらせたり顔を強張らせたりしていたことを思い出します。昭和五十三年に起きた宮城県沖地震を体験し、その他の大きな地震も経験していましたが、その多くはライフラインが当日または翌日には復旧していたのです。今回も遅くとも翌日には回復するものと思っていました。結局一週間かかったのです。それでもこの地域では一番早い回復でした。

お寺として何かできないか考えていた時、地域

の農家の方々が炊き出しを始めました。妻に内容を聞いてきて欲しいと頼んだところ、三時間で六百人以上の方が炊き出しを求めてきている状態とのこと。材料は、近所のスーパーが野菜や肉、魚等生鮮食品を無償で提供してくださったという事でした。檀家さんには農家が多かったので、お寺でも炊き出しを考えたいという趣旨を述べたところ、無理に始めて数量が不足し、皆さんに行き渡らなかった時の混乱を考えるように諭され、帰ってきたのです。考えれば、その通りでした。当時は多くの方々が蛇田に安全を求めて集まってきました。我が家だけは周りに迷惑をかけない、支援物資を頂かないという方針に変更をしたのです。自己満足かもしれないですが、より多くの方に物資がいきわたれば良いと思っただけです。

我が家ではプロパンガスでしたので、安全装置解除により使用可能となり、ご飯を炊いたり、調理することができました。当面は冷蔵庫の中の物を使って四人の子供のお腹がすかないようにする

こと、安全に寝ることの二つを重視しながら自宅での避難生活を送りました。使い水は、濁った井戸水を使ったり、雪をバケツに集めて解かして使用、二日後に避難所での給水が始まった時は一安心しました。また、食料は溶けてきた冷凍品を工夫したり、スーパーに三時間以上並んで買い求めましたが限度がありました。この時実感したのは、保存食は家族全員分最低三日の蓄えをする必要があるということでした。米はガス釜があったので助かりましたが、やはり電気が無い生活なので暗くなると寝て、日が昇ると起きる生活が続きまして食料にも限度があるので一日二食にして子供を中心に食べさせておりました。

次第に地震や津波で亡くなられた方々のお話が届くようになりました。火葬の準備ができた方から火葬までを執り行い、葬儀は四十九日過ぎの日程で計画させていただきました。ちょうど四十九日が四月二十八日、ゴールデンウィーク以降という形で了承していただきました。一週間は本堂、会館、庫裏(自宅)の後片付けに追われています

たし、携帯電話も通じなかつたので、親戚を探すために腰まで水につかりながら道なき道を行き、また知り合いが家族の安否を訪ねてきたり、時間があるようでない毎日、くたくたに疲れて夜を迎える状況だったように覚えています。

三月十八日夕刻にはライフラインが回復しました。しかし、隣が避難所でしたので、自分達だけが平穏な生活をしている事に心苦しさを感じながら暮らしていました。そんな中、地域の仏教会から遺体安置所での法要の連絡を頂き、安置所へ向かいました。すると到底法要が出来る状態ではなく、また担当者が内容を把握できてない状況。とにかく現場は混乱していました。震災から十日が過ぎても被害が大きかった地域は、ライフラインの復旧に目途が立たない状況でした。その後は遺体安置所での法要、火葬場が込み合っているため土葬による仮埋葬の法要に追われる日々が続きました。

三月下旬には、天台宗や延暦寺をはじめ、多くの寺院から支援物資を頂きました。本堂内に物資

を保管し、当初は、集積拠点のこの寺から私達ができる範囲でお配りし、後には人伝で、必要なものを自由にお持ちいただくよう変更しました。遠くは東松島市野蒜地区の方々などもいらつしやり、津



本堂が救援物資の保管場所に

波に巻き込まれた時の話や亡くなった方々の話などいろいろ話をされていきました。皆さんお寺という事もあり安心してお話をなさっては、安堵の顔でお帰りになったようでした。

五月の連休には、支援物資を求める方々が減り、被災した建物検査もして頂かなければいけないという事で支援物資の支給は休止させていただき、今後の東雲寺の再建へと進んでいかなければいけない時期となりました。

山門は、余震で落ちそうな瓦を撤去。道路への

落下は防ぐことができましたが、山門を通ることはできない状態が続きました。

山門を建築していただいた業者と復興計画の策定を開始。最初に山門の復旧に取り掛かり、八月のお盆前までに安心して通れるようにしていただくことにしました。次に鐘楼堂を十二月下旬までに復旧、昭和五十五年から続けてきた除夜の鐘を、絶やすことなく無事開催することができました。この年の鐘の音はひととき澄んで遠くまで響き渡り、皆の復興への願いを運んでくれたようでした。今では、二百人以上の方々に鐘を撞きに來ていただいております。

本堂の建て替えには時間がかかり、まず当時の住職に納得してもらうことから始まりました。その間、近所の檀家さんからは余震のたびに本堂が段々傾いてきているようだとの声も。本堂をこのままの状態にして復興は難しく、一度全部解体して基礎から組み直す方法と、新しく造り直す方法の二者択一を迫られている状態でした。しかしその当時、檀家の八割以上の方の自宅に被害が及ん

でおり、寺としては、今後二百年建ち続ける本堂を、と考え、建て替えを決断。業者の協力により



再建された本堂

設計監理を任せ、なるべく余計な経費を抑えることを考えて計画を立案しました。それでも、一難去ってまた一難、次々と問題が起きてきます。人生とは往々にしてそういうものですが、諦めずに前に進むしかありませんでした。建築には建築基準法と消防法などの法規があり、地震対策に関しては宮城県が一番厳しいとされています。過去の災害から考えれば当たり前かも知れませんが、その後、平成二十四年一月から解体がはじまり、一年七か月の後、平成二十五年八月のお盆から新しい本堂での法要を営むことができたのでした。この地域でも建物被害としては一番大きかった東雲寺が復興したという事で、地域の皆さんにも喜んでいただくことができ、それがまた大きな力にもなりました。

観音堂は本堂と共に解体しましたので新築することに。境内にあった観音堂、護摩堂、一時預かり所の三つの建物を一体化したものを考えました。建築会社との打ち合わせの中で「この地域に無いお堂を造って復興の象徴としては如何でしょう



新築された三光堂

うか」という話があり、費用等を考慮した上で現在の八角堂建立となりました。お堂を建てるに当たり十二支を調べて方角を調べてみましたら、正

面が御本尊である阿弥陀如来に当たたることを知り、建設決定に至ったのです。

八角堂は現在三光堂という名に変更しましたが、今回の震災で判明したことが数多くありました。以前山の上にあった当寺が現在の場所が開山した時の由来の仏像を発見、また御本尊が時代により変わったこと、さらには今日まで目にすることが無かった大般若経を発見、と災い転じて福となるような経験をさせていただきました。

三光堂の建設は、平成二十六年一月から始まり平成二十七年七月ごろに細部を残して完成いたしました。全ての工程が終わったのは、平成二十七年暮れとなりました。しかし、外構工事はまだ続いている状況です。

平成二十七年四月に前任職から任職を受け継ぎ二年が過ぎましたが、まだまだ任職としての重責に叶った働きができていないように感じるばかりです。任職を受け継ぐ儀式(親授式)の答辞で「仏教の伝統と地域の風習などを堅忍不拔の精神で次世代へ伝える」と決意を申し述べました。このこ

とは震災で地域の風習が変化し、また寺院自体が変化してきていることを感じ、将来、地域に残る方々に私は何を伝えていくべきか、もしくは情報社会となった現在と、過去におけるしきたりなどの違いをどう伝えていったらいいのか、を模索していた時のことでした。

震災からまもなく七年、復興事業工事もほぼ終わろうとしています。これから徐々に私が思い描く寺へ、そして地域の方々が集う寺へと変革を成していきたいと考えてます。

東日本大震災で被害を受けた方々には、まだまだ復興途中の方も多くいらっしゃると思います。少しでも手助けをできれば、と思っています。

最後にこの誌面をお借りいたしました。震災当時、物心両面で支えていただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

やまだ せいらゆう

石巻市 天台宗 東雲寺住職

“平泉らしさ”を 求めた二年間

藤澤 義人

思い起こせば九年前のまさに今頃、当時の人事課長に呼ばれ、平泉町役場への出向を打診されました。当時は交通企画課に所属し、少子高齢化やモーターゼーションの進展により年々利用が減っていく公共交通の維持活性化に励み、交通弱者の救済にやりがいも感じていました。また当時は地域交通の維持には交流人口、いわゆる観光客を巻き込むことが必須だと言われていましたが、「遊びの観光」と「生活のための足」とを一緒にするなどという偏屈な考えを持っていました。打診されたポストは「世界遺産政策監」という仰々しいもので、世界遺産登録後の大量の観光客の流入を見越して、その受入環境を整備する、まさに観光の

仕事を中心でした。ですが、冷静になって考えた時に、直近に世界遺産登録を控え全国から注目される地で、これまで培った交通政策も含めた仕事ができるというやりがいの大きさが勝り、すぐに受諾してしまいました。

その後、四月に初登庁を迎えたのですが、町民の方はもちろん役場の中にも誰一人知っている人もなく、また観光関係の仕事も初めてなので、始めのうちは当時の農林商工観光課長の後を常に付いて回り、観光関係の方々やお寺の方々、住民の方々などの顔を必死で覚えていきました。両山の方々も始めは恐くて、いや恐れ多くて近寄りがたかったのですが、よそから来たものに気を使つて特にやさしく接してくださり、徐々にではありませんが、こちらの提案やお願いなども直接相談できるようになっていました。

そうこうしているうちに五月となり、注目のイコモスの勧告が「登録延期」と出て、少し心配はしましたが、七月のユネスコの会議ではひっくり返るものと楽観的に捉えていました。ですが、そ

れが覆ることなく、「登録延期」のままとなり、一時は途方に暮れたところです。しかし、皮肉にもその報道があつて以降、世界遺産登録を目指す“平泉”への関心が急激に高まり、国内外から観光客がどっと押し寄せました。

もう落ち込んでいる暇はない。自分にできることは何かと考えた時にまず課題となつたのは、駅に溢れた観光客にいかにか適に周遊してもらうかでした。そのためノウハウや交通事業者とのパイプは多少あつたことから、新しい交通手段を考えるよりも既存のものを甦らせてさらに使いやすいものにしていこうと考えました。そこで既存の市内巡回バス「るんるん」を思い切つて三十分間隔から十五分間隔とし、始発終発時刻も広げて運行本数を倍以上の二十七本として大幅に利便性を高めました。また、バスに乗った時点から平泉の風情を感じてもらいたいとの思いで、役場の面々とも相談し、金色堂や浄土庭園、芭蕉の句なども組み入れたラッピングを車体に施しました。こちらも観光客に大変好評で、バスの前で多くの方々

が記念写真を撮つてくださるなど、“平泉ならではの愛着のある乗り物となりました。さらにこのバスに

地域の方々のおもてなしの心も是非入れ込みたいと考え、毎日自転車で行き、バスを回し、バスの一日フリーパスを提示した場合にほんのちよつとでもいいから何かお店独自のサービスを提供してくれないかと頼んで回りました。するとお店の皆様方より買物金額の割引やソフトドリンク一杯、一品おかずの追加など様々なサービスを快く申し出ていただきました。それに対する感謝として、バス時刻表付きのマップに一件一件のお店をプロットし、写真も掲載し



巡回バス「るんるん」

てバス利用者の方々にお配りさせていただきまし
た。フリーパスを見せることによってお店からほ
んの少しでも何かサービスしていただくことは、
観光客にとってももちろん嬉しいことです。また一
方で地元の方々にとっても、そうした振る舞いに
よって少しでも観光客との会話が生まれ、触れ合
いが生まれ、おもてなしの心がより伝わり、お互
いに心が温かくなるのではとの思いからでもあり
ました。その後、バスだけでなく、よりきめ細か
く街中を闊歩できるレンタサイクルでも同様の
サービスを付加し、このマップを手に周遊してく
ださっている方々が今でもたくさんおられること
を嬉しく思います。また、そのサービスを今でも
ずっと続けてくださっているお店の方々にも深く
感謝いたします。

ほかに受入環境整備のため、語り部タクシー
の実施や平泉駅の改装・バリアフリー化に向けた
JRとの折衝、そして特に、今後さらに増客が見
込まれるインバウンド（訪日外国人観光客）対策
として、多言語表記の看板や観光HP・パンフの

多言語化なども手
掛けました。世界
遺産登録の再チャ
レンジは時間がか
かりましたが、そ
こを逆によい時間
をいただいたと解
釈し、「その日」
を指して役場の
方々とともにでき
ることをとにかく
やり抜こうと切り
替えて動き回って
いました。



多言語表記看板

そうした中で役場の外の方々とも少しずつ知り
合いとなり、頻繁に集まって平泉らしいおもてな
しなどについて話し合うことがしだいに多くなっ
てきました。それがいつからか「きよひら会」と
名づけて定例的に集まることとなっていきまし
た。メンバーは、町の有志の方や若手僧侶の方、
県南広域振興局の方々などです。そこで出たアイ



紙芝居「みんな なかよし ひらいずみ」

ディアの一つとし
て、県南広域振興
局の有志の方々が
中心となって手作
りで作成した、紙
芝居「みんな な
かよし ひらいず
み」をもっと幅広
く浸透させていけ
ないかということ
でした。この紙芝
居は平泉の浄土思

それに取って代わってこの冊子を配置し、まさに
「平泉らしさ」たる藤原氏の平和思想や浄土思想
をより分かりやすく知っていただき、その思いを
抱いて翌日から平泉を回っていたかどうかという趣
旨からです。それを何とか実現すべく、わずかで
すが財政にお願いして予算を獲得し、町内のホテ
ルのご理解を得て配備することができました。ま
た、今後のインバウンド対応も考え、英語版の冊
子も作成し、観光案内所などにも配備しました。ま
部数もそれほど多く発行しなかつたし、地味な取
り組みだったため、その後どうなっているか不明
ですが、「平泉らしさ」を活かす取り組みとして
今も継続していれば嬉しく思います。

想を小さな子どもにも理解できるように、わかりや
すく身近に感じてもらうためのもので、これまで
県では県内の小学校や幼稚園などを積極的に回
り、それらの読み聞かせを行っていました。「き
よひら会」では、このコンパクト版の冊子を作成
し、ホテルの一室一室に置けないかと考えました。
各地のホテルに宿泊した際、部屋の引き出しに聖
書がよく入っていたりしますが、平泉においては

さらに在任期間中に自分の勝手な思いとして心
に残っている取組に「平泉まちスポコン」があり
ます。町では当時すべての人が一緒になって世界
遺産登録を目指しているというわけではなく、世
界遺産になっても平泉地区の一部の観光関係者に
恩恵が及ぶだけで、その他の地区は蚊帳の外だと
いう声もありました。確かに世界遺産登録される



「平泉まちスポコン」
募集ポスター

史跡地はいくつかのエリアに限定されますし、観光客が来て恩恵を受ける人たちも限られてはいます。にもかかわらず、町全体を対象とする景観条例やまちの美化活動などが課せられるなど負担は大なり小なりすべての住民に及ぶこととなるためです。観光客も基本的には史跡地を中心に周遊することは否めませんが、平泉には川向こうの長島地区や山間の達谷地区、戸河内地区など味わい深い地域や埋もれた観光資源がまだまだたくさんあります。中尊寺や毛越寺だけが平泉ではなく、



「あなたにそっと教えたいもう一つの平泉」平泉再発見絵地図

そうした史跡地や浄土思想の背景となる周りの地域も巡っていただき、まるごと平泉を体感してほしいとの思いと、住民の方々にも自分たちの地域を改めて見渡し、誇るべき景観や観光資源が身近にないか再認識していただきたいとの思いから、「まちスポコン」を始めることとしました。同様の取り組みは、他の自治体ではほとんど行われていませんが、平泉では観光資源として知名度や評価の高い史跡地が多数あるがゆえに、あえて地域資源の掘り起こしや磨き上げなどはあまり行われてこなかったようです。平泉の隠れた魅力を発掘し、世に出して、あらためて自分たちのまちに誇りを持ち、点ではなく面での「平泉らしさ」を感じてもらいたいとの思いでした。そのために「平泉まちスポコン」では、町民から自分の好きな景観やたたずまいなどを写真や絵に書いて募集しました。その結果、五九三点もの応募をいただき、町民文化祭での展示や審査会を経て選ばれた風景などを題材とし、町民参加の「マップづくり懇談会」も開催して丁寧に絵地図に落とし、「あなたにそっ

と教えたいもう一つの平泉」と銘打って観光客などに配ったりしました。この取り組みも地味な取り組みではありましたが、平泉をまるごと味わってもらおうことと、何より住民の方々に普段何気なく見過ごしているものでも、観光資源として他にはない「平泉らしい」風情がたくさんあることを再認識していただくとともに、多くの方々に今後も観光まちづくりに参画してもらえればとのねらいもありました。こちらもも今どうなっているかわかりませんが、あれから十年近くたって、またもう一度自分たちの身の回りの素晴らしいものを内から見つめ直す何らかの機会もあっていいのではと思っています。

ほかに二年の間に、町民有志による中尊寺の「不滅の法燈」への菜種油の奉納（平泉なのはな会）の立ち上げ）やどぶろく特区の認定、農家民泊の推進など「平泉らしさ」を感じてもらおうための取組を仲間とともに行ってきました。ただ、世界遺産は登録後三年経ったら一時的なブームも去り、観光客が減るとよく言われています。平泉

と教えたいもう一つの平泉」と銘打って観光客などに配ったりしました。この取り組みも地味な取り組みではありましたが、平泉をまるごと味わってもらおうことと、何より住民の方々に普段何気なく見過ごしているものでも、観光資源として他にはない「平泉らしい」風情がたくさんあることを再認識していただくとともに、多くの方々に今後も観光まちづくりに参画してもらえればとのねらいもありました。こちらもも今どうなっているかわかりませんが、あれから十年近くたって、またもう一度自分たちの身の回りの素晴らしいものを内から見つめ直す何らかの機会もあっていいのではと思っています。

も様々なイベントなど思考を凝らして誘客を図っていますが、徐々に観光客は減少してきております。観光客は世界遺産登録直後のようにずっと右肩上がりです。伸び続けることは難しいと思います。今後は単なる誘客活動やイベントのみならず、地に足をつけ観光客のニーズや動向などを徹底的に調査分析して他にはない「平泉らしい」「魅力（強み）を打ち出していくことが重要だ」と思います。

先頃道の駅もオープンし、中尊寺通りやスマートICなども今後整備されると聞いております。まちがどんどんきれいになることは良いですが、一方で平泉はまちがきれいになりすぎて無機質になり、「ひとが見えない」「まちに「生活が見えない」という声をよく聞くようになりました。また、今後の施策である観光立国の推進により、さらに外国人観光客が増えてくるのが予想されます。お寺側でもそうした流れを意識し、外国人観光客とより積極的に触れ合うため、多言語を一生懸命学んでいる僧侶も出てきていますと聞きます。インバウンドの取り込みや国内観光客のリーダーの増

加を図るため、よりヒューマンな要素が求められてきますが、そのためにはお寺や観光関係者のみならず住民の方々の側においてもより開放的になり、平泉ならではの体験メニューの発掘や在任期間中特に普及にこだわってきた「農家民泊」など、観光客と直接触れ合える機会をより創出し、平泉ファンの拡大を図ってほしいと思います。

最後になりますが、ハード整備も必要ですが、そこには他にない「平泉らしい」「趣をきめ細かいところまでエッセンスとして注入するよう気を配り、平泉を訪れた旅人が日ごろのストレスから解放され、明日への活力で満たされて再び戻っていただけるような地に今後さらになっていくことを切に願っています。

プロフィール

ふじさわ よしと

国土交通省東北運輸局交通政策部長。
元平泉町世界遺産政策監。

訪日外国人観光客

誘客について

破 石 晋 照

訪日外国人旅行者（通称インバウンド）誘客に初めて携わったのは二〇一三年の秋のこと。それまで国内での誘客活動もほとんど経験してこなかった私が、海外留学経験があることや、多少なりとも外国語を操ることができるという理由からか、先輩に背中を押していただき、台北で行われた国際旅行博への参加から誘客活動を開始しました。文字通り右も左もわからない中に放り込まれた私は、会う人すべてが初対面の、しかも誘客活動については、もう百戦錬磨の方々ばかりです。そのころの私にできたことは、皆様の後について歩くことばかりでした。

しかし、回を重ねて様々な誘客活動に参加していく中で、徐々に仲間・知り合いも増え、普段から頻繁な情報交換ができるようになり、近頃ようやく主体的に誘客活動を行うことができるようになってきました。



台北での国際旅行博への来場者は30万人を超える

初期のインバウンド誘客活動としては大きく分けると国際旅行博などでの誘客活動や各地で行われる誘客説明会や商談会への参加。そして直接現地の旅行会社やメディアを訪問しての直接的な誘客活動があると思います。

国際旅行博とは大規模な旅行博覧会で、各国の大規模なイベント会場で行われる数日間の催しです。日本各地の自治体や民間団体はもちろんですが、世界各国からブースが出展され、毎日来場する数万人の一般のお客様と旅行会社やメディアに対して情報を発信します。この旅行博に参加することによ

り、一般の旅行をする人、つまり、観光事業者側にとつてのエンドユーザーと直接会話をすることが可能となります。その国の、その時の旅行の傾向や流行を、生の声を通して掴むことができるということです。国・世代そして世相により、一般旅行者の海外旅行への傾向は、時とともに変わるのには日本でも海外でも同じです。実際に旅行をする皆さんと、面と向かつて話をしながら、その国の空気を肌で感じ、誘客・紹介を行うことができる貴重な誘客の場であり、情報収集の場だと感じています。

商談会は旅行博の期間中に催されたり、あるいは日本に海外の旅行会社を招聘し行われるもので、観光施設の紹介や情報交換などを行います。商談会には、これまで面識のなかった旅行会社の方も出席されます。ですから、新たなつながりを作るための場、知り合う場として有意義です。旅行会社側も「まだ取り上げたことのない新しい魅力的な観光地」をさがしに参加されていますので、多くの情報提供ができるように取り組みます。この商談会を通して知り合った旅行会社とは、その後も連絡を取り合いながら季節に合わせた情報提供などを行い、時には会社を訪問し、親

密な関係を築くように努めます。とりわけ、アジア地域の旅行業界では、普段から親密なパートナーを優先するという傾向が顕著です。一歩踏み入って、先方へ足を運んで顔を合わせることによって相手と親密になることができ、一回会っただけとは比べ物にならないくらい、好意的な協力をしてくれることもあるのです。そのような信頼関係を築くためにも個別のエージェント訪問は欠かせません。昔から訪日外国人誘客活動に力を注いでいた団体であるほど、数多くの旅行会社と親しくすることができていると言うこともできるかもしれません。海外で活動を始めた頃「平泉」を取り上げてくれている旅行社など皆無と言っていた状態でしたが、お互いに行き来を重ねた結果、今では取り上げてくれるようになった旅行会社もあります。

残念ながら海外の旅行会社を訪問した際に、最初から旅行先として「平泉」を扱っている会社はほとんどありません。昨年、日本への渡航者が六〇〇万人を超えた中国の旅行会社でも、扱われていることはほとんどありません。世界遺産に登録されるという事と、世界の人に認知されるということがイコールの関係にはならない、ということを痛

感させられました。アジア、アメリカ、ヨーロッパをとわず、初めて会った時に我々のことを知っている旅行会社はほとんどなく、いつも日本地図で場所を説明するところから平泉の紹介することになります。旅行会社が知らなければ、そこへやってくるお客さんに平泉への旅行を提案することはできません。ですから、まず何よりも、できる限り多くの旅行会社に平泉の魅力を発信することによって、

平泉を訪れて魅力を味わっていただける方の数は着実に増えてゆくはずで

す。誰しも、旅行先を

決めるときには「〇

〇に行つて〇〇が見

たい、〇〇がしたい」

という動機を持つと

思いますが、アジア

から東北を旅行する

方々の旅の目的を代表するものには桜や紅葉や樹氷などの「自然」が挙げられます。しかし、桜や紅葉を見るために近隣を訪れた方々でも平泉に立ち寄らずに帰国されてしまう方が多くいらつしやいます。東北旅行を扱う旅行会社の担当者でも、観光地平泉を知らないのでは行程に入らないのです。

様々な活動を通して、少しでも多くの方々に平泉を知ってもらい、少しずつでも「東北に行つたら平泉に行きたい」

「東北旅行を作るなら平泉は欠かせない」という人を増やしていきたい。日本人であれば、歴史の教科書を通してな

ど、心のどこかに平泉が引っかかっているはずで

す。しかし海外からのお客様の多くには、まずその前提が無いとい

うことをこちら側が認識しなくてはいけません。イメージ

の無い状態から、イメージを作るということは簡単ではな

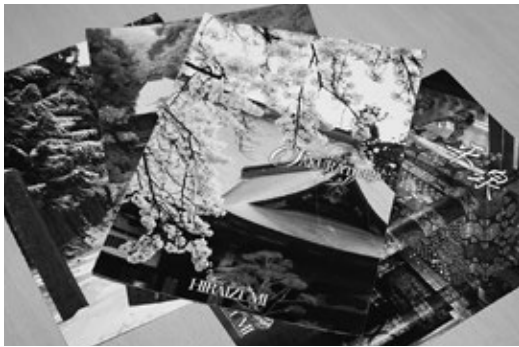
いと思いが、どうやったら少しでも相手の心に「平泉

の魅力」を届けてあげることができるか、ということに意

識を持つて活動するべきだと考えます。これは、前述し

た「桜」や「樹氷」にヒントがあるのではないかと思いま

す。旅行博で東北への旅行を考えている方の話をきくと、



インバウンド誘客パンフレット

「桜がものすごく綺麗なところ」として展勝地は知っていても、実際にはそれが、岩手県北上市の「展勝地」という場所だということは知らないようです。同様に「樹氷」というイメージをもっている方もほとんどいません。皆さんただ漠然と「日本の北のほうにある」と認識しているだけです。それでも多くの外国人を集める理由は、どこかで情報に触れ「地名がわからなくても、そこに行ってみよう」という強い動機が心に生まれたからに違いないと思います。

旅行の行き先を決める時に「強い動機」に勝るものはありません。多くの旅行者も、初めて訪れるモンサンミシエルがどこにあるのか、ということを経験から正確には知らないはずですが、しかし、「水に浮かぶように見えるそこに行ってみよう」という動機を持った時、既にその人の旅行先は決定され、そこに辿りつくための手段を探さずには

ありません。圧力的な金色堂を、いかにして人々の「心」に見せてあげるのか……、誘客活動を始めた当初から、そしてこれからもずっと悩み続けるテーマです。おそらく、最初から平泉の全ての魅力を人の心に印象づけるのは困難だと思いま

八月十四日のこと

北嶺 澄 照

第四十回中尊寺新能が開催された昨年、平泉喜桜会の山田順作さんが五月に、会長の岩淵勝次郎さんが七月に亡くなられました。中尊寺の能、そして中尊寺新能の開催に力を尽くしてこられたお二方でした。

白山神社能舞台は、茅葺き屋根と歳月に洗われた素木の木目が美しい舞台です。五月四・五日は中尊寺の鎮守白山神社の祭礼で、古実式三番と能狂言（神前に奉納するので御神事能という）が奉納され、秋の藤原まつりの十一月三日にも能楽が催行されます。年二度の舞台を中尊寺の僧侶が勤めるのです。地謡を勤められるのが平泉喜桜会のみなさん。お二人は喜桜会の重鎮として活躍されてきました。

勝次郎さんは、昭和二十年代後半から地謡を勤められてきた方。

「北嶺君、君のおじいさんの亮詮さん、親父さんの澄仁さん、君と、三代のシテの地謡を勤めたんだよ」

す。しかし、「金色堂」はそれ一つを知ってもらい、世界中から足を運ぶための動機となる十分な魅力がまつているコンテンツだと信じています。世界のどこかで、たまたま金色堂を目にした誰かが「ここ行きたい。金色堂を目の当たりにしたい」と思い立ち、旅行を計画して、憧れの金色堂の前に立つ。感銘を受けたその人は、やがて帰国後にさらに詳しく金色堂を調べ、平泉を知り、奥州藤原氏の思想にまで触れることになるかも知れません。そうして「中尊寺とご縁を結んでくれる人、奥州藤原氏の思いにふれてくれる人が一人でも増えてくれること」こそが外国人旅行者誘客の目的であり、活動の意義だと考えています。

（総務部次長）

祖父は、私が生まれる前に他界。写真でしか祖父を知らない私に、この一言に続いて、戦前から戦後の混乱期にかけての平泉や中尊寺の昔語りをしてくれたものでした。

順作さんも半世紀以上にわたり地謡を勤められ、

「俺はあんや（兄貴、ここでは勝次郎さんのこと）についてぐんだ（付いていくんだ）。何あつても、ついでぐんだ」と言うのが口癖。熱い思いを持って、喜桜会を、勝次郎さんを支え続けた人でした。

月遅れのお盆、八月十四日は中尊寺新能。喜多流の能、和泉流の狂言が、職分（能楽における職業的な能楽師）の方々によつて披露されます。

第四十回記念の昨年は、能の中で、最も古く成立したとされる「翁」が演じられました。

舞台上に登場するのは翁、千歳、三番叟、囃子方、後見、地謡。若さを象徴する「千歳ノ舞」のあと、白い翁面をつけて天地人を祈祷する「翁ノ舞」、大地を踏み固める三番叟の「採ノ段」と、さらに黒い翁面をつけて耕作の道を象る「鈴ノ段」へと続きます。

私をご指導いただいている佐々木多門先生が翁を勤める大夫、三番叟は山内金剛院副住職でもあり狂言師でもある破石晋照さんが舞台を勤めました。

当日、午前中は小雨が降り、その後もポツンポツンと落ちては止み、いつ降ってくるのか、と思わせる天気でした。本坊輪番の私は、盆中にご参拜の方も多く、しかも、朱印帳ブームが続いていて朱印を書くのに忙しく、

——今年の薪能を見るのは無理だな。

——今年の新能を見るのは無理だな。

と思っていると、開演時間を過ぎてしばらく経った頃、総務執事が来て、

「多門先生の『翁』は間に合いませんが、晋照さんの三番

叟には間に合いますよ」

と声をかけてくれたのを幸い、能舞台に向かいました。行ってみると、二十五人ほどの方が会場の外に。大夫上演中の場合は絶対なる清浄しょうじょうの場とされていて、その間、途中入場できません。それでお待ちになっていたのです。

薪能の会のスタッフが、「翁ノ舞」が終わったのを見計らって入場させてくれ、私は見所けんしょの後ろの方に立ちました。

き替えられた茅葺き屋根は美しく、老杉は雨に洗われて緑濃く、仮設屋根なしでの公演は好評だったようです。

閉場後の後片付けが終わり、町内で出演の先生方、薪能の会スタッフを交えての懇親会が開かれました。

ここから、平泉訛りで書いた方が雰囲気が出るのでそうさせていただきます。

「よく本格的な雨にならねがった（ならなかった）。大したもんだ」

と一人が言うと、

「今日の天気は、勝次郎さんと順作さんのおかげだ」

「それでも、午前中の準備は雨でたいへんだったべ」

「それは勝次郎さんが俺だちに気合いつこかげだのさ（俺たちに気合いかけたんだよ）。『おめだち、すつかりど、やれ（君たち、今日の舞台が成功するよう、しつかりとやりたまえ）』ついで（こと）や」

「順作さんが『あんや、そんなに雨降らせて、だいじよぶすか（大丈夫ですか）』ってよごでかだつてると（横にいて言っているよ）」

三番叟は、直面ひだめんと言つて、面をつけずに舞う「揉ノ段」、続いて面をつけ、鈴を振り鳴らしての「鈴ノ段」を舞います。三番叟の動きも囃子も急テンポになり、舞台は最高潮に。舞が終わわり、笛座に行き面を外した後、三番叟、囃子方、地謡が幕へと入つていったのでした。

上演中の見所は、女性の方が咳を一つしただけで、静まりかえっていました。

諸役が幕に入る時、二人の男性が語り合いながら（かんざん亭）へと。観客の方が何人も後ろを振り向く。二人は普通の声でしゃべっていたのですが、その声がとても大きく聞こえたのです。神聖な空間にいた私たちにとっては。

最後の一人が幕に入り、拍手が始まりました。厳かな「翁」を見た後の、一人ひとりがそれぞれの感動を内に秘めた、そう思わせる拍手でした。

演能中は、一時霧雨が降り湿度は高かったものの、強い日差しを浴びることはなく、屋根のない見所での観能には、まずまずの状態でした。ここ数年、ゲリラ豪雨などの荒天に備え、仮設の屋根を設置していましたが、今年は特別に見送つたのです。見上げると、能舞台保存修理が竣功、葺き替えられた茅葺き屋根は美しく、老杉は雨に洗われて緑濃く、仮設屋根なしでの公演は好評だったようです。

「それなのに、『んで、もうすこす、やりすか（それじゃあ、もう少し、雨降らせましょう）』なんて、つづげで（続けて）言つてんのさ」

「舞台が始まってから霧雨だけで済んだのは、勝次郎さんが『順作、もうこのくれで、いが（順作さん、もうこのくらいでいいだろう）』つて言つて。そうすつと（そうしたら）順作さんが『もう、このくれにすべ（もう、このくらいにしましょう）』つてさ」

「目に映るようだ。二人が語っているの。正に天佑神助、開演後、よく降らねがったな（よく降らなかつたな）」

「んだ、んだな（そうだ、そうだな）」

「天佑神助」、「大辞林」には「天のたすけと神のたすけ」とあります。「翁」が演じられたこの日は、私にとって「天」と「神」、そして「あの世から見守ってくれた先人たちの存在を感じた一日となりました。」

（葉樹王院住職）

東日本大震災

七回忌法要を厳修

千葉 亮 賢



下野天台座主宏川森川を述べられるお言葉

要」を、森川宏映天台座主、下野大導師のもと、山田俊和中尊寺貫首、藤里明久、毛越寺貫主を副導師として、全国の宗務所長出仕のもと厳修され

ました。震災物故者のご遺族や、被災された方々、地元の檀信徒、全国からの宗内諸大徳も参列され、総勢三〇〇名が鎮魂の祈りを捧げました。あの震災から六年。七回忌を迎え、森川下野は本堂で法要を勤められた後、最愛の人々を失った被災者の方々に、お言葉を述べられました。

東日本大震災が発生して以来、本年で七年目を迎えました。犠牲になられた御尊霊に、心より哀悼の意を表する次第でございます。法華經の第十六章寿量品に「常懷悲感心、遂醒悟」という有名なことばがあります。

「常に悲しみを懐いて、心遂に覚醒す」常に悲しみを懐いていると、その悲しみが心を浄化し、皆様を強い覚悟の世界へと導いてくれるでしょう。悲しみの中にある大事な人の面影は、いつまでも皆様を見守ってくれてあります。

皆様はひとりではありません。再び希望に満ちた日々が訪れるように皆で

力を合わせて頑張りましょう。そのことが、犠牲になられた方々への何よりの供養になるものと存じます。

(お言葉・抄)

私たち一人ひとりが力を合わせ、心のケアをはじめとする支援、そして復興を目指して活動を続けなければ、と思いを新たにしました。

七回忌法要に先立ち、天台宗が中尊寺本堂脇に建立した「東日本大震災慰霊供養之塔」の開眼法要が山田貫首を導師として営まれました。

慰霊供養塔は高さ約一九〇センチメートル、宮城県川崎町産の蔵王石に五輪塔を陰刻。震災で亡くなった一五、八〇〇名余りの名簿、岩手・宮城・福島、被災三県の沿岸から集められた石に山田貫首が光明真言を書写された経石、中尊寺一山の僧侶が写経した般若心経が埋納されました。

中尊寺では六月第二日曜日に、法華經一日頓写経会が行われます。六万八千余字よりなる法華經八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に

書写しあげる写経会。奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を追善供養するために修した善業に倣って、平成九年より毎年開催されているものです。六月十一日、県内外から集まった参加者一三〇名は震災物故者の冥福を祈り、一文字一文字を丁寧に書き写したのでした。

十一月十日には如法写経十種供養会が奉修され、六月に写経された法華經は金色堂に奉納された後、慰霊供養塔に埋納されました。

中尊寺を訪れる多くの人々が震災物故者に心を寄せて欲しい、との願いが込められた供養塔であります。本誌読者諸賢におかれましても、中尊寺ご来山の節には、供養塔をお参りいただきませうようお願い申し上げます。

「お言葉・抄」は天台ジャーナルより引載。比叡山時報を参照。

ちばりょうけん
天台宗陸奥教区宗務所長。

「東日本大震災物故者七回忌慰霊法要」と
「平成二十九年度東日本奉詠舞大会」

菅原光中

平成二十九年十一月十五日、叡山講福聚教会主催により
ます「東日本大震災物故者七回忌慰霊並びに復興祈願法要」
が、福聚教会総裁で天台宗最高位であられる第二五七世天
台座主森川宏映大僧正猥下の御親修のもと、中尊寺本堂を
会場に営まれました。当日は、杜多道雄宗務総長様、小堀
光實延暦寺執行様を始め宗内諸大徳様、福聚教会各地方本
部長様、福聚教会会員の皆様 約七百名の皆様のご参集を
頂きました。

平成二十三年三月十一日、我が国観測史上最大の地震で
ある東日本大震災が発生し、尊い命を失われた方々や、い
まだ行方がわからない方々あわせて一万八千人に及ぶ大災
害となりました。震災から丸六年を経過した今日でも復興
道半ばといっても過言ではありません。

当福聚教会陸奥地方本部にも被災された会員様が大勢居
られます。また、被災地復興支援に尽力されておられる会
員様もおられます。それぞれのお立場で感慨深い大震災七
回忌の年であったことと存じます。
法要では、九十三歳のご高齡を押して大導師をお勤めく
ださいました森川猥下は、「一心にみ仏の本願を憑み、人々
の心に安寧と希望に満ちる日々が訪れるようお祈りしてま
いりましょう」と諭示を発せられました。また、福聚教会
総本部長様、各地方本部長様の読経、福聚教会総本部講師
助講師の皆様による追善の奉舞、そして御詠歌が唱えられ
る中で、会員の皆様のご焼香による香煙が満堂を包みまし
た。ご参会の皆様が、物故者の追善と被災地の早期復興を
念じられたことと存じます。

翌十六日は、会場を花巻市文化会館に移して、「平成二
十九年度福聚教会東日本奉詠舞大会」が開催されました。
五十七チーム約七五〇名の会員様方が、平素の詠讚活動の
成果を発表されました。座主猥下には、早朝一関市のホテ
ルをお発ちになり、午前九時の開会式にご臨場賜りました。
文化会館での発表では、総本部長上野良明主査様を始め講師

陣がその審査にあたられました。レベルの高い発表に、参
加者は惜しみない拍手を送っていました。最後に、東西交
流奉詠舞として兵庫地方本部様により「慈覚大師讚仰
和讚」の奉詠舞があり、清興として福島県本宮市の高松山
権現太鼓様による奉演がございました。

奉詠舞大会を陸奥地方本部が担当させて頂くのは、昭和
五十六年以来、実に三十六年ぶりであり、不慣れなことが
多く何かとご不便をお掛けいたしましたことと存じます。この
誌面をお借りして深謝申し上げます。

陸奥地方本部では、二年前から準備作業を行って参りま
したが、陸奥教区ご当局、布教師各位、仏青各位、また慰
霊法要会場の中尊寺御当局には、この二日間の運営の為に
ご尽力・ご支援たまわりました。皆様のご援助により魔事
なく円成できたものと衷心より御礼申し上げます。

合掌

(福聚教会陸奥地方本部長・大長寿院住職)



下猥座天台森川が述べられる

東日本奉詠舞大会で感激

鈴木 のり子

去る十一月十五日、中尊寺にて東日本大震災物故者七回忌慰霊法要並びに復興祈願法要が天台座主森川宏英猊下をお迎えして厳粛に営まれました。

心静かに拝み詠歌を唱えつつ、改めて七年に亘る日々的重要性和と祈る事の大切さを感じました。

二日目は花巻市文化会館を会場として、東日本奉詠舞大会が五十七支部の会員が集つての開催となりました。私達中尊寺支部も唱詠と詠舞の部に出場致しました。今回は地元開催ということと、何度も上位入賞の経験もあり、皆さんの意気込みも違っており、高い目標を目指し稽古に取り組みました。普段、本堂に於ける法要は、日常の雑念を払い無我になれる場所と時間ですが、徐々に月日に追いつけられながらの稽古になり、詠唱詠舞が一体となり互いに声を掛け合い、稽古を重ねる度に「能行不退」のいわゆる目標に向かい、前へ進み続ける意志統一が図られたように思



東日本奉詠舞大会
写真は唱詠の部。舞踊の部はカラーグラビアに。

います。

また、稽古後のお茶談義では自慢の一品を持ち寄り、三十代から八十代と語ってなごみ、親睦を深めては人の輪の大切さを感じるひと時でした。

いよいよ発表当日、静寂の中に始まり私達の発表は三十六番目で、その間は他団体の発表の所作や踊りを食い入るように見つめ、自分の立ち位置や間隔の確認をし、出番を待ちました。

緊張も最高潮の折、今大会委員長の菅原光中師がいつもの穏やかな笑顔で皆さんを舞台に送り出して下さり、何よりの励みとなりました。

詠唱・詠舞の心が一つになり、今迄の積み重ねてきた成果を発揮することが出来たと思いますが、やり終えた充足と不安が交錯しての退場でした。そんな緊張感の残る私達に、山田貫首様から満面の笑みでお褒めの言葉を戴きました。際には、大変心強く光が見え地に足がついた思いでした。

このような経過の中、皆様のお陰で詠舞の部で最優秀賞を戴くことが出来、感激も一人でありました。

今大会を振り返りますと、特に印象深かったのは年齢を

問わず一生懸命に打ち込んでいる姿の美しさに感銘を受け、学ばさせて頂きました。

日頃より大変ご多忙のところ、佐々木仁秀先生、菅野宏紹先生にはご懇篤なるご指導を賜り、誌面を拝借致しまして感謝申し上げます。

今後とも人の和を大切に、多くの方々が心安らぐ奉詠舞をめざし、精進して行きたたく存じます。

結びに、この度大変お世話になりました関係各位の皆様
に御礼を申し上げます。

(福聚教会中尊寺支部会員)

石徹白虚空蔵菩薩と 伊勢神宮参拝の旅

中村 美智子

今年の職員研修旅行の行先は岐阜県郡上市石徹白と三重県伊勢市。名古屋を挟んで正反対の位置にある二つの場所を一泊二日で巡るという結構ハードな行程でした。

一日目、まずは岐阜の石徹白へ。石徹白の大師堂には、藤原秀衡公が寄進したとされる金銅虚空蔵菩薩座像が安置されています。昭和六十一年、秀衡公八百年御遠忌特別大祭の際には中尊寺秘仏・一字金輪仏頂尊と二尊並座で御開帳されました。今、その頃を知る職員は少なく、ご縁のある石徹白大師堂参拝の機会を得たことは大変貴重であり楽しみにしていました。名古屋からバスで約二時間の道のりは、途中から日光いろは坂のような道になり、峠を越えるるとまた似たような道を下って行きました。小さな集落に入り大師堂に到着すると、大師講の上村修一さんが私たちを出迎えてくださいました。柔らかな日差しの中、上村さん



岐阜県石徹白にて (第1班)

の案内で階段を上っていくと木々に囲まれた中にお堂がいくつも見えてきました。まずは大師堂を参拝し、次いで一番奥の収蔵庫へ。扉が開かれると正面に虚空蔵菩薩像が安置されていました。ガラス越しに見る虚空蔵菩薩は落ち着いた中にも温和な表情をされており、透かし彫りの光背と蓮華座の台座、すべてが静かに輝き圧倒的な存在感を放っていました。八百年以上も経っているのにとっても綺麗な状態で保存されていることに驚いたのと同時に、石徹白の人々が心のよりどころとして信仰し、大切に守り続けてきたからこそのお姿なのだと思います。上村さんは「今、この地区は高齢化が進み、様々なことを守り続けていくことが困難になりつつあります。けれども、出来ることを少しずつやっています」と話されていたのが印象的でした。石徹白をあとにして次に向かったのは長瀧白山神社です。ここはかつての白山中宮長滝寺で、秀衡公が梵鐘を寄進したご縁で平成十六年に中尊寺ハスが株分けされました。境内には小さなハス池がありましたが、残念ながらハスの季節が終わっていたので見ることはできませんでした。本殿参拝の後、そばにある宝物館の瀧宝殿を見学しま

した。ここには鎌倉・室町時代の全盛期を中心に、各地から寄進された宝物が数多くあり、白山信仰の歴史を見ることができました。

この日の参拝・見学が無事に終わり岐阜から名古屋に着くと、時間に余裕があったため、車窓からではありませんが名古屋城を見ることができました。堂々と建つお城、そして夕日を受けて輝く金の鯉を見ることができたのは本当に幸運でした。

二日目は、伊勢神宮参拝でした。名古屋から伊勢へは電車で約一時間二十分程です。駅に降りると昨日の爽やかな陽気とは一変し蒸し暑く、少しだらけそうになる自分に気合を入れて歩くこと約五分で外宮に到着しました。伊勢神宮には外宮と内宮があり、外宮から先に参拝するのが古くからの習わしのです。外宮は天照大神のお食事を司る豊受大神をお祀りしていて、衣食住をはじめ産業の神様として崇め敬われています。入口の表参道火除橋を渡り、たくさん木々に囲まれた参道を進んでいくと、開けた空間の一番奥に正宮がありました。正面に進み、願いをこめて手を合わせ参拝した後、三ツ石や亀石などのパワース

ポットをめぐり、土宮、多賀宮、風宮を参拝しました。外宮での滞在時間が限られていたため駆け足での参拝となりましたが、初めて訪れたところなのでとても貴重な時間を過ごせました。

次の目的地、内宮へはタクシーで移動しました。ドライバーさんによると内宮は皇室のご祖神で、すべての生命を育む天照大神をお祀りする、我が国で最も尊いお宮だそうです。参拝についても教えていただいたのですが、内宮でも外宮でも「正宮」では具体的なお祈りをするところではないので、個人的な願い事を叶えようと手を合わせてはいけないのだそうです。あくまでも日々の感謝の気持ちや、参拝に来たことを伝えるのだそうです。そして具体的なお祈りや個人の願ひ事は、内宮なら荒祭あらしりのみ宮、外宮なら多賀宮とするのだそうです。外宮で参拝したすべてのお宮で願ひをこめて手を合わせた私。「ダメじゃん、私……」と反省していると、ドライバーさんは「内宮では教えたとおりに参拝すれば大丈夫だから」と気づかってくれました。内宮では大きな鳥居をくぐり宇治橋を渡って神苑に入ると、ひたすらまっすぐな玉砂利の道を歩きました。遮るものが

何もないため日陰がなく、日差しと路面からの照り返しで大変暑く感じました。手水舎とその奥にある五十鈴川御手洗いすずがわみ場で清めた後、正宮へ向かいました。正宮へと続く道は先ほどまでとは違い、木立に囲まれているので暑さが少しは和らいだ気がしました。神楽殿の前を通り正宮へ着くと教えていただいたとおり、ここに来られたことや感謝の気持ちを伝え参拝しました。そして神明造という神宮独特の建築技法で建てられた御稲御倉を間近で見た後に向かった荒祭宮では願ひ事しつづ能舞台がある参集殿などを見学して内宮をあとにしました。

(中尊寺職員)

〈報告〉

中尊寺光勝院建設事業

菅野澄 円

平成二十八年度に発掘調査を行い、文化庁・県教委・平泉町と地下遺構の保存と建物基礎のあり方について協議してまいりました。本年度は万全を期すため追加の発掘調査を実施し、建築工法の見直しも図り、十二月には文化庁から現状変更の許可が下りました。

また平泉町景観審査関係合同会議の意見を参考に、意匠の調整を行うとともに植栽を計画し、景観法及び「平泉の自然と歴史を生かしたまちづくり景観条例」の認定を受けております。平成三十年三月には、いよいよ本体工事着工となりますが、右の調整を経たため工期は当初予定から一年遅れて平成三十一年秋竣工となります。

檀信徒の皆様にはご不便を御掛けいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。



発掘調査の様子（平成29年6月）

(光勝院建設委員会事務局)

中尊寺寺子屋と「紅葉銀河」

清水秀法

毎年夏の恒例になりつつある中尊寺寺子屋。夏休みに合わせて子供たちに、寺で様々な学習をしていただくことを目的に始められた行事です。今年は、自然観察会・種団子作り・中尊寺の歴史学習と三回実施しました。

七月二十九日の自然観察会は、平泉メビウスの会の阿部慶元さんを講師に迎えて、ネイチャービンゴという九つ観察テーマを書いた観察用紙を配り、見つけたものを記入して縦・横・斜めのビンゴを目指すという内容でした。生憎の空模様で傘を差しての観察となりましたが、中尊寺にある様々な自然と慶元さんの巧みな説明で、みなさん目を輝かせながら取り組んでいました。

八月五日は種団子作り。種・肥料・土・肥料と手で転がすように順々にこね上げてゆき、完成すると五百円玉より少し大きい球体になります。一つ一つの作業は簡単なので、三歳くらいのお子さんも挑戦していました。作った種団子

を中尊寺にも少し分けていただき、東日本大震災物故者慰霊塔の後ろ側に植えることにしました。スタッフ皆で植えて最後に手を合わせました。二週間もしない内に発芽し、やがて花をつけました。

八月十九日、中尊寺の歴史学習は、山内の若手僧侶を講師に、中尊寺の歴史についての学習、実際に歩いての体験が行われました。「歴史」という堅いイメージのあるテーマでありながら、子供にもわかるように噛み砕いたユーモラスな話で、子供たちは楽しみながら学習に取り組みました。思います。

子供たちの質問に答えているうちに、いつも見ている境内で新しい発見があった時の楽しさ。また、子供たちの視点から見た「中尊寺」には心動かされるものもありました。参加人数は少なかったものの、その分一人ひとりとふれ合う時間がありましたので、内容の濃い充実した寺子屋になったのではと思います。

視点を変えるという点で、今年度は「紅葉銀河」というタイトルを掲げて参道の紅葉を照らす試みをしました。どのようにライトを照らせば紅葉は美しく見えるのか、機材

の数はどのくらい必要なのか、参道を照らしても寒くなる時期にご覧になる方がどのくらい来ていただけるのか、と課題が多くありました。その中でも一番難しかったのは、

テスト段階で色付く前の緑色のモミジに照明をあてても寒々しい色になってしまったため、紅葉した時点での薄暮照明の全体像がイメージできなかつたことでした。

毎日紅葉のことを考えて境内を眺めていると、色付きがずれて紅葉し、木々には緑・黄・赤と様々な色が混在しているのに気付きます。そして、その色も黄色にしても赤にしても微妙に違うのだと、紅葉の美しさを改めて感じました。紅葉が一番美しく見えるのは、やはり太陽光に照らされる葉でしょう。しかし、日が暮れていく中で照明を浴びて浮き上がる紅葉は幻想的で、当初考えていた不安を忘れてしまうほどでした。

「紅葉銀河」開催期間中、特にも夕方のニュースで中尊寺からの生中継があった翌日以降は、家族・恋人・友達と一緒に、あるいはカメラを持つ人・散歩にくる人、と様々な方が普段真つ暗になる時間に中尊寺に上がって来られて、照らされた紅葉をごらんになっていました。私自身見

慣れた境内に、今まで見えてこなかつたもの、感じてこなかつたことを体感することができました。

春には芽が出て若葉となり、夏には参道に木陰を作り、秋には紅葉して、冬に落葉して雪化粧をする。四季豊かな中尊寺の素晴らしさ、境内の四季の移り変わりをみなさまに楽しんでいただけるよう、「モアベター」を合い言葉に様々なことに取り組んで行ければと考えています。

最後になりましたが、照明の配置や配線に力を貸していただいた、衣川の茶畑一彦さん、平泉電力工業所の千葉敬さんに感謝申し上げます。

(総務部次長)

声明の夕べ

ばん茶
せん茶



イラスト
馬淵ひろみ

晩秋の中尊寺経蔵で声明を聞く機会がありました。あれから間もなくひと月余りになりましたが、今も鮮明に感動がよみがえってきます。お堂がライトアップされて、昼とはひと味違う光景の経蔵の前に立った時のことです。夜の静寂を縫うように金色の入り口の方から、儼かな読経の音が聞こえてきました。導師を先頭に、法衣に身を包んだ7人の若い僧侶が一列に並んで、経蔵の方に向かっていけるのが見えます。催しを心待ちにしていた人の間に溶けるように柔らかに染み渡りました。体に温かい奏でる声明に、じっと耳を傾けました。会が終わっても場を去りがたく、境内にいつまでもたたずみ、余韻を楽しみました。帰りはライトアップされた紅葉を見ながら、ゆっくり参道を下りました。もみじの古木が真っ赤に染まって、一山の錦はいっそう趣深いものでした。

横田 恵子

声明の夕べ

始めました。僧侶たちは声降り、風に踊りながら散るもを合わせ声明を唱えます。こみじの葉と交差しまるで雲霧の夜の声明は、諸仏を経蔵に模様のようです。私は静かに腰を下ろし、花びらをいたたきました。900年という長い歴史の静かで幻想的な夜でした。(金ヶ崎町西根、主婦 73歳)

岩手日報平成二十九年十二月二十日付掲載

寒行について

佐々木 宥 司

在家出身の私が、中尊寺の一員となって四回目の冬がやって来しました。中尊寺では若手の僧侶が、小寒（今年は一月五日）から二月三日の節分まで寒行（寒修行、寒中托鉢）で平泉町内を歩きます。先輩の話により「昭和二十年代半ば頃から行われるようになったと聞いている」とのことでした。おおよそ七十年続いている寒修行ということになります。まだまだ未熟者ではありますが、寒行の一端についてご紹介してみたいと思います。

私が寺に入りましたのは、平成二十六年の十二月中旬のこと。一カ月も経たないうちに年が明けました。新年には修正会（正月に修する法要）が八日まで続き、夜には、結衆（修養階梯にある若年僧）として開山堂での堂籠もりもあります。右も左もわからない状態で慌ただしい日々を何日か過ごし、いよいよ小寒の日を迎えたのでした。

寒行は、午後五時に本坊表門前で、持鈴という鈴を振り

鳴らしながら短いお経を唱えて出発、月見坂を下り県道三〇〇号（旧国道四号）を南下します。途中で右に入り平泉文化遺産センター前を通り毛越寺山門前へ。そこから毛越寺通りを平泉駅へと向かい、駅前で左折して中尊寺通りを進みます。そして、もう一度県道三〇〇号へ出て北上し、北参道を上って寺へ戻ってきます。距離は六キロメートル弱、時間的には一時間半弱の行程です。月見坂上り口、毛越寺、中尊寺赤堂稲荷下の大鳥居、本堂へ戻ってきた時にも短いお経を唱えます。

寒行では、毎年浄財を喜捨してくださる家々がほぼ決まっています。また、すれ違う歩行者の方、わざわざ車から降りて来る方からも浄財を頂戴することもあります。小さいお子さんがいらつしやる家もあり、子供さんが出てきた時には、真言を唱え、数珠を頭に軽く当て御加持をします。「入って間もない私が……」という気持ちもあります。だが、「苦労さまですね」「頑張ってください」との言葉に励まされ一年目の満行を迎えることができました。

二年目は、総本山・比叡山延暦寺にある行院に行ってきたこともあり、一年目の時のような思いは幾分薄らいでき

(金剛院副住職)

てはいました。しかし、今度は「自分は、お坊さんらしくできているのか？」という不安の気持ちを抱くようになりました。行院を出たばかりの私が、行院を出ただけで急にお坊さんらしくなれるとは思ってはいませんでしたし、今でもこの思いは心の中にあります。

この年から、私が法螺貝を吹く担当となりました。音を出すだけでなく、法螺貝の音らしく吹くにはコツがあるようで、なかなか上手くいきません。道中、浄財を手にご自宅から出て来られる方に、ちょうど良いタイミングで合図として聞こえればいいのですが、慣れないとそうもいきません。この二つができるようになるまでには、少し時間がかかったように覚えています。

三年目になると、托鉢中に「中尊寺のどちらのお坊さんですか？」と聞かれることも少なくなりました。町内の方々に見知られるようになったうれしさはありましたが、中尊寺一山の僧侶としてどうあるべきか、を以前よりも意識するようになった年であったと思います。この年は例年に比べて非常に雪が少なく、寒行らしくない年といわれました。地球温暖化のせいなのでしょう。昔は膝上まである雪の

中を歩いたこともあつたそうです。

中尊寺の寒行は、みなさまあつてこそ成り立つ行なのだと感じていきます。歩いている我々とみなさまとの一体感とこの日どこかへ観光に行きたいというお気持ちもあるだろう、そう思うとたいへん有り難いことだと思えます。今年、歩いている僧は三名。将来、寒行僧の数が今より少なくなる時期もあることでしょう。その際に、現状の托鉢ルートと時間を維持できるのだろうか、と考えることもあります。それでも小寒が来て寒行が始まれば、みなさまとの出会いとふれ合いがある。それを胸に抱いて歩いて行きたいと思えます。

(大徳院副住職)

シダの仲間

松に鶴、梅に鶯、柳に燕。植物と動物の組み合わせは古来より日本人に好まれ、五穀豊穡を願う縁起のいいものとして扱われてきました。現代でいえば、笹にパンダやユーカリにコアラなどという組み合わせも「アリ」かもしれません。

中尊寺境内は森の中。たくさんシダの仲間が広葉樹の木陰に繁茂します。ですから子供のころなどは、境内をウロウロと遊んでみると、小さなトカゲが、切り株から生えたシダ植物の上に乗っかって日向ぼっこをしている姿や、あるいは私に驚いてシダの草原を疾走していく様子がちょうど目線の先にあつたものです。

生き物図鑑が大好きだった私は、そのシダとトカゲの光景を見

るたびに、祖父にやつと買つてもらった『恐竜図鑑』の中盤の、見開き一ページに大迫力で描かれていた「太古の森を疾走する恐竜の図」を思い浮かべ、よくよく妄想にふけていたものでした。授業中先生に注意されるときは大方、頭の中で太古の森を想像し、恐竜と一緒に走りまわっている最中だったものです。

シダの仲間は、恐竜よりももつと前。三億年も四億年も前に現れた、地上で最も古い植物といわれています。葉と茎の区別はあるものの花は咲かせず種子も作らず、胞子嚢で作られた胞子を飛ばし発芽します。陰性植物で適度な湿気を好む性質もあり、木陰のような場所でもよく繁殖し増殖してゆきます。古生代には極めて大型で

あつたシダ類もやがて進化(?)の過程でその草体を小さくし、今に残ったといわれています。ゼンマイやワラビもこのシダ植物の仲間で、山菜として食用されるシダはほかにもたくさんあります。もしかしたら…太古の昔、この中尊寺の境内となる予定地で、大きな恐竜が巨大なワラビやゼンマイをムシャムシャ食べていたりしていたのかなあ…あれ…大人になつても妄想は止まりませんね。



ゼンマイ

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

東日本奉詠舞大会とこの一年

二浦 みゆき

平成二十九年十一月十五日、中尊寺本堂において、福聚教会総裁森川宏映天台座主猊下御親修のもと、叡山講福聚教会による「東日本大震災物故者七回忌慰霊法要並びに復興祈願法要」が執り行われました。犠牲になられた多くの方々の冥福を祈り、そして未だ行方わからない方々が、一日も早くご家族の元に戻られますようにと願いながら、多くの会員と共に御詠歌をお唱えいたしました。また、「追善和讃」による総本部の先生方の舞踊も奉納されました。

翌十六日は夜来の雨も上がり、花巻市文化会館で「東日本奉詠舞大会」が行われました。東日本地区の天台宗寺院から、唱詠の部に三十六組、舞踊の部に二十組が出場しました。また、東西交流として兵庫地方本部寺院の皆さま方による奉詠舞が披露され、清興として、福島県本宮市の高松山権現太鼓会の方々による「天地に響け絆の鼓動」の奉

演が行われました。

私たち中尊寺支部は、唱詠の部では「慈覚大師讃仰和讃一部二部」合唱、舞踊の部では「寿ことほぎ和讃」の曲で参加しました。どの組も日頃の練習の成果を発揮し素晴らしいものでした。結果は、唱詠の部では同じ陸奥地方本部の毛越寺支部の皆さまが最優秀賞を受賞されました。誠にめでたくございました。舞踊の部では私たち中尊寺支部が最優秀賞をいただきました。「寿ことほぎ和讃」では八人の舞い手が扇を二本ずつ持つて舞い、それを全員で揃じえることが要求される難しいものでした。加えて地方じかたも本来なら句頭が一人で唱える難しい旋律・所作を全員で揃じえて唱えるということにし、何度も練習を重ねました。今回、大会の最高賞を頂戴することができ、本当に嬉しく思います。

今回の大会出場に至るまで、佐々木仁秀師、菅野宏紹師にお忙しい中を毎週のようにご指導をいただきました。心から御礼申し上げます。

大会を終え、当支部のこの一年を振り返りますと、中尊寺の恒例の法要に参加し、御詠歌をお唱えすることは例年通りでした。さらに中尊寺・毛越寺・瑞巖寺・立石寺を繋

ぐ「四寺廻廊」法要に参加しました。今回は山形の立石寺で行われ、帰路、天童ワインや河北紅花資料館を見学しました。六月十七日には中尊寺で開催された、岩手県主催の「平泉世界遺産の日シンポジウム」に参加、奉詠いたしました。

当支部の活動は、いろいろな方々のご支援と、会員の皆さまのご協力の上にあると考えております。このことに感謝し、活動してまいりたいと思います。

(願成就院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)



叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会（平成29年11月16日 花巻市文化会館）

新刊紹介

(二〇一七年一月〜十二月)

〈出版〉

『甦った「如意輪講式」 中尊寺仏教文化研究所論集 第4号』

発行：中尊寺 編集：中尊寺仏教文化研究所 三・二十四

「澄憲『如意輪講式』を読む——大覚寺蔵七段式の訓読——」 柴 佳世乃

「講式の音曲構成法——『如意輪講式』の復曲へ向けて——」 近藤 静乃

「中尊寺の考古学」 八重樫忠郎

「奥州平泉の黄金文化について」 榎本 淳一

〔報告〕平泉研究の新しい基盤づくりをめざして

——共同研究「平泉研究の資料学的再構築」経過報告—— 柳原 敏昭

〔史料紹介〕『天台寺本堂再興勸進帳』 菅野 澄順

●「如意輪講式は中尊寺さまの素晴らしい財産ですね。遺文の香りを、ぜひ皆様に戻元できればと存じます」(柴 佳世乃)

新・人と歴史 拡大版07 『平泉の世紀 藤原清衡』

清水書院 著：高橋 富雄 五・三十

『続 平泉志』

発行：岩手県文化財愛護協会 著：及川 和哉 三・三十一

『後三年記詳注』

汲古書院 著：野中 哲照 二・十五

国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書76

『平泉と仙台藩』

大崎八幡宮 著：入間田宣夫 七・二十八

新解釈『おくのほそ道』

隠されていた芭蕉のこころ

角川書店 著：矢島 渚男 四・二十五

●度重なる芭蕉の書き直しの過程をたどり、句文に秘められた真意と芭蕉の作者像に迫る。

〈報告書〉

『岩手県平泉町文化財調査報告書第127集

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅷ

——第33次調査——

平泉町教育委員会 三・三十一



『岩手県平泉町文化財調査報告書第128集 平泉遺跡群発掘調査報告書』

祇園1遺跡第2次 金鶏山遺跡第7次 西光寺跡第10次

志羅山遺跡第112次 中尊寺跡第84次 月館川遺跡第1次 白山社遺跡第10次

平泉教育委員会 三・三十一

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

梅木田遺跡・白山社及び駒形根神社・平泉野遺跡・山王窟

一関市教育委員会 三・二十四

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 骨寺村荘園遺跡確認調査総括報告書』

一関市教育委員会 三・二十四

『骨寺村荘園遺跡村落調査研究 総括報告書』

一関市博物館 三・三十



〔関山句囊〕

〈第五十六回 平泉芭蕉祭全国俳句大会〉より
(平成二十九年六月二十九日 於毛越寺)

(當日句入選)

達谷忌まで花あれよ白菖蒲 (大会長賞)

*石 寒太選 特選 奥州 岩淵 正方

楸邨の挽歌の句碑や風青し (中尊寺貫首賞)

特選 奥州 梅森 サタ

蕉翁に藜の杖や月見坂 (毛越寺貫主賞)

特選 一関 小原 節子

瑠璃^{とかけ}蜥蜴^{とかけ}光堂よりこぼれ来し

秀逸 平泉 旭 光

弁慶の鎧をまとふ蝮かな (岩手県知事賞)

*小菅白藤選 特選 気仙沼 佐藤 綾泉

羅の声そろひたる南無阿弥陀仏 (河北新報社賞)

特選 北上 畠山えつ子

木下闇抜け毛越寺の水となる (岩手日報社賞)

特選 登米 藤野 尚之

千年を寝たとも見えぬ蓮の艶

秀逸 大崎 門間としゑ

丹の寺のあやめ浄土となりけり

(岩手県議会議長賞)

万緑を抜け来し水の光かな

*小畑柚流選 特選 奥州 服部 常子

みほとけの懐にみて目に青葉

特選 北上 菅原 典子

戦なき世にてみちのく青山河

特選 北上 及川由美子

平安の石に涼しさありにけり

(平泉町教育長賞)

宙吊りの毛虫に逆さの毛越寺

*白濱一羊選 特選 湯沢 加瀬谷敏子

特選 花巻 大平 春子

細道は大き道へと平泉の日 (毛越寺賞)

特選 盛岡 工藤 幸子

みちのくの重き風鈴吊るしけり

秀逸 平泉 鈴木多佳子

千年の寺千本の花あやめ (平泉町議会議長賞)

特選 気仙沼 佐藤 綾泉

*渡辺誠一郎選 礎石てふ夢の欠片や花あやめ (岩手日日新聞社賞)

特選 平泉 鈴木 信

花あやめひかりを染めて毛越寺

秀逸 一関 伊勢田あき

錫杖の音ついてくる夏の雲 (河北新報社賞)

特選 仙台 小野寺みち子

*照井 翠選 平安の声引き摺りて牛蛙 (岩手日日新聞社賞)

特選 横手 高橋 遥

平泉の日一切経の落し文

秀逸 気仙沼 熊谷 房子

(応募句入選)

アデル 阿豆流為の足跡ひろふ飛花落花

*石 寒大選 (天) 北上 伊東 晴子

楸邨の達谷の道風薫る

(地) 平泉 鈴木 信

読み書きはいつも食卓新樹光

(人) 一関 佐々木徳子

走り根に蟻はしらせて義経堂

佳作 花巻 畠山 濁水

くわりんの実落ちて仏の顔したる

*小菅白藤選 (天) 花巻 関 園子

樹の心知つたふりして剪定す

(地) 盛岡 沼宮内凌子

新緑の包みきれざる名古屋

(人) 奥州 小野寺テル子

平泉の日千戈なき世を願文に

秀逸 花巻 千葉 任子

春耕や鋤にとびつく野のひかり

*小畑柚流選 (天) 大崎 砂金 元子

御仏の永久の慈顔や春の燭

(地) 秋田 岩谷 塵外

畑を打つ世界遺産のご真ん中

(人) 一関 稲玉 宇平

関山へ奥六郡の青田風

佳作 大崎 佐々木克狼駄

桜蕊降る博物館の骨しづか

*白濱一羊選 (天) 花巻 後藤 冴子

卯の花の小声にも散る真昼かな

(人) 国立 山下 侑子

余生とはまだある未来麦の秋

秀逸 鹿見島 早水 秀久

花疲れ娶らぬ兄の喉ぼとけ

*渡辺誠一郎選 (天) 横手 今田 草水

曲り屋の軒が吸ひ込むつばくらめ

(地) 北上 小笠原文保

うかれ猫いつも不在の駐在所

(人) 一関 小山 尚宏

端居してあの世この世を見渡せり

佳作 八尾 穂山 常男

廃校の針なき時計夏に入る

*照井 翠選 (天) 北上 下田 榮一

紅拭いて返す盃義経忌

(地) 大崎 只野 英子

山菜萁の空より咲きぬ峡の村

(人) 盛岡 相馬 定子

春愁を河馬に吞まれてしまひけり

秀逸 袖ヶ浦 重田 忠雄

(入選句の重複は省き、秀逸・佳作の中から編者が適宜掲出した)

児童生徒の部

岩手県内 小学校の部 特選(三句)

小満やたのみの綱の桂馬指す

花巻市太田小学校 六年 藤原 一風

清明や空まで届け応援歌

花巻市太田小学校 六年 高橋 瑞熙

花ぐもりフルスイングで晴れになる

花巻市太田小学校 五年 富澤 涼珠

岩手県内 中学校の部 特選(三句)

涼風の微か香舞う月見坂

北上市江釣子中学校 二年 長谷川 風爽

雲の峰映え美しき衣川

奥州市江差南中学校 三年 及川 晟弥

快晴やツバメがびゅんと風になる

大船渡市大船渡中学校 一年 中神 航斗

平泉小学校 特選(三句)

目の前で夕立きらきらかがやいて

五年 千葉 美月

炎天の空にたたずむ赤い玉

五年 千葉 淳平

道ばたにクルクルクルリ風車

五年 西米 琉汰

長島小学校 特選(三句)

校庭に西行の花舞い落ちる

六年 菊地 沙希

まんかいのさくらはぼくとおないどし

二年 山平 幹太

さくらまう大空見上げボールける

三年 伊藤 秀翔

平泉中学校 特選(三句)

雪解に大地のいきがふきかえる

一年 加藤 陸斗

入学式これから始まるストーリー

三年 石川 夢人

木漏れ日が川面で光る五月晴れ

二年 吉田 智貴

(その他 編者推薦)

秋の嵐日本を全部食べに来た

平泉町長島小学校 五年 佐々木 祐真

〈第十五回 みちのく「二夜庵」俳句大会〉より

主催 一関俳句協会

身に入むやわずか二夜の縁なれど

*辻 桃子選 特選 所 沢 福田 秀樹

どびろくやはるかに吾も安倍の裔

特選 国立 安部 元気

十六夜の月見坂とは登り急

特選 市川 篠原 喜々

名月も十六夜も見て旅二夜

秀逸 横 浜 窪田 遊水

秋深き顔近づけて種を選る

秀逸 一 関 小野寺 束子

新緑や三将眠る光堂

札幌市厚別中学校 三年 小川 航世

風薫る畳に僧侶の響く声

札幌市幌東中学校 三年 沖野 栞

白シャツにしたたる汗や光堂

札幌市厚別中学校 三年 川股 珠鈴

人形の命をつなぎ菊師去る

*小菅白藤選 特選 一関 伊東 静枝

金色の風の稲刈る誇りかな

*小畑柚流選 特選 奥州 大石 文雄

澄みきりて荘園十里豊の秋

*馬場吉彦選 特選 一関 小原 節子

(応募句)

書を閉ぢて耳ひぐらしへ明け渡す

*照井 翠選 特選 一関 佐藤 冬扇

骨寺村古絵図そのまま青山河

句集『花綵』(ふらんす堂) 太田 土男

楸邨忌根のあるものは根を太く

句集『星籠』(深夜叢書社) 千葉 信子

虫時雨楸邨句碑を讃へけり

大日のごとき時雨の磨崖佛

『寒雷』十一月号 九鬼あきゑ

*「秋田のねんりんピックの帰りに平泉に途中下車。

楸邨先生の(邯鄲やみちのおくなる「挽歌」の句碑と

対座できたことは真に感慨深いものがあつた」と同

十二月号の中で、この一年を振り返っている。

関取美男中尊寺節分会

『草笛』四月号 菅野 啓子

森青蛙卵塊梢に中尊寺

浄土庭草刈り音の炸裂す

〈毛越寺点描〉

遣水をたもとほり舞ふしじみ蝶

晋山の声明 凛と揚雲雀

桜 東風貫主見守る母のゐて

百僧の般若心経夏に入る

『草笛』八月号 岩渕 洋子

平泉の日や五月雨の翁道

菅原 淑子

天蓋のごとき新緑光堂

旭 光

合同句集『紅蓮』(狩 平泉俳句会)

秋高し木立は古りぬ中尊寺

『寒雷』一月号 山崎百合子

水の澄む北上川や弁慶堂

『寒雷』二月号 大野 佳子

身の丈を越ゆる萩咲く毛越寺

『寒雷』二月号 大野 佳子

東稲山の鶯早も正調に

『寒雷』七月号 佐藤 瑞穂

梅雨寒し千歳きらめく夜光貝(中尊寺回想)

『寒雷』九月号 山本 一糸

*作者は石川県の一と。以前に「梅雨に冷え堂千年の夜光貝」「苔青く暗み無音の金色堂」などがあつた。

*毛越寺貫主の御母堂は、九十七歳。晋山式に与りな

がら貫主の健康は勿論のこと、毛越寺の永久の法灯

護持を胸中に秘めていたに違いない。掲句「貫主見

守る母のゐて」が、すべてを物語っている。

(同誌次号「鑑賞」から 小野寺東子)

羽子の木や喘ぎ喘ぎに金鶏山

『草笛』八月号 永山 華甲

中尊寺どの木も蝉の木となりぬ

『草笛』十月号 岩渕 洋子

葬儀果て晩照坂に寒雀

「たばしね」二月号 佐々木邦世

金鶏山の肩に夕星春の月

「たばしね」二月号 鈴木 信

馬酔木咲く舞台の鈴や老女舞

「たばしね」四月号 佐々木邦世

強東風や僧の衣の翻り

「たばしね」四月号 岩渕眞理子

能管の音止み関山夏に入る

「たばしね」五月号

北嶺 澄照

走り根の窪みに竹の落葉かな

「たばしね」六月号

岩淵眞理子

大池の不協和音や牛蛙

「たばしね」七月号

鈴木 四郎

鎮魂の写経の筆に青葉光

「たばしね」七月号

岩淵 洋子

山ひとつあなたに聞こゆ花火かな

「たばしね」八月号

菊池 幸介

牛つぐむ想ひ身に沁む楸邨碑

「たばしね」十月号

佐々木邦世

若水の湯気立つさまを掬ひけり

一 関俳協例会二月

鈴木道紫葉

東稲山に行く雲一つ西行忌

一 関俳協例会二月

伊藤けんた浪

悠久の大河や余花の中尊寺

一 関俳協例会五月

鈴木道紫葉

〔関山歌籠〕

(平成二十九年四月二十九日)

〈第三十八回西行祭短歌大会〉

* 栗木 京子選

こんなにも太き指かと盲ゆく父の手つつみ湯

呑み握らす

(中尊寺貫首賞)

奥州 遠藤カオル

人生が削られそうだと六年を経し仮設舎の老

女がつぶやく

(平泉町長賞)

宮城県 千葉 秋夫

吹き曝れの沢に真菰の根を漁る白鳥七羽泥ま

みれなり

(平泉観光協会会長賞)

一 関 吉田 英子



ライナーを鋭くキャッチして笑ふ不登校の殻
脱ぎし少年 (岩手日報社賞)

滝沢 山口 明子

二百余のわらじ納めきし葬儀社のわらじはき
おり叔父の旅立ち (IBC岩手放送賞)

北上 熊谷 一代

日に照らふ林縁あゆめば三月の枝の呼吸のき
こゆるごとし (岩手日日新聞社賞)

盛岡 照井 方子

みちのくの浄土の山に啼く鳥は法は法華経と
告げて去りゆく

中尊寺 一日頓写経会に参加して詠める

さいたま市 宮崎 恵子

御神事能番組
平成二十九年五月四日

法楽
古式三番

開口 佐々木五大 大鼓 三浦 章興
祝詞 千葉 快俊 小鼓 佐々木亮王
若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法
老女 破石 晋照 後見 菅原 光聰

狂言

盆山 盗人 北嶺 航
亭主 菅原 光哉

能
後シテツレ 佐々木五大
前シテツレ 佐々木亮王

竹生島 シテ 北嶺 澄照 太鼓 菅野 宏紹
ワキ 菅野 成寛 大鼓 佐々木長生
ツレ 佐々木宥司 小鼓 佐々木仁秀
間 破石 晋照 笛 清水 広元

秋の藤原まつり中尊寺能 十一月三日

連吟 平泉 二葉ざらり園 園児三十五名

鞍馬天狗

老松

仕舞 一関喜桜会

田村クセ 八重樫結花

素謡 一関喜桜会

小鍛治

能

枕慈童 シテ 佐々木五大 太鼓 三浦 章興
ワキ 佐々木秀厚 大鼓 千葉 快俊
ツレ 佐々木宥司 小鼓 菅原 光聰
笛 清水 秀法



能「枕慈童」(11月3日)

五月五日

開口 佐々木五大 笛 清水 秀法
後見 菅原 光聰

狂言
盆山 盗人 菅原 光哉
亭主 北嶺 航

能
シテツレ 佐々木亮王 太鼓 三浦 章興
シテ 佐々木五大 大鼓 千葉 快俊
ワキ 佐々木秀厚 小鼓 菅原 光聰
ツレ 佐々木宥司 笛 清水 秀法
間 破石 澄元

西王母

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成二十八年十二月一日〜平成二十九年十一月三十日

□ 平成二十九年

三月六日

於中尊寺

東日本大震災慰霊碑開眼法要

(天台宗務庁・延暦寺主催)

導師中尊寺山田俊和、山内より三名出仕

東日本大震災物故者七回忌法要

(天台宗務庁・延暦寺主催)

大導師第二五七世天台座主森川宏映猷下

副導師中尊寺山田俊和

三月十一日

於石巻市東雲寺

東日本大震災祥月命日法要

山内より三名出仕

九月九日

於毛越寺

二部檀信徒会一隅大会

檀徒六名参加

集まった浄財九二、〇〇〇円は地球救援募金へ

十一月十二日

於一関市観福寺

天台宗一斉托鉢

山内より五名参加

集まった浄財

一五二、三三八円は地球救援募金へ



好天のもと、一関市舞川地区を
托鉢行脚。

十一月十五日

於中尊寺

東日本大震災物故者七回忌慰霊法要並びに復興祈

願法要

(叡山講福聚教会主催)

大導師第二五七世天台座主森川宏映猷下

十一月二十九日

於天台宗務庁

天台宗人権啓発公開講座 委員 三浦章興参加

□ 住職任命

(平成二十九年三月一日)

寶性院兼務住職 観音院

清水 広元

(平成二十九年五月十五日)

圓乘院副住職

佐々木五大

(平成二十九年六月一日)

天台寺兼務住職 眞珠院

菅野 澄順

(平成二十九年六月五日)

寶性寺兼務住職 積善院

佐々木仁秀

(平成二十九年十月十日)

大徳院副住職

佐々木有司

(平成二十九年十月二十五日)

仙岳院代表役員代務者 大長寿院

菅原 光中

□ 学階授与

(平成二十九年五月十一日)

准講司

眞珠院

菅野

澄順

□ 経歴行階履修

(平成二十九年三月二十七日)

開壇伝法履修

大徳院法嗣

佐々木有司

□ 得度履修

(平成二十九年九月三十日)

積善院法嗣

佐々木祐輔

(平成二十九年十一月四日)

葉樹王院法嗣

北嶺 航成

□ 遷化

(平成二十九年一月十一日)

常住院前住職

佐々木高円

(九十五歳)

□ 逝去

(平成二十九年十一月二十日)

瑠璃光院寺庭婦人

菅野 タカ

(八十三歳)

執務日誌抄

平成二十八年十二月一日

二十九年十一月三十日

平成二十八年

◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)
貫首 ハワイ別院訪問(天台
宗海外伝道事業団 十一月二十七
日〜十二月一日)
- 二日 平泉町交通安全運動推進町
民大会(管財 於役場)
- 三日 「平泉の文化遺産」の拡張登
録に係る研究会(〜四日、
管財澄円 於平泉レストハウス)
境内一斉清掃
- 七日 薬師会(讃衡蔵)

- 三日 九時半 正月祈祷護摩(本堂)
修正会 山王供(山王堂)
十二時 元三会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 薬師供(瑠璃光院薬師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)
大般若会(利生院弁財天堂)
気仙沼市観光コンベンショ
ン協会様来山(執事長挨拶)
- 六日 修正会 釈迦供・月山供(釈迦堂)
寒修行(行者五名、町内托鉢。小
寒、節分)
- 七日 修正会 白山十二面供(本堂)
大般若会(本堂)
修正会 弥陀供(金色堂)
- 八日 修正会 薬師供(讃衡蔵)
一字金輪仏・千手観音法楽
修正会結願
十三時半 恒例「金盃披き」
貫首 講演(東北地方整備局特
別セミナー 於仙台市)
- 十一日 貫首 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)

九日 立正佼成会新花巻教会長林成佳

氏他来山(貫首挨拶)

十一日 天台宗務庁総務部長阿部昌宏師

他来山(東日本大震災七回忌法要
打合せ 貫首・執事長他)

(骨寺村莊園米奉納)

東日本大震災物故者追善回

向月命日法要(本堂)

十三日 延暦寺教化部長小鴨覚俊師他

来山(福聚教会東日本大会の依頼
貫首・参与光中他 於庫裡広間)

中尊寺節分講中総会(執事
長・法務 於泉橋庵)

貫首 一関市花泉町大門地蔵
尊参拝

光勝院建設委員会
弥陀会(讃衡蔵)

秋期定例一山会議

初詣警備会議(管財 於泉橋庵)

東京都小笠原村表敬訪問
(〜二十二日、執事長)

白山会(本堂)

山内常住院前住職
佐々木高円僧正遷化

- 十七日 光勝院建設委員会
- 十四日 貫首 一関市花泉町大門地蔵
尊参拝
- 十四日 光勝院建設委員会
弥陀会(讃衡蔵)
- 秋期定例一山会議
- 初詣警備会議(管財 於泉橋庵)
- 東京都小笠原村表敬訪問
(〜二十二日、執事長)
- 白山会(本堂)

- 十二日 光勝院建設委員会
- 十三日 立正佼成会盛岡教会長様・
花巻教会長様他来山(貫首)
- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)
お経を読む会(貫首)
- 十六日 常住院前住職高円師葬儀
(本堂)
- 十七日 近藤誠一さんの「瑞宝重光
章」受章を祝う会(貫首 於ホ
テルオークラ東京)
- 二十日 一隅を照らす運動理事会
(貫首 於宗務庁)



山内常住院前住職
佐々木高円僧正遷化

貫首 インタビュー(テレビ
岩手 於茶室)

お経を読む会(円教院)

元平泉町消防団第八分団長浅利

章市氏瑞宝単光章受章祝賀
会(法務宏紹 於武蔵坊)

文殊会(経蔵)

恒例御供餅つき

午後三時 一山総礼

新年祈祷護摩供修行

七時半 東山町(若水送り)着

九時半 正月祈祷護摩(本堂)

十時半 総礼

修正会 釈迦供(本堂)

冬堂籠り(〜五日 結衆、開山堂)

九時半 正月祈祷護摩(本堂)

修正会 薬師供(峯薬師 讃衡蔵)

十六時 話初め(広間)

- 二日 〇時 新年祈祷護摩供修行
- 七時半 東山町(若水送り)着
- 九時半 正月祈祷護摩(本堂)
- 十時半 総礼
- 修正会 釈迦供(本堂)
- 冬堂籠り(〜五日 結衆、開山堂)
- 九時半 正月祈祷護摩(本堂)
- 修正会 薬師供(峯薬師 讃衡蔵)
- 十六時 話初め(広間)

平成二十九年

◇一月

- 二日 中尊寺古楽面調査(青山学院
大学浅井和春氏他)
- 二十二日 文化財防火訓練
中尊寺文書調査
- 二十四日 念法真教様来山(執事長挨拶)
- 二十六日 東京天台仏青創立五十周年
記念式典(貫首 於寛永寺)
- 二十八日 「世界遺産・平泉」スピーチ
コンテスト(執事長 於武蔵坊)
- 三十日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 三十二日 毛越寺前貫主南洞頼教師弔
問(貫首・一山 於壽徳院)
- ◇二月
- 一日 月次大般若(本堂)
光勝院建設委員会部会
古都ひらいずみガイドの会
新春研修会 講師 仏文研澄照
- 二日 天台宗務庁総務課長福井邦彦師
他来山(東日本大震災物故者七回
忌法要の件 貫首他 於広間)
- 三日 節分会(日数心経 本堂)

- 四 日 恒例大節分会(関取隠岐の海関 招く。歳男歳女九十二名、町内園児)
- 五 日 世界遺産シンポジウム「庭園と平泉」(執事長 於毛越寺)
- 七 日 世界遺産登録五周年事業推進連絡会議(総務快俊 於役場)
- 八 日 平泉商工会三部会合同新春講演会(法務宏紹 於八つ花)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 磐井清水若水送り一関景観まちづくり賞受賞祝賀会(参与光中邦世 於松川市民センター)
- 十四日 涅槃会御逮夜(本堂)
- 十五日 涅槃会(本堂)
- 十六日 タイ旅行博・北京旅行社訪問(二十三日、総務晋照)
- 十七日 平泉観光協会理事会(執事長 鴛田圭一氏卓越技能者受章祝賀会(総務快俊 於武蔵坊)

- 十九日 平泉建築組合創立百周年記念式典ならびに祝賀会(執事長 於武蔵坊)
- 二十日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財五大 於役場)
- 二十一日 貫首 講演 平泉岩銀友の会新春講演会 於武蔵坊)
- 二十二日 平成二十八年度平泉古事の森育成協議会(管財五大 於役場)
- 平泉ユニバーサルデザイン観光推進会議(執事長 於武蔵坊)
- 二十四日 平泉観光協会通常総会(執事長 於平泉商工会館)
- 二十五日 エジプト大使イスマイル・カイラツト氏来山(貫首挨拶)
- 二十六日 一関・平泉地域エジプト・ルクソール友好協会「国際文化交流フォーラム」(貫首・執事長 於ペリーノホテル一関)
- 二十七日 台湾EY旅行社社長游金章氏、花巻温泉社長安藤昭氏来山(貫首挨拶・総務晋照案内)

- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 讚衡蔵運営委員会
- 三日 命徳寺多田孝正師葬儀(貫首)
- 四 日 越中おわら風の盆奉演(本堂)
- 六 日 東日本大震災慰霊碑開眼法要(天台宗建碑 貫首 本堂前庭)
- 天台宗東日本大震災物故者慰霊七回忌並びに復興祈願法要(大導師森川宏映天台座主親下 本堂)
- 十日 光勝院建設委員会
- 春期定例一山会議
- 十一日 「ハスの花」折り紙奉納(泉南広域振興局「ハスの花」プロジェクト 本堂)
- 東日本大震災物故者七回忌回向法要(本堂)
- 東日本大震災発生時刻 打鐘・黙祷
- 十四日 四寺廻廊事務連絡会(総務・法務 於仙台市電通東日本)

- 一関・平泉地域DMO設立検討委員会(総務快俊 於一関市民センター)
- 十六日 中尊寺菊まつり協賛会役員会
- 十七日 光勝院建設予定地(本堂裏)発掘調査報告会(広間)
- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂) お経を読む会(真珠ノ澄円)
- 野村万作・野村萬齋「狂言の会」(総務快俊・亮王 於一関文化センター)
- 二十日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
- 二十一日 貫首 対談(一関ライオンズクラブガバナール今野耕三氏ほか 於茶室)
- 二十三日 毛越寺前貫主南洞頼教師本葬儀(貫首・二山 於毛越寺)
- 二十四日 開山会護摩供(開山堂)
- 二十五日 源義経公東下り行列保存会定期総会(法務宏紹 於滝沢魚店)
- 二十七日 壬生寺様来山(八月十九日、壬生寺円仁大鼓奉演について 総務)

- 二十八日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会(総務光聰 於平泉文化遺産センター)
- 二十九日 貫首 エジプト大使館訪問 平泉町観光審議会(執事長 於役場)
- 平泉文化観光振興基金運営委員会(執事長 於役場)
- 三十日 一関・平泉地域DMOの設立に関する懇談会(執事長・総務快俊 於役場)
- 三十一日 両磐酒造主催「関山 新酒の会」(参与秀圓・執事長 於ホテルサンルート一関)

- ◇四月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 天台陸奥教区仏教青年会総会(執事長 於毛越寺)
- 四 日 御修法「普賢延命大法」(十一日、貫首 於延暦寺)
- 六 日 平泉観光協会理事会(執事長)
- 八 日 仏生会(本堂) お経を読む会(法泉院)
- 九 日 JA県産米「金色の風」豊作祈願法要及び播種セレモニー(本堂・本堂前庭)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 東稲山サクラの会総会(管財章興 於役場)
- 十四日 熊本地震物故者慰霊法要(本堂)
- 春の藤原まつり交通警備会議(執事長・管財章興 於泉橋庵総本店)
- 十六日 恒例花まつり子供大会



- 十七日 道の駅平泉オープン前セレ
モニー(執事長)
- 十九日 平泉世界遺産登録五周年事
業実行委員会(総務晋照 於役場)
弁慶力餅競技保存会総会
(参拜秀厚 於芭蕉館)
- 二十日 平泉菊花会総会(管財章興 於
夢乃風)
- 二十二日 平泉商工会青年部通常総会
(法務宏紹 於大沢温泉)
- 二十二日 西行桜の森まつり植樹会
(管財章興)
- 天台宗陸奥教区寺庭婦人会
総会(執事長 本堂)
- 檀徒総代・世話人会総会(執
事長・法務他 於武蔵坊)
- 二十三日 桜友会清掃奉仕(北参道)
- 毛越寺貫主藤里明久師晋山
式(貫首・一山 於毛越寺)
- 二十七日 道の駅平泉開所式(貫首・秀法)
- 二十九日 西行法師追善法要(本堂)
- 第三十八回西行祭短歌大会(講

- 師 栗木京子氏「西行の旅の歌」
京セラオペテック元社長福永正
三氏他来山(貫首)
参議院議員木戸口英司氏来山
(貫首・執事長)
- ◇五月
- 一日 春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
郷土芸能奉演(一関 行山流舞
川鹿子躍)
- 二日 開山護摩供(開山堂)
酒田市観光物産協会様来山
(貫首挨拶)
郷土芸能奉演(江刺 行山流角
懸鹿躍)
春の藤原まつり「源義経公東下
り行列」歓迎レセプション
(執事長 於武蔵坊)
- 三日 源義経公東下り行列(義経公
役 俳優横浜流星)

- 郷土芸能奉演(衣川 川西念佛
劍舞)
- 四日 古実式三番
狂言「盆山」
能 「竹生島」
郷土芸能奉演(胆沢 行山流都
鳥鹿踊/胆沢 朴ノ木沢念仏劍舞)
- 五日 古実式三番 「開口」
狂言「盆山」
能 「西王母」
郷土芸能奉演(平泉 達谷窟毘
沙門神楽)
- こどもの日企画こいのぼりを
作ろう(本堂)
- 六日 山王講(山王堂)
- 七日 JA県産米「金色の風」田植え
安全祈願法要(本堂)
- 九日 四寺廻廊総会(執事長・総務澄
円・法務宏紹 於電通東日本仙台
支社)
- 十日 中尊寺菊まつり協賛会総会
(本堂上段の間)

- 十一日 光勝院建設委員会
東日本震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
ウエーサカ仏教会総会(法務
宏紹 於一関松竹)
- 十三日 淡交会岩手南支部様茶会
(茶室・本堂・庫裡広間)
- 十四日 カルパンデイナー奉納演奏
(本堂)



北上市和賀地区岩沢自治会主催

- 「山菜を味わう会」(貫首・参
与光中・仏文所長邦世 於羽山ふ
れあいセンター)
- 十五日 光勝院建設委員会
讚衡蔵運営委員会
- 十六日 岩手県観光協会賛助会員全
員協議会(総務秀法 於ホテル
メトロポリタン盛岡)
- 十七日 群馬教区東前橋部様団参
平泉観光推進実行委員会総
会(執事長 於役場)
- 十九日 貫首 講演(徳尼公没後八〇〇
年 平泉・中尊寺貫首 山田俊和
師の講話を聴く会 於出羽遊心館)
- 二十日 第二十回仙台青葉能(貫首・随
行亮王 於仙台電力ホール)
- 長瀧白山神社若宮多門宮司他
来山(執事長・法務宏紹)
- お経を読む会(金剛院)
- 中尊寺文書調査研究発表
(庫裡広間)
- 二十四日 岩手県文化財愛護協会総会

- (管財章興 於岩手県立博物館)
- 平泉商工会通常総会(執事長
於商工会館)
- 二十五日 平泉をきれいにする会総会
(管財五大 於役場)
- 二十八日 曲水の宴(総務澄円 於毛越寺)
- 二十九日 日中友好宗教者懇話会創立
五十周年記念祝賀会(貫首・
参与光中 於帝國ホテル)
- 三十日 平泉町世界遺産推進協議会
役員会(執事長 於文化遺産セン
ター)
- 光勝院建設委員会
- 平泉芭蕉祭全国俳句大会実
行委員会(総務澄円 於役場)
- ◇六月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 観福寺住職多門真咲師晋山
式(貫首・一山 於一関観福寺)
- 四日 伝教会(御影供 本堂)
- 六日 平泉世界遺産推進協議会総

会(総務澄円 於文化遺産センター)
 十日 貫首 講話(立正佼成会花巻分会落慶記念式典 於同教会)
 天台宗陸奥教区第二部檀信徒会総会(於武蔵坊)
 十一日 法華経一日頓写経会(本堂)
 十三日 四寺廻廊法要(一・二・三老・円乗院・執事長他 於立石寺)
 日蓮宗宗議会議員様一行来山(貫首案内)
 十四日 曹洞宗全国宗務所長会様一行来山(貫首挨拶)
 十五日 文化庁・東京文化財研究所・東京国立博物館・寛永寺訪問(執事長・管財章興他)
 十七日 「平泉世界遺産の日」平和祈願法要(本堂)
 「平泉世界遺産の日」シンポジウム(本堂)
 十八日 第二十五回ふるさと平泉会総会(法務宏紹 於浅草ビューホテル)

二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)
 一関警察官友の会総会(執事長 於豊隆会館)
 二十一日 平泉ユニバーサル観光推進会議(執事長 於役場)
 栃木真言宗智山派寶蓮寺様団参(法務宏紹案内)
 二十三日 第六十七回「社会を明るくする運動」平泉町推進委員会(執事長 於役場)
 一隅を照らす運動理事会(貫首 於宗務庁)
 二十六日 ウエーサカ式典(法務宏紹・総代世話人 於一関西光寺)
 一関・平泉地域DMO設立検討委員会(執事長 於一関市民センター)
 二十九日 第五十六回平泉芭蕉祭全国俳句大会(於毛越寺)
 平泉世界遺産の日平和の祈り(貫首他 於旧観自在王院庭園)
 三十日 光勝院建設委員会

◇七月
 一日 月次大般若(本堂)
 毛越寺刀八毘沙門天参拝(修復記念特別公開 貫首・一山 於毛越寺)
 五日 ウイーン・フィル奉納コンサート(本堂)
 青蓮院門跡門主東伏見慈晃師来山(貫首・執事長挨拶)
 オーストリア大使フーベルト・ハイツス氏来山(貫首案内)
 九日 お経を読む会(瑠璃光院)
 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
 光勝院建設委員会
 十四日 中尊寺ハス贈呈(管財五大 於奥州市正法寺)
 十五日 文化庁長官宮田亮平氏来山(貫首挨拶)
 平泉水かけ神輿宵宮祭(貫首・執事長 於旧観自在王院庭園)
 富岡八幡宮神輿総代連合会

様との交流会(執事長 於武蔵坊)
 十六日 平泉総社神輿渡御
 十七日 清衡公御月忌(胎室供 本堂)
 貫首 法話(日本ユネスコ全国大会エキスカーション一行様 本堂)
 二十二日 貫首 講話(一隅を照らす運動推進福島大会 於やすらぎ齋場川俣ホール)
 河北新報創刊百二十年「感謝のつどい」(公文所長邦世 於ホテルメトロポリタン仙台)
 貫首 講話(「青空説法」 参与光中同行 於多聞院伊澤家)
 讚衡蔵ギヤラリートーク(栗樹王院)
 小松代孝氏瑞宝単光章受章祝賀会(管財章興 於武蔵坊)
 平泉総社神輿会「神酒開き」(参拝秀厚 於泉橋庵)
 夏休み早朝坐禅会(本堂)
 讚衡蔵ギヤラリートーク(栗樹王院・管財章興)

二十四日 光勝院建設予定地追加発掘説明会(平泉文化遺産センター島原氏)
 二十五日 兵庫教区相應峰寺様団参(執事長挨拶)
 二十六日 全国知事会議IN岩手一行来山(貫首挨拶)
 校友会清掃奉仕(開山堂)
 二十七日 光勝院建設委員会
 照井堰用水「世界かんがい施設遺産」登録記念祝賀会(執事長 於ペリーノホテル)
 中尊寺寺子屋(メビウスの会自然観察会 境内)
 二十九日 讚衡蔵ギヤラリートーク(栗樹王院・管財章興)
 白山開山千三百年祭・相応和尚千百年大法会(貫首・随行亮王 於岐阜県長瀧寺及び長瀧白山神社)
 千手観音X線調査(東北大学大学院院長岡龍作氏他 管財)

三十日 夏休み早朝坐禅会(本堂)
 讚衡蔵ギヤラリートーク(栗樹王院・管財章興)
 三十一日 貫首 法話(天正大学夏季ゼミ一行様 本堂)
 平泉大文字送り火警備会議(法務宏紹・管財五大 於芭蕉館)
 ◇八月
 一日 月次大般若(本堂)
 讚衡蔵運営委員会
 二日 中尊寺門前会総会(執事長・参拝秀厚 於平泉レストハウス)
 三日 天台宗世界平和祈願法要・比叡山宗教サミット三十年「世界平和の祈りの集い」(四日、貫首 於延暦寺)
 十五日 十五時半「平和の鐘」打鐘
 「平泉の文化遺産」の拡張登録に係る国際会議(管財章興 於メルパルク東京)
 讚衡蔵ギヤラリートーク

(観音院・管財五大)
中尊寺子屋(種だんご作り
境内)



- 六日 夏休み早朝坐禅会(本堂)
讚衡蔵ギャラリートーク
(葉樹王院・管財章興)
- 七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)
- 十日 金澤翔子書展レセプション
(貫首 於アニヴェルセル表参道)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)

- 十四日 第四十回中尊寺新能
「翁」
能「羽衣」
狂言「鍋八撥」
半能「金札」
十五日 山崎理恵子氏、平和合作画制作(本堂前)
平成二十九年平泉町成人式
(執事長 於武蔵坊)
- 十六日 第五十三回平泉大文字送り火
(濃霧のため延期。二十日に実施)
毛越寺浄土庭園法灯会(貫首
於毛越寺)
- 十八日 陸前高田市小友地藏尊にて
回向(貫首・随行晋照)
- 十九日 栃木県壬生寺円仁太鼓奉納
演奏(本堂)
中尊寺子屋(かんざん亭)
- 二十日 観福寺施餓鬼会(真珠院・瑠璃
光院・観音院・大徳ノ有司)
毛越寺施餓鬼会(円乗院)
玉川学園ハンドベル部・

- オーケストラ部奉納演奏
(本堂)
- 二十一日 戸津説法(西郊良光師)聴聞
(貫首 於大津市東南寺)
光勝院建設委員会
国土交通省観光立国推進有識者会
議委員石井至氏来山(執事長・
総務晋照)
- 二十二日 平泉ユニバーサルデザイン
観光推進事業実行委員会
(総務秀法 於役場)
- 二十三日 施餓鬼会御逮夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
- 二十六日 大館錦神社参拝・花岡鉦山
にて回向(貫首・藤里毛越寺貫
主・随行晋照)
- 二十七日 蜂神社例大祭(管財章興 於紫
波町同神社)
- 北上川リバーカルチャーア
ソシエーション(以下、RCA)
理事会・総会・文化セミナー
(貫首・執事長 於ペリーノホテル)

- 二十九日 貫首 エジプト大使館訪問
- 三十日 平泉町観光振興計画策定委
員会(総務澄円 於役場)
- 三十一日 龍玉寺施餓鬼会(法務宏紹)

◇九月

- 一日 月次大般若(本堂)
瀬見温泉亀割観音祭礼(参拝
秀厚 於最上町亀割観音堂)
- 二日 平泉町消防団第五分団研修
旅行(三日、管財章興 於福島・
山形方面)
高野山真言宗参与会地方研
修会様一行団参(執事長挨拶)
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
タイガーエア台湾会長張鴻鐘
氏・台湾E2旅行社社長游金章
氏一行来山(貫首挨拶・執事長
案内)
- 六日 メトロポリタン美術館様来
山(真珠院案内)
- 九日 五郎沼薬師神社秋季例大祭

- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
(積善院 於紫波町同神社)
- 十五日 泉養寺訪問(如意輪講式打合せ
貫首・円乗院・積善院・事務局)
- 十六日 中尊寺文書調査(十八日)
(於奥州市江刺区)
- 十七日 藤原経清公命日祭(総務澄円
白符忌(本堂))
- 十八日 エフエム岩手平泉支局開局
式(法務宏紹 於浄土の館)
- 十九日 赤堂稻荷例祭(護摩供)
- 二十三日 秋彼岸会法要(常行三昧 本堂)
お経を読む会(大徳院)
- 二十四日 三陸郷土芸能奉演(南三陸町
行山流水戸辺鹿子踊/南三陸町
入谷打囃子/宮古市 津軽石さん
踊り)

◇十月

- 一日 月次大般若(本堂)
中尊寺通りホコ天まつり開
会式(執事長 於中尊寺通り)
- 二日 慈眼会(本堂)
讚衡蔵運営委員会
- 三日 中尊寺菊まつり協賛会役員
会(庫裡広間)
- 四日 第二十五回平泉町社会福祉大
会(総務澄円 於武蔵坊)
- 五日 天台宗埼玉教区地福寺様団参
(執事長案内)
- 六日 平泉古事の森事業(管財五大)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回
向月命日法要(本堂)
- 十三日 女声合唱団しらたま奉演

- (中尊寺で「風のなかの挨拶」震災復興祈願の曲を歌う会 本堂)
- 十四日 平泉町民号(十六日、管財章興 於山口・広島方面)
- 北上川RCA主催北上川視察船乗船(参拜秀厚)
- 十五日 お経を読む会(常任ノ亮王)
- 十六日 平泉町文化財調査委員会議(管財澄円)
- 二十日 菊まつり開闢法要
- 金色堂調査(文化庁・東京文化財研究所 管財)
- 二十二日 青蓮院秋季熾盛光法要(貫首 於青蓮院宸殿)
- 二十二日 毛越寺普賢院法嗣結婚披露宴(貫首・執事長 於ペリーノホテル)
- 二十三日 霊雲院則竹秀南師他来山(貫首挨拶)
- 図柄入り平泉ナンバーデザイン選考委員会(総務晋照 於役場)
- 二十五日 大池跡発掘調査現地報告会
- 秋期企画「経蔵法楽」声明の夕べ(経蔵)
- 六日 エジプト新聞社ガバナ氏御夫妻来山(貫首挨拶)
- 七日 第二回平泉町観光振興計画策定委員会(総務澄円 於役場)
- 八日 妙心寺派社会事業協議会施設会議一行来山(執事長挨拶)
- 十日 写経奉納式(本堂)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 秋期企画「経蔵法楽」声明の夕べ(経蔵)
- 十二日 長島小学校統合四十周年記念式典及びふれあいコンサート(管財章興 於長島小学校体育館)
- 五輪塔調査(石造物研究会 管財章興)
- 十五日 叡山講福聚教会東日本大震災物故者七回忌慰霊法要並びに復興祈願法要(大導師森川宏映天台座主親下 本堂)

- 二十七日 江刺餅田保存会様来山(大長寿院挨拶)
- 観光庁観光地域振興課長畠中秀人氏他来山(執事長挨拶)
- 光勝院建設委員会
- 平泉観光協合理事会(執事長)
- 讚衡蔵秋の特別展示(十一月二十四日)
- 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 紅葉銀河(参道の紅葉を照らす。11月12日)
- 秋期企画「経蔵法楽」声明の夕べ(経蔵)
- 三十一日 貫首 講話(江刺仏教会様 於ニュー江刺)
- 妙法院門跡門主杉谷義純大僧正晋山式(参与秀圓・執事長 於妙法院宸殿)
- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕
- 藤原四代公追善法要
- 十六日 叡山講福聚教会東日本奉詠舞大会(貫首 於花巻市文化会館)
- 十八日 菊まつり表彰式(本堂上段の間)
- 二十日 日中友好宗教者懇話会総会(貫首 於本久寺)
- 真言宗豊山派豊船会様団参(執事長挨拶)
- 山内瑠璃光院菅野夕カ様逝去
- 天台会御逮夜(本堂)
- 二十四日 天台会(御影供 本堂)
- 一関文化祭菊花展表彰式(管財五天 於一関文化センター)
- 二十六日 金色堂仏像調査(青山学院大学 浅井和春氏他 管財)
- 二十七日 一関地区法人会平泉支部経済講演会(総務澄円 於武蔵坊)
- 二十八日 金色堂大修理五十年勉強会(講師 小西暁也氏 庫裡広間)



天台会の朝(平成29年11月24日)法要前、天台大師の御影を、現在収蔵されている宝物館「讚衡蔵」から遷座する。今年は得度したばかりの雛僧二人が、御影の入った長櫃を担い本堂へ。

- 稚児行列
- 天台宗北総教区清水寺様団参野村万作・野村萬齋「狂言の会」(貫首 於一関文化センター)
- 郷土芸能奉演(一関 行山流舞川鹿子躍/栗原 栗原神楽)
- 二日 菊供養会(本堂)
- お経を読む会(貫首)
- J A原産米「金色の風」奉納式(本堂)
- 郷土芸能奉演(江刺 行山流角懸鹿躍)
- 三日 伊藤園お茶振舞い(かんざん亭前)
- 中尊寺能「枕慈童」
- 謡・仕舞(二葉きりり園、一関喜桜会奉納 能舞台)
- 郷土芸能奉演(胆沢 行山流都鳥鹿踊/一関 京津畑神楽/衣川 川西念佛剣舞)
- 四日 山内薬樹王院後任得度式(本堂)

御奉納者 御芳名

平成二十八年十二月〜平成二十九年十一月

一 電子ピアノ 一台

一関市 有限会社あべちう 会長 阿部興紀様

一 岩手県産米「金色の風」 一四五kg

金色の風栽培研究会様

浄財御奉納者 御芳名

平成二十八年十二月〜平成二十九年十一月

海鋒 守様 三万円
 (株)六曜社様 三十万円
 寺島安則様 十万円
 大門地蔵尊 五万円
 (有)平泉観光写真社様 二十万円
 (株)空地音ハーモニ 菊池美緒様 三万円
 立正佼成会盛岡教会様 三万円
 立正佼成会花巻教会様 三万円

念法真教 総本山 金剛寺様 五万円
 命徳寺様 十万円
 越中八尾 おわら道場様 三万円
 月山寺 光榮純貴様 三万円
 天台宗災害対策本部様 百万円
 天台宗茨城教区宗務所様 三万円
 龍泉寺 佐藤正延様 三万円
 戸津圭之介様 三万円
 金色の風栽培研究会様 二十三万円
 山富観光 陳 錦徳様 三万六千円
 東円寺 高森良昌様 三万円
 茶道裏千家淡交会青年部 五万円
 茶道裏千家淡交会 岩手南支部様 十五万円
 国際興業(株) 小佐野隆正様 十万円
 酬恩寺 大崎市様 三万円
 白山神社 小林敬直様 二十万円
 佐藤芙蓉様 十万円
 日蓮宗 同心会様 五万円
 正蓮寺 大塩孝信様 三万円

長胤寺 渡邊義生様 三万円
 藻原寺 持田日勇様 三万円
 曹洞宗 全国宗務所長会様 五万円
 日光山輪王寺門跡 小暮道樹様 五万円
 渡辺紀之様 三万円
 (有)千葉恵製菓様 十万円
 最勝寺様 五万円
 国清寺 世圓様 三万円
 青蓮院門跡様 五万円
 平泉・一関国際音楽祭実行委員会様 十万円
 毛越寺様 八万円
 土屋真治様 三万円
 瑞泉郷 千葉鴻儀様 五万円
 壬生寺様 五万円
 正法寺 盛田正孝様 七万円
 高野山真言宗 参与会様 三万円
 川崎港湾荷役協会 三田 久様 三万円
 岩間智子様 十万円
 佐藤章雄様 三万円

浄土宗 岩手教区教務所様 五万円
 川嶋印刷(株) 菊地慶矩様 五万円
 地福寺・護持会様 五十万円
 原 和子様 三万円
 女声合唱団 しらたま様 三万円
 清水寺 圓藤弘典様 四万円
 (株)リードコナン 伊東晃郎様 三万円
 叡山講 福聚教会様 十万円
 常住寺様 五万円
 一関信用金庫 平泉支店様 三万円
 (順不同)

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

平成二十八年十二月〜平成二十九年十一月
 一関市 川嶋印刷(株)様 一基
 一関市 一関信用金庫様 一基
 平泉町 (株)平泉観光レストセンター様 一基

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成二十八年十二月〜平成二十九年十一月
 平泉町 川嶋印刷(株) 菊地慶矩様 十万円
 中野区 中村武司様 十三万六千円
 青森市 佐々木幸子様 二十九万五千円
 一関市 (有)豊隆軌道 千葉幸八様 六万円
 和泉市 辻林正博様 六万円
 平塚市 橋村秀雄様 三万円
 旭川市 渡邊良弘様 三万五千円
 秋田市 木村英夫様 四万円
 一関市 (株)東北鉄興社様 三万円
 平泉町 (株)フタバ平泉様 三万円

青森県 工銀青果 工藤一男様 季毎御供物
 南部町 松原晴樹様 季毎御供物
 新潟市 つくし 藤枝恵枝子様 季毎御供物
 水戸市 (有)池田不動産 池田陸奥男様 季毎御供物
 黒石市 小島ヒデ子様 季毎御供物
 仙台市 笹 隆治様 季毎御供物
 弘前市 大門屋様 金色ダルマ(特大)二体 (順不同)

新宿区 (有)シー・エヌエス様 三万円
 銚子市 (株)イクオリティー 石毛裕之様 三万円
 平泉町 一関信用金庫平泉支店様 三万円
 一関市 及川元一様 三万円
 栗原市 (有)金成工務店様 三万円
 一関市 東北建工企業(株) 今野幸広様 三万円
 一関市 山平様 三万円
 一関市 一八 渋谷正幸様 三万円
 一関市 (株)精茶百年本舗 衡年茶一二〇〇個 三万円
 宮城県 山口 昇様 三万円
 南三陸町 山口 昇様 三万円
 平泉町 北都高速運輸倉庫東北 小野寺芬様 六万五千円
 栗原市 澤邊幸隆様 三万五千円
 横手市 赤川優良様 三万五千円
 横浜市 瀬下 聡様 三万五千円
 一関市 橋本友厚様 三万円
 一関市 岩田英隆様 三万円
 奥州市 畠山建設(株)様 三万円
 奥州市 佐藤恵一様 三万円
 二戸市 (有)岩食商事 米沢 励様 季毎御供物

法華経一日頓写経会

六月十日(第二日曜日) 午前十時より

六万八千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。
 奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を追善供養するために修したという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。
 TEL 〇一九一(四六)二二二一

ご祈禱・ご回向のご案内

□ 当山祈禱道場不動堂にて祈禱勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈禱後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例 厄除開運 家内安全 當病平癒 商売繁昌 良縁成就
交通安全 学業成就 身体健全 受験合格 心願成就 等

□ 本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証として「追善殖福証」をお渡し（不要の方は当山にて奉納）いたします。志納金は一件三千円より。

例 ○○家先祖代々供養 ○○○居士（大姉）供養
○○家水子供養 東日本大震災物故者供養 等

※ご来山申込みが難しい方は、ファックス等でもお申込みいただけます。
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL 〇一九一（四六）二二二一
FAX 〇一九一（四六）二二二六



殖福証



ご祈禱札



修正会

修正会とは、正月に修する法要のこと。中尊寺では元日から8日まで、山内の諸堂を会場とし、諸尊仏に面座して牛玉宝印（本尊の種字が刻された木製の印）を加持し、天下泰平（世の中がよくおさまり、穏やかなこと）、万民豊楽（人々がみな豊かで、楽しく暮らせること）、五穀豊穰（米などの作物が豊かに実ること）が祈願される。

▽ 本号、鈴木文彦先生、石寒太先生からは、講演録の枠を大きく超えた玉稿を頂戴しました。ぜひご高覧ください。

▽ 世相が「北」の一字で締め括られた昨年。新年を迎えた平泉は、年末の予報とは違い修正会結願の八日まで、思っていた以上に穏やかな日が続きました。「安穩」、「安心」という言葉が頭に浮かび……。今年は「安」の一字であらわされる一年になりますように。

▽ 寺報編集のため、前年度までに発行された二十二冊、すべてが仕事場の書棚にあります。本号を含めると、その合計の厚さが、手元の『広辞苑』より厚くなることに気付きました。創刊以来今日まで、ご寄稿いただいた皆様、お力添えいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

(北嶺澄照)

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。
ぜひご利用下さい (<http://www.chusonji.or.jp/>)。

中尊寺(寺報)『関山』第二十三号

平成三十年(二〇二八)二月一日

発行 中尊寺

(執事長 菅原光聰)

〒〇三九一四一九五

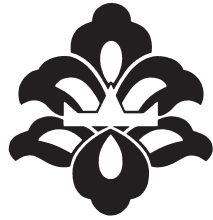
岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)



パッチワークキルト作品「黎明」(エッセー72ページ)



〈発行 中尊寺〉